

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成19年度国庫補助事業報告書

一つ山古墳
岩崎山4号墳

2008. 3

さぬき市教育委員会

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成19年度国庫補助事業報告書

一つ山古墳
岩崎山4号墳

2008. 3

さぬき市教育委員会

序

平成16年度から津田湾を取り囲むように作られている古墳群について発掘調査を実施しております。

今年度は一つ山古墳と、新たに岩崎山4号墳を調査いたしました。

一つ山古墳は張出し状の施設の有無について確認いたしましたが、そうした施設はなく、円墳ということで結論が出ました。香川県の古墳ではこれまで剖抜式石棺は前方後円墳から発見されていましたから、今回の確認は円墳からということとなり、重要な成果となりました。

岩崎山4号墳は江戸時代の『讃岐国名勝図絵』にも紹介されている古くから知られた古墳です。昭和26年に京都大学によって学術調査が実施され、鏡や武器など多くの出土品と剖抜式石棺が確認されています。今回は墳丘の大きさを確認いたしました。たくさんの埴輪片が出土し、津田湾沿岸の古墳の性格を考える上で貴重な資料となりました。

最後になりましたが、調査にあたりましてご理解とご指導をいただきました地元の皆様ならびに関係各位、また、調査にご協力とご援助をいただきました方々に厚くお礼を申しあげます。

平成20年3月

さぬき市教育委員会

教育長 豊田 賢明

例　　言

1. 本書は、さぬき市教育委員会が平成19年度国庫補助事業として実施した発掘調査報告書である。
2. 今回の発掘調査はさぬき市津田町鶴羽1548に所在する一つ山古墳と、さぬき市津田町津田2250番地7・9・12・22・23・13、2251番地3、2270番地1に所在する岩崎山4号墳である。
3. 調査の実施はさぬき市教育委員会が調査主体となり事務を、現場実務は大川広域行政組合理藏文化財係が実施した。
4. 本書の編集作成は大川広域行政組合理藏文化財係阿河鏡二、松田朝由が行なった。また、遺物整理を武井美和、松村春美、遺物実測を松田朝由、多田歩、トレースを多田歩が行なった。
5. 報告で用いる北は一つ山古墳が国土座標第IV系（世界測地系）の北、岩崎山4号墳が磁北である。縮尺は掲載図面内に掲載している。
6. 遺物観察表及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖1998年度版』を使用している。
7. 報告書で使用した写真の一部（図版6）は日本地図センターより購入したものである。
8. 本事業及び本書の作成にあたっては、地権者をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。（敬称略・五十音順）

香川県教育委員会生涯学習・文化財課、さぬき市シルバー人材センター、瀬戸内海歴史民俗資料館、内田和伸、遠藤亮、大久保徹也、乙井二三雄、海造博史、鎌田敬子、木村勇、熊浦貞男、藏本晋司、黒川信義、後井健、高岸守、田村良子、中川浩子、丹羽佑一、信里芳紀、富士川仁、藤田茂雄、古瀬清秀、溝潤正則、六車恵一、六車ふみ子、六車美保、好井香織、米田武子、渡部明夫

本文目次

序文

例言

一つ山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 墳丘測量について	2
第3章 トレンチの設定	5
第4章 調査の成果	5
第1節 各トレンチの状況	5
(1) トレンチ7	5
(2) トレンチ8	10
(3) トレンチ2	10
(4) トレンチ3	10
第2節 刺抜式石棺	12
第3節 出土遺物	14
(1) 出土状況	14
(2) 遺物について	14
第5章 まとめ	14
第1節 墳丘について	17
第2節 刺抜式石棺について	17
第3節 壺形埴輪について	17
第4節 一つ山古墳の評価	19
	20

岩崎山4号墳

第1章 調査に至る経緯と経過	23
第1節 調査に至る経緯	23
第2節 調査の経過	23
第2章 岩崎山14号墳に関する過去の記録	24
第3章 トレンチの設定	26
第4章 調査の成果	26
第1節 各トレンチの状況	26
(1) トレンチ1	26
(2) トレンチ2	29
(3) トレンチ3	32
(4) トレンチ4	35
(5) トレンチ5	37
(6) 後円部南西部の畠地	38

第2節 出土遺物	40
(1) トレンチ1	40
(2) トレンチ2	44
(3) トレンチ3	48
(4) トレンチ4	48
(5) トレンチ5	54
(6) 後円部南西部の畠地	54
第5章まとめ	57
第1節 墳丘の特徴について	57
(1) 挖切りについて	57
(2) 墳丘裾の基盤について	57
(3) 外表施設について	57
第2節 墳丘規模について	57
第3節 円筒埴輪について	57
(1) 岩崎山4号墳円筒埴輪の特徴	59
(2) 時期的な位置づけ	60
(3) 意義づけと今後の課題	60

挿図目次

一つ山古墳

第1図	遺跡位置図(1/10,000)	1
第2図	墳丘断面図(1/250)	2
第3図	墳丘測量図(1/250)	3
第4図	崩落土法面断面図(1/300)	4
第5図	トレント配置図(1/500)	5
第6図	トレント7・8平面図及び断面図(1/60)	6
第7図	トレント7下段葺石平面図及び断面・立面図(1/20)	7
第8図	トレント7上段葺石平面図及び断面・立面図(1/20)	8
第9図	トレント8平面図及び断面・立面図(1/20)	9
第10図	トレント2平面図及び断面図(1/60)	11
第11図	トレント3平面図及び断面図(1/60)	12
第12図	石棺出土状況図(1/10)及び石棺図(1/4) 及び赤山古墳2号石棺との比較(1/8)	13
第13図	遺物出土状況図(1/60)(1/8)	15
第14図	出土遺物(1/4)(1/2)	16
第15図	墳丘復元図(1/200)	18

岩崎山4号墳

第16図	遺跡位置図(1/10,000)	23
第17図	昭和5年墳丘図(1/700)	25
第18図	昭和26年墳丘図(1/700)	25
第19図	昭和29年墳丘図(1/700)	25
第20図	トレント配置図(1/800)	26
第21図	トレント1平面図及び断面・立面図(1/60)	27
第22図	トレント1葺石埴輪検出状況及び葺石平面・立面図(1/30)	28
第23図	トレント2平面図及び断面・立面図(1/60)	30
第24図	トレント2葺石埴輪検出状況及び葺石平面・立面図(1/30)	31
第25図	トレント3平面図及び断面・立面図(1/60)	33
第26図	トレント3葺石埴輪検出状況及び葺石平面・立面図(1/30)	34
第27図	トレント4平面図及び断面・立面図(1/60)	36
第28図	トレント4葺石埴輪検出状況及び葺石平面・立面図(1/30)	37
第29図	トレント5平面図及び断面・立面図(1/60)	38
第30図	畠地北東隅平面図及び断面・立面図(1/60)	39

第31図	トレント1遺物出土状況図(1/30)(1/8).....	41
第32図	トレント1出土遺物(1)(1/4).....	42
第33図	トレント1出土遺物(2)(1/4).....	43
第34図	トレント2遺物出土状況図(1/30)(1/8).....	45
第35図	トレント2出土遺物(1)(1/4).....	46
第36図	トレント2出土遺物(2)(1/4).....	47
第37図	トレント3遺物出土状況図(1/30)(1/8).....	49
第38図	トレント3出土遺物(1)(1/4).....	50
第39図	トレント4遺物出土状況図(1/30)(1/8).....	51
第40図	トレント4出土遺物(1)(1/4).....	52
第41図	トレント4出土遺物(2)(1/4).....	53
第42図	トレント5、畠地出土遺物(1/4).....	55
第43図	線刻埴輪拓影図(1/2).....	56
第44図	墳丘復元図(1/400).....	58
第45図	円筒埴輪口縁部高と突帯の比較(1/4).....	60

表 目 次

一つ山古墳

表1	一つ山古墳出土遺物観察表.....	21
----	-------------------	----

岩崎山4号墳

表2	色調のカウント(全破片をカウント).....	56
表3	色調ごとの外面調整(突帯片をカウント).....	56
表4	色調ごとの内面調整(突帯片をカウント).....	56
表5	透孔の分類.....	59
表6	透孔の位置.....	59
表7	岩崎山4号墳 出土遺物観察表1.....	61
表8	岩崎山4号墳 出土遺物観察表2.....	61

図版目次

一つ山古墳

- 図版1-1 調査前状況①(南西側)
- 図版1-2 調査前状況②(南西側)
- 図版1-3 調査前状況③(南西側)
- 図版1-4 調査前状況④(南東側)
- 図版1-5 調査前状況⑤(南東側)
- 図版1-6 トレンチ7下段葺石検出状況①
- 図版2-1 トレンチ7下段葺石検出状況②
- 図版2-2 トレンチ7下段葺石平坦面検出状況
- 図版2-3 トレンチ7下段葺石基底石検出状況
- 図版2-4 トレンチ7上段葺石検出状況①
- 図版2-5 トレンチ7上段葺石検出状況②
- 図版2-6 トレンチ7・8調査状況①
- 図版3-1 トレンチ8葺石検出状況①
- 図版3-2 トレンチ8葺石検出状況②
- 図版3-3 トレンチ7・8調査状況②
- 図版3-4 トレンチ8葺石基底石検出状況①
- 図版3-5 トレンチ8葺石基底石検出状況②
- 図版3-6 トレンチ7・8調査状況③
- 図版4 弔抜式石棺
- 図版5 出土遺物

岩崎山4号墳

- 図版6-1 調査区周辺航空写真(昭和22年)
図版7-1 遠景(南から)
図版7-2 墳丘(前方部東から)
図版8-1 後円部北側
図版8-2 後円部(北から 手前はトレンチ1)
図版9-1 トレンチ1(北から)
図版9-2 トレンチ1基底石
図版10-1 トレンチ2(西から)
図版10-2 トレンチ2(東から)
図版10-3 トレンチ2基底石
図版11-1 トレンチ4(東から)
図版11-2 トレンチ4基底石
図版12-1 トレンチ3(西から)
図版12-2 トレンチ5(東から)
図版13 出土遺物(1)
図版14 出土遺物(2)
図版15 出土遺物(3)

一つ山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

さぬき市教育委員会では、津田湾周辺にある古墳群についての内容確認調査を平成16年度から実施しており、一つ山古墳においては平成17・18年度の二ヶ年にわたり実施してきたものである。これらにより墳形や規模などの概要を得ることができたほか、例抜式石棺や葺石、壺形埴輪などの存在や出土を確認したものである。

平成19年度の調査は、前回開催された「津田湾古墳群調査検討委員会」において指摘のあった、突出部の有無についての確認を行い、墳丘の形状・規模の確定にいたることを主眼にしたものである。調査は昨年度と同様に調査主体はさぬき市教育委員会となり、これより依頼を受け大川広域行政組合が調査実務を担当したものである。調査作業は7月下旬より着手し、お盆休みなどをはさみながら9月上旬まで行った。しばしば降雨もあったが、台風などによる大過はなく進み、10月中旬には3ヶ年のまとめ的な現地説明会が開催され、多数の参加者を得ることができたものである。

以下、調査体制及び、調査経過の概略を記す。なお、一つ山古墳及び周辺の歴史的・地理的環

境などについては前年度報告書が詳しく、これを参照願うものとしたい。

(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長	六車 均
課長補佐	山津 勝美
係長	山本 一伸
主事	鶴身 昌大

大川広域行政組合理文化財係

主査	阿河 銳二
主任主事	松田 朝由
技術員	多田 歩
技術員	武井 美和(～9月30日)
技術員	松村 春美(10月1日～)

第2回津田湾古墳群調査検討委員会

検討委員

委員長	六車 恵一
副委員長	丹羽 佑一
委員	古瀬 清秀
委員	渡部 明夫
委員	大久保徹也
委員	内田 和伸
(指導)	齋宜田佳男(文化庁調査官)
(指導)	森 格也(香川県教育委員会)



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

調査期間は平成19年7月23日(月)～9月13日(木)である。

日誌(抄)

平成19年6月11日(月)

第2回 津田湾古墳群調査検討委員会開催
7月23日(月)～25日(木)

一つ山古墳内容確認調査着手 地形測量
拡張範囲を中心に雑木・下草などの伐開
7月26日(木)～8月24日(金)

墳丘南西部にトレントを設定し、掘り下げにかかる。上下二段の葺石やテラス面などを確認する
8月6日(月)～8月10日(金)

トレント調査と合わせ、墳丘南東側拡張範囲
また崖面の地形測量をおこなう

8月27日(月)～

墳丘裾部の状況をより詳しく把握するため、西側に隣接してトレントを追加し調査をはじめる

9月12日(木)午前

香川県教育委員会生涯学習・文化財課埋蔵
文化財担当職員及び、津田湾古墳群調査検討
委員会委員らが視察する

9月13日(木)

機材収納・トレント養生をおこない現場での作業実務を完了とする

10月14日(日)

さぬき市教育委員会主催の現地説明会を開催する。昨年度・昨年度のトレントについても再度掘削し、実見できるようにする。

10月31日(水)～11月1日(木)

全トレントの埋め戻し・養生を行い、調査を終了とする。

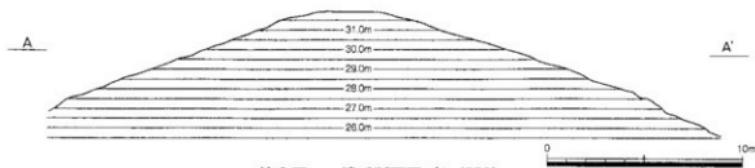
第2章 墳丘測量について

昨年度の調査成果により復元された墳丘の規模は、下段葺石より直径約24～26mを測るものである。このことは一昨年度の測量範囲では現状で残された墳丘のうち、ちょうど南東側はカバーされていないものであった。このため今年度は墳丘南東側について追加測量を行ったものである。測量範囲は南側参道から現在海岸線に昇降する南東側急斜面について、墳裾に復元される標高約28m以下を主体とするものである。

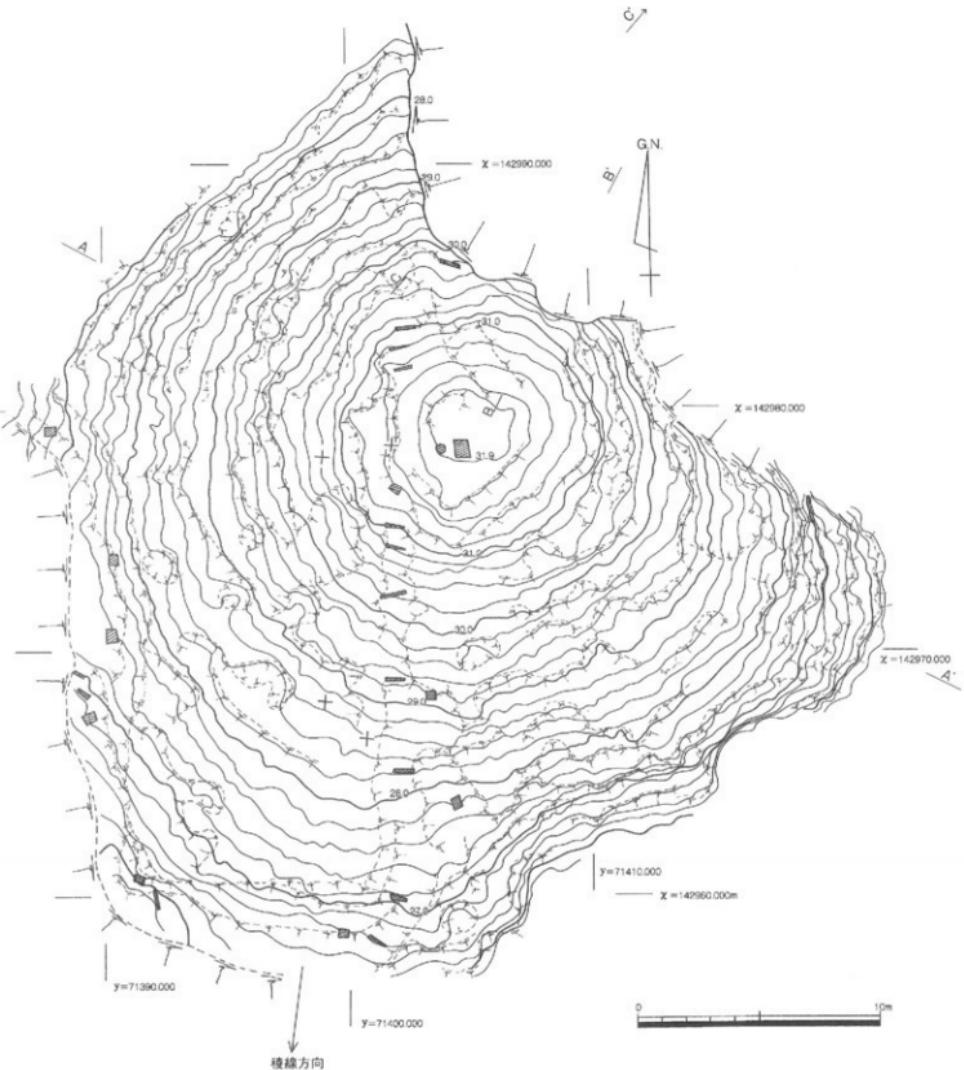
まず参道から南東方向にかけて、ちょうどトレント5の付近では標高約27.5～28mにかけて、比較的大きな崩落による段差がある。これはちょうど参道南端から東側にかけてL字状に伸びているもので、ほぼ南東側の昇降できる斜面の残る幅は約600cmである。崩落面は下位が一部埋まって外見での比高差はないようだが、おむね直垂またはえぐりをとになったきつい勾配で、海岸線へかけてはさらに多段をなしながら下るものである。

では崩落面より上方の地表の状況であるが、これも全体的に改変の跡を各所にとどめるものである。標高約27.8mより下方は階段状の改変が刻まれている。一昨年度の測量範囲下限よりこれら改変までの部分では、比較的旧状を残しているものといえ、標高約28～29mの間は等高線も並びが整ったものである。この傾斜からすぐ下方の約27.4mあたりでは、改変の影響があるも等高線の間隔が減じはじめている。また、27.6m付近において地表面で傾斜変化が認められたものである。ただ、この変化は僅かなものであり明確に視認できるものではないが、墳裾の可能性がうかがわれるものである。

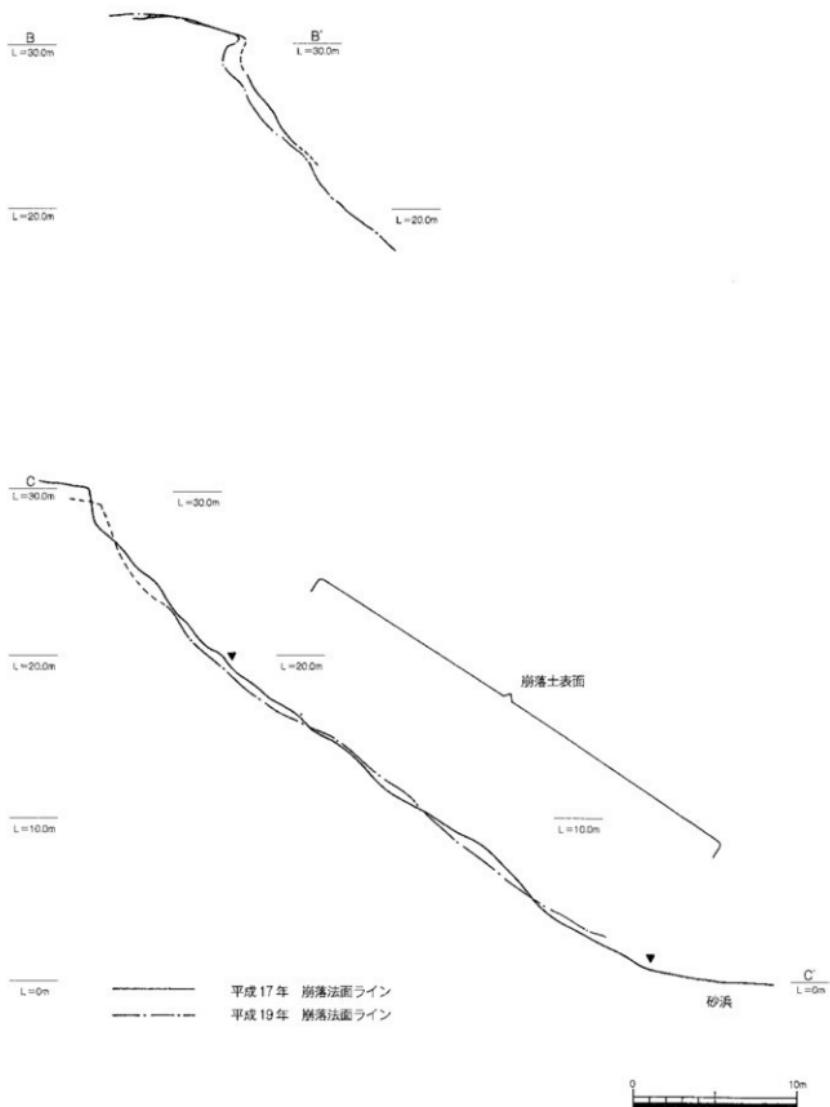
なお、北東崖面であるが、焼伴などに調査開始以来、平成16年度をこえる台風ほかの自然災害を被ることはなかった。このため崖面は現状を維持しているものであるが、崖際立ち木の根元などは注意を要するものといえる。



第2図 墳丘断面図 (1/250)



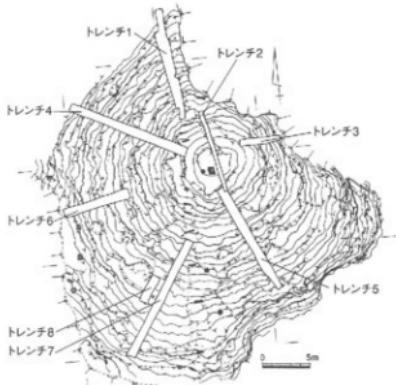
第3図 墳丘測量図 (1/250)



第4図 崩落土法面断面図 (1/300)

第3章 レンチの設定

平成19年度確認調査は先述のとおり突出部の有無について確認を行い、墳形・規模を把握するものである。レンチについては地形測量図や現状をもとにし、参道西側において墳丘中心付近より南東方向に設定したものである。レンチは状況に応じ上段葺石から南側参道にいたる斜面部をカバーするものである。



第5図 レンチ配置図 (1/500)

第4章 調査の成果

第1節 各レンチの状況

(1) レンチ7

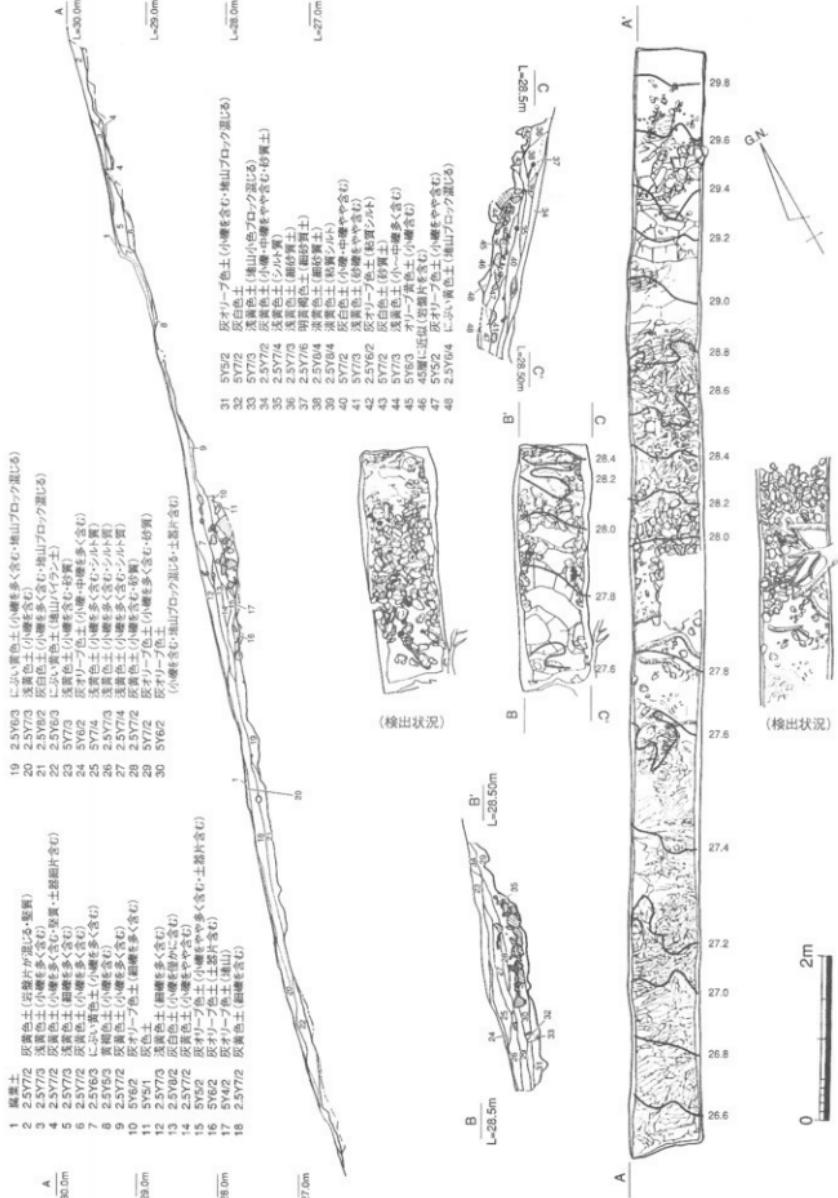
まず、レンチ周囲における地表面の状況をみると、頂部から下って標高約29mあたりまではいくらくか改変を受け、くほみや等高線の乱れはあるが傾斜は勾配を持っている。これより下では標高約28mにかけて等高線の間隔が緩くなり、標高約28.5mあたりでは狭いながらも平坦状になっている。さらにその先端には傾斜変化があり、両側が弧状を呈する等高線のなだらか傾斜でもって南縁を通る参道に至る。レンチは南側参道のなかほど標高約30mを上端にして、参道構築によって削られた法面にいたる標高約26.5mまでの、約0.9×13.6mを測るものである。調査の結果では前年度と同様に上下二段に葺石を検出した。

下段葺石はレンチ上端から約6mのところで検出した。葺石は岩盤を掘削した斜面に構築したもので、整形した岩盤下位は標高約27.9mを測る。裾部からの立ち上がりは角度が約40°と急

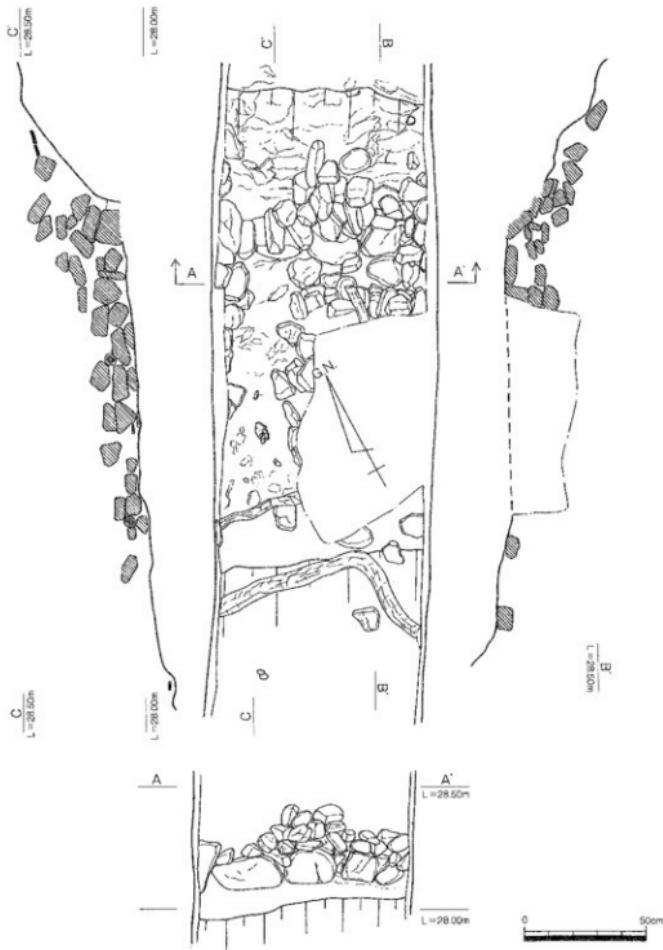
であるが、約40~50°上がったところに傾斜変化をもっている。これは勾配が平坦に近い範囲が長さ約50cmあって、さらに緩い傾斜となって上方へ延びる。葺石の検出状況は良好とはいえないが、基底石の並びと4石ほどの積み上げが確認された。葺石において基底石以外は拳大ほどの亜円や細長の礫を用いている。基底石には長軸20cmから30cmをこえるような石材を用いている。基底石の並びはレンチ幅約80cm内において平面でみると4石あり、多少の歪みはあるが直線的といえ据え方は全形がうかがえる3石では2石が横位である。立面でみると基底石は標高約27.9mに位置し、上端のレベルはおおむね約28.05mを測る。西壁の1石は他の3石よりも5cm高い。基底石より上は礫を傾斜と平行に、基底石とは直行する向きに配置しているものが多い。目地は明確にできないが基底石上のものは5cmの差を揃えるものといえる。

上段葺石はレンチ上端から約1.6mの位置にて検出された。遺存状況は良好とはいえないが、基底石及び積み上げた2石分の並びの一部がみられる。また、レンチ東側には葺石とおもわれる石礫が表面に露出しており、おおむね検出した基底石の並びに合致するようある。葺石基底石は長軸が20cm以上を測るやや角を残す石材を用いており、基底石は西壁際に1石あって20cmほどの間をおいて2石が並んでいる。基底石は標高約29.35mにあり、平面的には縦位に配している。空隙は東側2石と同規模とするもう2石分に相当するものである。積み上げた礫は長軸15cmほどの亜円礫が多く、平面的にはこれも縦位に積み上げている。これらは基底石の上方に積み上げるというよりは、並び重ねたような配し方といえる。また、3石目の下には岩盤との間にオーリーブ黄色土がみられ、置土とおもわれる。なお葺石の勾配は約15°である。

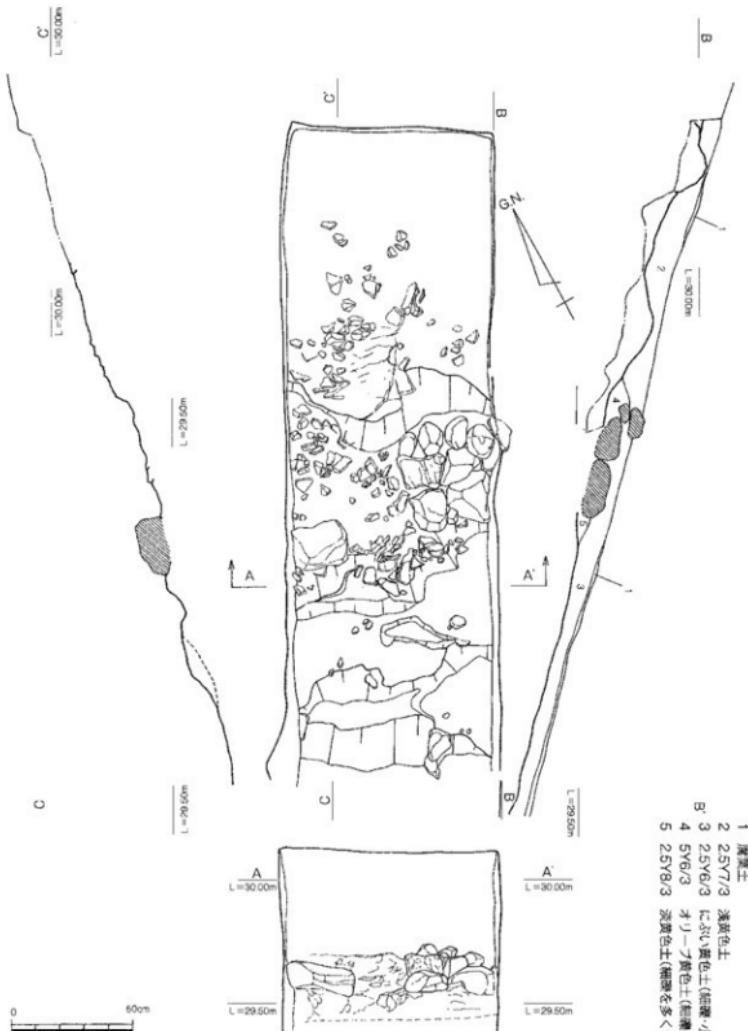
次に葺石をのぞく斜面の状況であるが、下段葺石より下方をみると。下段葺石は標高約27.9mが基底ラインであるが、これより南側下方に平坦面がみられる。この平坦面は基盤土を整形したもので、基底ラインと比高差が約10cmあるが約150cmの幅を測るものである。検出時、この平坦面上には転落したとおもわれる礫が亂雑な状況で多数みられ、基底石根元に多くみられた。平坦面先端からレンチ下方にかけて約10~15°の勾配がつづいている。基盤土は堅質な花崗岩では



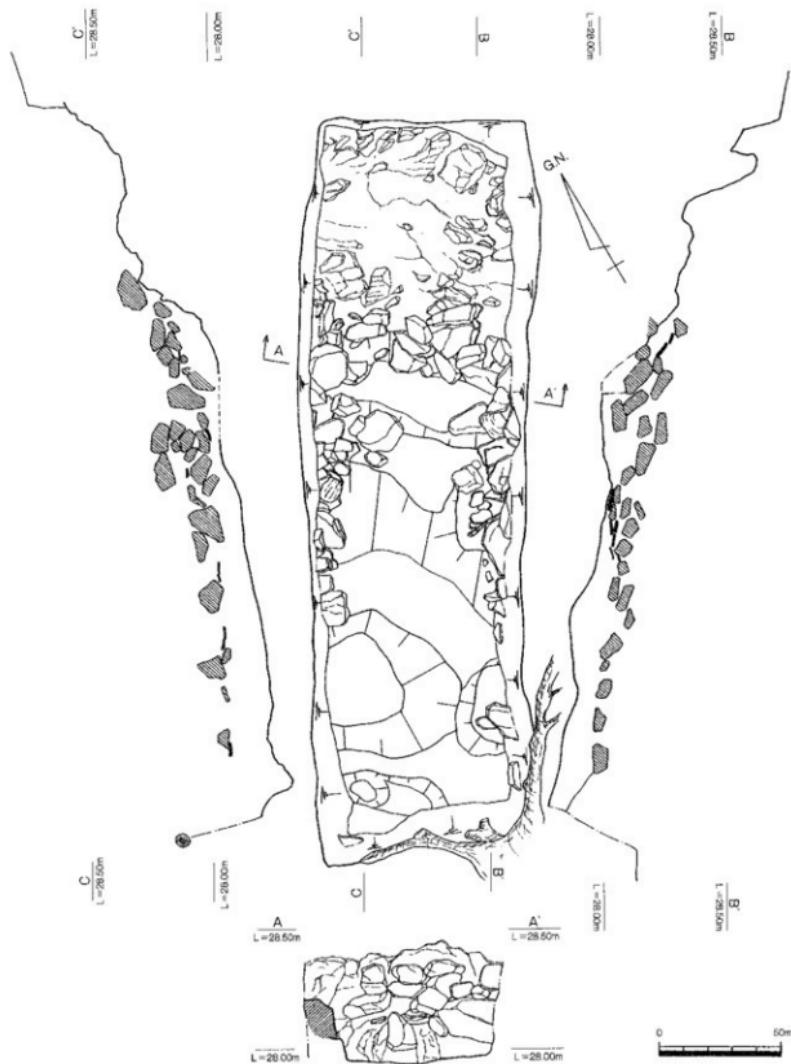
第6図 レンチ7・8 平面図及び断面図(1/60)



第7図 トレンチ7 下段葺石 平面図及び断面・立面図 (1/20)



第8図 トレンチ7 上段墓石 平面図及び断面図 (1/20)



第9図 トレンチ8 平面図及び断面・立面図 (1/20)

なく表層は節理とともに風化土がみられる。検出面では区画などを示す様な段差などの地形変化はみられないが、全体的に東から西にかけて傾斜はみられる。

上下段の葺石間の斜面は水平距離で約4.3mを測る。下段葺石からは約15~20°の勾配で延びている。検出面は岩盤となっており、節理の剥落が多くみられた。また上段葺石の下方では掘り込みによるものかくぼみとなっていたりし、旧状を残すものではなかった。このため上段葺石に取り付くような平坦面を明確にすることはできなかった。

上段葺石からトレチ上端までは参道にかかっており、表土は浅黄色土が露出しておりきわめて硬くしまっていた。基盤土は岩盤であるが下段葺石のところに見られたものではなく、風化がみられやや節理がもろくなっていたもので傾斜は一定ではない。西壁際では基底石が一石だけだが、これの上方根元には土器細片を含むよくしまった灰色土がみられるなど、なんらかの変化がうかがわれるものであった。

遺物は壺形埴輪の破片が出土しているが、これらは出土量もきわめて少量で原位置をとどめるものではない。また出土位置は下段葺石またはその下方平坦面でのものがほぼ全てである。

(2) トレチ8

これはトレチ7の西側50cmに設定したもので下段葺石の状況や、連続性について把握するため、規模は3×0.9mを測る。検出したのは下段葺石とその南側平坦面に相当する範囲である。ただ、その状況はトレチ7に比して遺存状況は良くないものであった。使用されている石材はトレチ7と同様である。葺石基底石はトレチ7からおおむね直線延長上に継ぐ位置にて検出はされた。ただトレチ幅内にて両壁にうずもれた2石だけで中ほどのものは允欠したものである。また、積み上げられていた石礫も中ほどから全般的に崩れていったり、ずり落ちかけていたりしていたものである。残る基底石のうち東壁のものはおおむね原位置を保つものともわれるが、西壁ではやや下方側にずれているようでもある。東壁基底石は横位で、トレチ7の状況と同じく標高約27.9mに据えられている。積み上げられた礫も目地などをうかがえるものではなく、残されたもの多くは横位とな

っている。また葺石の後背にある岩盤をみると、傾斜は50°ほどのきつい勾配であるが、立ち上がりは上面の一部が改変されている。他方平坦面に相当する基底石下方の状況であるが、これは改変のあとが残されており、トレチ7でみられた平坦面は基底石より50cmほどしかなく、これより南側はゆるいがすり鉢状のくぼみがみられ、また、基底石直下でも中ほどでも幅20~30cm、深さ10cmほどの溝状の落ち込みがみられた。検出時のこの平坦面相当では崩れた石礫が累積してみられた。小礫片なども混じりながら下位では約27.8mにトレチ南端付近まで広がっていた。

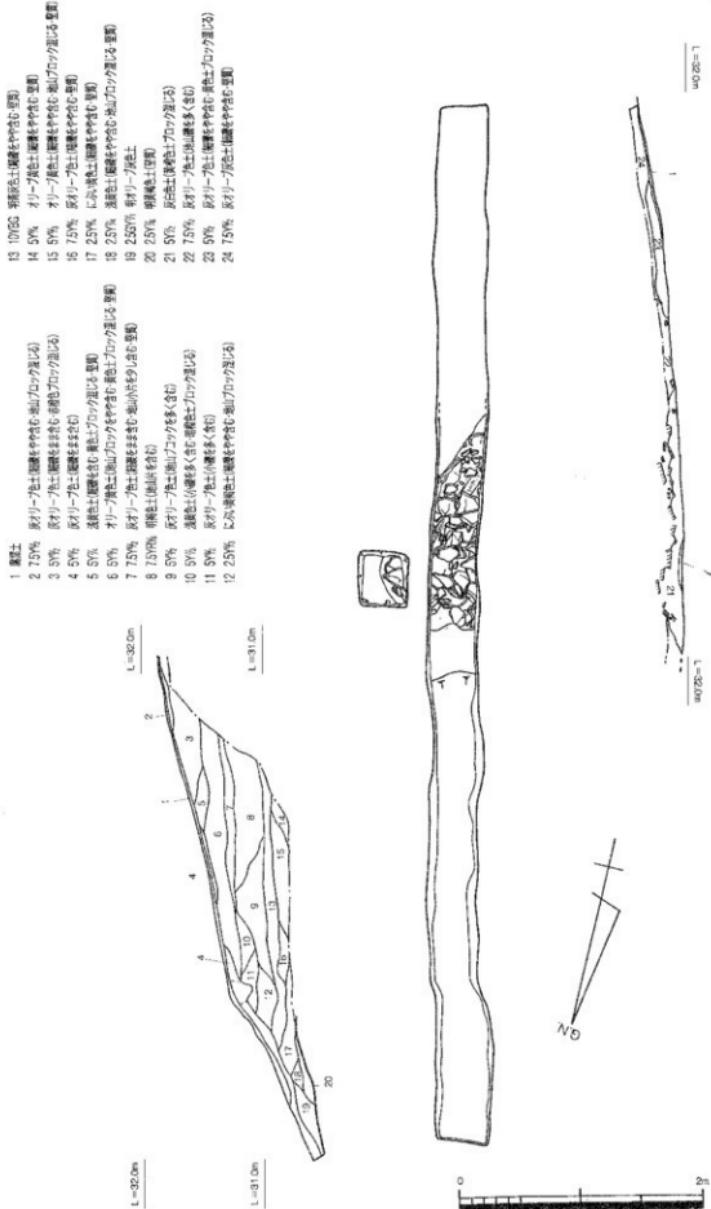
遺物はトレチ7と同じように壺形埴輪が出土している。量的には多いものであるが、崩れた石礫などと混じるように細片となって出土したものである。

(3) トレチ2

これは平成17年度に墳頂部において丘陵稜線の南北方向に設定したトレチで、規模は約8.5×0.4mを測るものである。

現在、墳頂部は標高約31.8m前後で直径約4~5mの半平坦状を呈しており、最高所の中央部には二十四輩さんの祠が造立されている。本トレチを特徴付けるのはほぼ巾ほどにて、剝抜式石棺が検出されたことである。ちょうど石仏の北東側にあたるトレチ南端より約2.5mのところである。まず地表直下に大小の安山岩板石片が乱雑な状況で検出されたもので、板石の広がりはトレチ南北方向の約1.5mにあった。剝抜式石棺はこれら板石を一石分ほど外した状況で、板石の隙間から見えるように検出されたものである。板石の散布する範囲は地表面から掘り込まれた盗掘坑に沿うもので、埋め戻した土には黄橙色ブロックの混入が多く見られた。

トレチ北側では墳頂平坦部が北に向かって傾斜しているところにて深掘りを行い、墳丘の状況をうかがったもので盛土の構築方法の一端がみられた。トレチ東壁にて北側よりトレチ底面では基盤土がゆるい傾斜で立ち上がっており、トレチ北端より約110cmの標高約30.8mにて底面にはみえなくなる。この上位には墳丘外側に隆起をもった層厚10~20cmの黄色系土が、やや内側に傾斜するようにみられる。さらにその内側を埋めるような土層があり、さらに標高約31.0mにて



第10図 トレンチ2 平面図及び断面図 (1/40)

隆起とその内外を埋める土層がみられ、さらに層厚10~20cmほどの土層が約30cmの高さで上面を揃えるような層序がみられ、墳頂部にいたっている。

(4)トレンチ3

本トレンチも平成17年度に設定したもので、墳頂平坦部東側において崖面に近接するものである。規模は約4.2×0.6mである。本トレンチの周囲は標高約30~31mの間にあたり、崩落などによる変化が強くみられ下方では特に傾斜がきつくなっている。本トレンチにおいても盛土が確認されたものである。基盤土については標高約30.6mまでみられ、これより上位は盛土とおもわれるものである。とくに標高31.0m前後では青色土がみられ、さらに花崗岩ブロックが混じる赤色に近い土層が層厚約20cmあり、上面を揃えているようである。ついで地表面までは灰色系土となっている。これら層序はトレンチ2に対応したものといえる。

なお、遺物は出土していない。

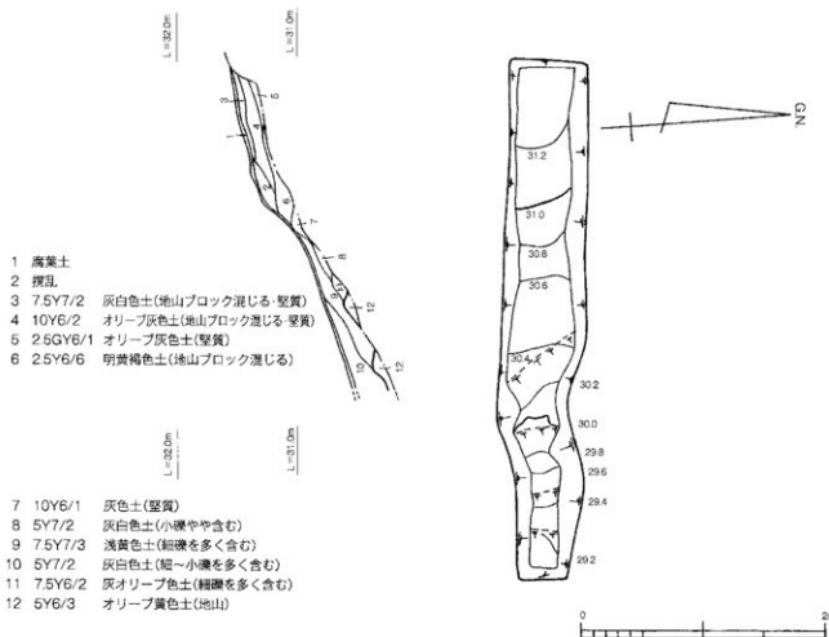
第2節 剥抜式石棺

石仏の北東、地表面から約10cm下で安山岩の割石が集中して認められ、割石の中に剥抜式石棺を確認した。石材は火山産の白色凝灰岩である。調査はトレンチによる確認で、かつて石棺上に散乱する割石の取り外しは最小限度に留めたため、石棺の全体像は判然としないが、現状を記載する。

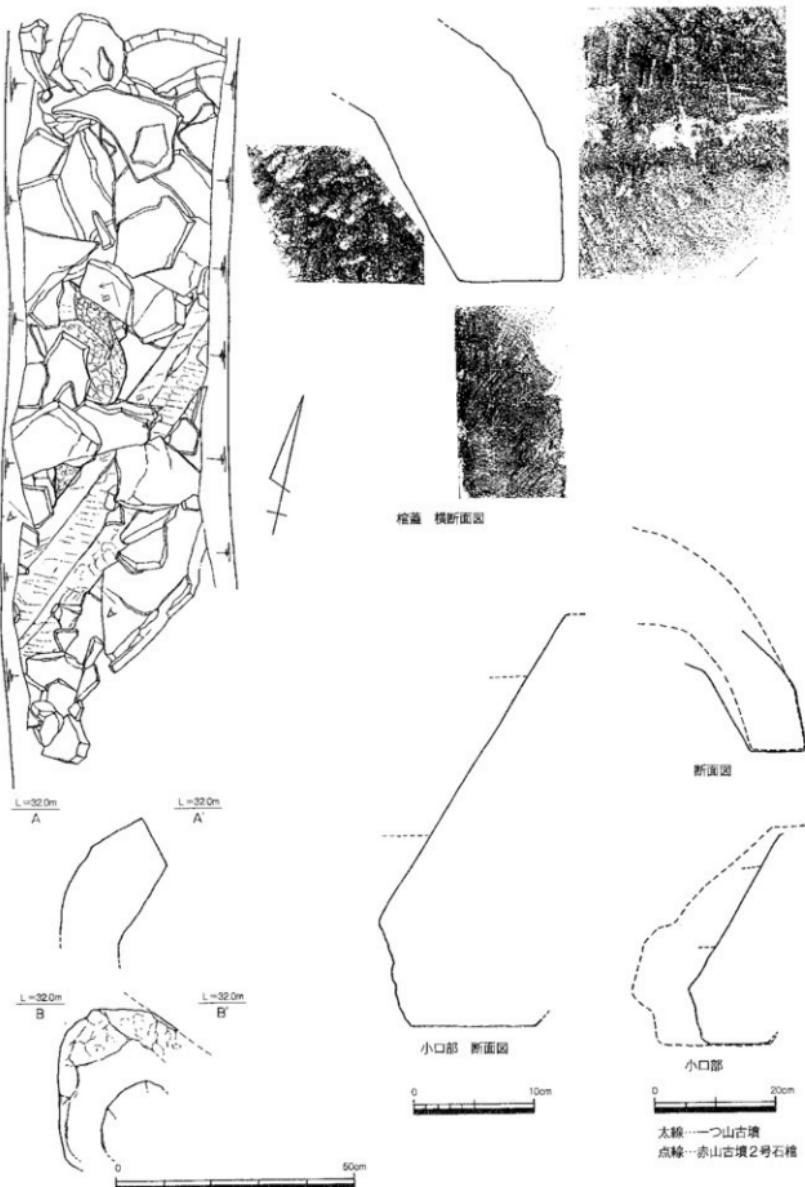
トレンチ内における安山岩集中地点の両端は粘土が見られ、安山岩の割石は一部粘土中に入りこんでいる。本来堅穴式石室があり、盗掘によって石材が散乱した状況といえる。安山岩集中地点の両端で幅約90cmを測るが、現状では石室の石積は観察できない。墳丘の中心はほぼ安山岩集中地点であり、埋葬施設は墳丘中心部に位置するといえる。

石棺は安山岩集中地点の南側に棺蓋が横になっていた状態で検出され、また、その北側にも棺蓋らしき部材が確認できる。

横になった石棺の棺蓋はN-25°-Eに向き、両端はトレンチの外である。トレンチ内では長さ



第11図 トレンチ3 平面図及び断面図 (1/40)



第12図 石燈出土状況図(1/10)及び石燈図(1/4)及び赤山古墳2号石燈との比較(1/8)

65cm分が確認できる。底部側面の下端幅は約8.5cmであるが、北東ほど幅広くなっている。側面は垂直かやや内傾気味に9.6cm直線的に立ち上がり、そこから傾斜変換して曲線をもちらがら天井に立ち上がる。内面は下端からやや膨らみ気味に60°の角度をもって立ち上がる。深さ13cmで傾斜変換して立ち上がるが、上位は観察が困難である。棺厚は10~12cmである。下端及び側面は斜め方向に平行な工具痕が残り、内面は幅1~1.5cmの長方形の粗いノミ痕が残る。また、内面に赤色顔料の塗布が確認できる。

横になった棺蓋の北側に見られる石榴も棺蓋の可能性が強い。上記の棺蓋と同一固体かどうかは不明である。下端が上に向いた状態で、北東側に小口面が確認できる。西側に石榴は続くが、トレチ外となり全長は不明である。小口は60°の角度で天井部に向って斜めに切られている。高さは正確な数値ではないが、約34cmである。下端から15cm上位に繩掛突起が確認できる。断面は明確にし難いが、棺円形の可能性がある。小口部の下端幅は10.5cmを測る。

第3節 出土遺物

(1) 出土状況

遺物はトレチ1・4・6・7・8において出土し、トレチ6近くの地表面でガラス玉1点を採集した。埴輪は6トレチ出土の土製品1点以外全て壺形埴輪片である。

古墳は2段築成であるが、遺物の多くは段築と埴丘裾のテラス周辺から出土している。最上で上段葺石の上方にあり、段築のさらに上位からの転落も想定される。調査では原位置を示す個体は確認できなかった。底部片をほとんど確認しておらず、トレチ外に原位置を保っている可能性が推測される。

出土状況としては、トレチ1においては上段、下段ともに口縁部出土が見られるのに対して、トレチ4では口縁部はすべて下段に集中する。遺物はほとんど小片の散乱した状態にあるが、トレチ1の下段テラスからは比較的まとまって同一個体の埴輪片を確認している。土製品はトレチ6から出土している。

(2) 遺物について

土製品とガラス玉各1点以外、全て壺形埴輪片である。小片が多く全体を窺うことはできない。特に胴部、底部は良好な資料がない。

壺形埴輪の種類は二重口縁が多く、単口縁も

推測されるが、断定できる資料はない。

1~23は口縁部である。多くが二重口縁だが、1は他例より器壁が厚く、口縁部上端をつまみ上げそのままおさめている可能性が強い。単口縁と推測する。口縁部径14.6cmを測る。

二重口縁の二次口縁部は器壁0.4~0.6cmで長く外反する。端部はナデによって面をなすが粗雑である。上端はつまみ上げが見られる例が多いが低く粗雑である。口縁部径は2が21.6cm、3が25.4cmを測る。一次口縁端から二次口縁端までの長さは7.15で5~5.5cmである。内外面には横ナデが見られる。

15~24、27~28は屈曲部である。外反する一次口縁から0.3~0.5cm垂直あるいは内向して立ち上がり面をなす。屈曲部はどの個体もシャープさがなく、下方に突出させる例はない。粗雑な屈曲部の例もある(17、19)。

一次口縁の立ち上がりは頸部から外反して広がる。一次口縁端の屈曲部までに傾斜変換はない。頸胴部屈曲部では器壁が薄く平均0.6cmであるが、頸部中位は1cmと厚い。そして、頸部中位の内面は強い横ナデによって凹む事例がある(28、29)。内外面は粗い横ナデが見られ、29の外面には斜位のヘラミガキが確認できる。

胴部は小片のため形状の窺える事例はない。調整は外面にハケ、タキは見られず、一面ナデ調整である。外面は下半がケズリ、上半が指押さえである。底部は小片が1点ある。36は径1.5cmの焼成前穿孔が外面から穿たれている。

胎土は0.2~0.3cmの長石、石英を多く含む。色調は橙色からぶい黄橙色が多く、浅黄橙色はない。胎土・色調にバリエーションは認められない。

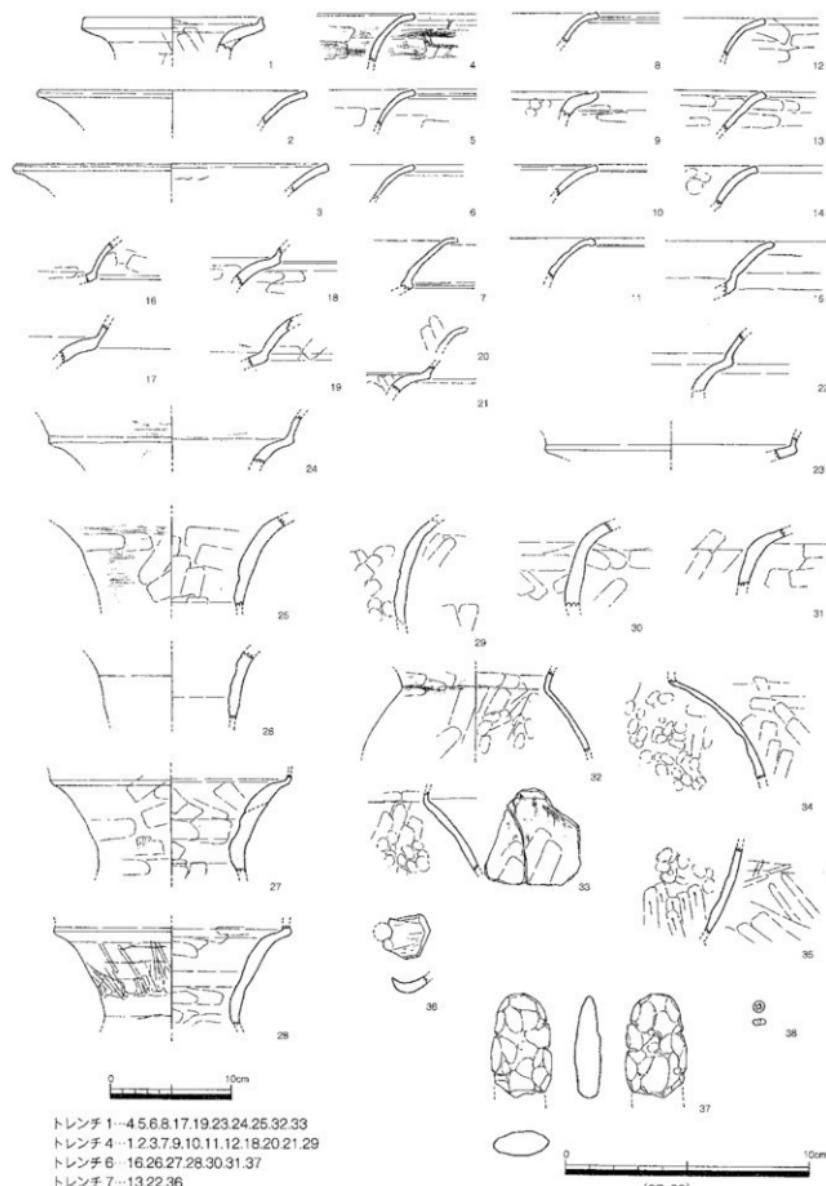
出土遺物の多くに赤色顔料の塗布が見られる。外面から口縁部内面にまで及ぶ。頸部内面は確認できない。胴部片は内面ケズリの外面にもしばしば確認できることから、胴部下半にまで及んでいた可能性がある。

37は土製品である。下半を欠損している。平面U字形、断面はレンズ状を呈する。両端に其々2つの刻目が見られる。裏面は剥離痕がある。土製品の性格・種類は不明である。

38はガラス玉である。青緑色を呈する。径0.4cm、厚0.2cm、穿孔径0.2cmを測る。



第13図 遺物出土状況図 (1/60) (1/8)



トレンチ 1-4,5,6,8,17,19,23,24,26,32,33
トレンチ 4-1,2,3,7,9,10,11,12,18,20,21,29
トレンチ 6-16,26,27,28,30,31,37
トレンチ 7-13,22,36
トレンチ 8-14,34,35
崩 落 土-15

第14図 出土遺物 (1/4)(1/2)

第5章 まとめ

第1節 墳丘について

今年度の確認調査では目的とした墳丘南側における突出部の所在については、下段葺石より平坦面を以て傾斜面となっており確認されないものであった。このことから墳形については現状において崖面北東側を欠くものであるが、これまで指摘されていたように円墳であると想定する。規模については今年度において確認された上下段の葺石は、その間隔が1・4トレンチより1mほど長いものである。また、昨年度の成果より上下段葺石の復元ラインを正円にしたとき、上段葺石はおむねこれと合致するものであるが、先のように本年度では間隔があるためその分外側にくるものであった。このことから規模については南東側にはやや間延びしたものといえ、復元では南北約27m・東西約25mを測る円墳ではあるが長楕円形を呈するものと想定する。

墳丘の構築には地山整形と盛土によってなされている。盛土はこれまでの成果より西側トレンチ4で標高約30.2m、南東トレンチ5では標高約30.8mからなっている。北側トレンチ1では標高約30.2mで、東側トレンチ3では標高約30.6mからである。またトレンチ2では標高約30.8mあたりまで基盤土の傾斜がみられる。このことから昨年度記述あったように、本来の地山最高所はやや中心より東あつものとおもわれる。

墳丘中心あたりでの盛土の構築をみると最初の段階として、おむね標高約30.8mを基準にしてその周りの傾斜面にはこれに合わせるように盛土を行い、基底とする。ついで外側より層厚10~20cmで黄色土やオリーブ灰色土を平坦になるように積み上げ、さらに標高約31.0mでみられたしまりのよい青色土でもって平坦面をこしらえている。次の段階では青色土上位に、地山ブロックを多く含む黄色土を大きく断面三角状に積み上げている。これは底辺で約120cm、高さ25~30cm前後で、その内側は水平に盛土して平坦面をつくり、さらに平坦面を積み重ねることによって中心部を構築しているものである。また、盛土の外延部は基底平坦面後に積み上げられたものとおもわれる。このように部分的にはあるがトレンチ2および3でみられた盛土の構築技法は特徴的といえるものであり、三角形状盛土の内側を埋めるように平坦面をつくり積み重ねる技法は、青木敬氏の土手状盛土および西日本の工法に類似できるものと考える(青木2003)。ただ埋葬施設

に板状安山岩を用いた堅穴式石棺が想定されるが、明確に墓坑を把握できなかった。盛土構築と埋葬施設の関係においてなお検討が必要といえる。

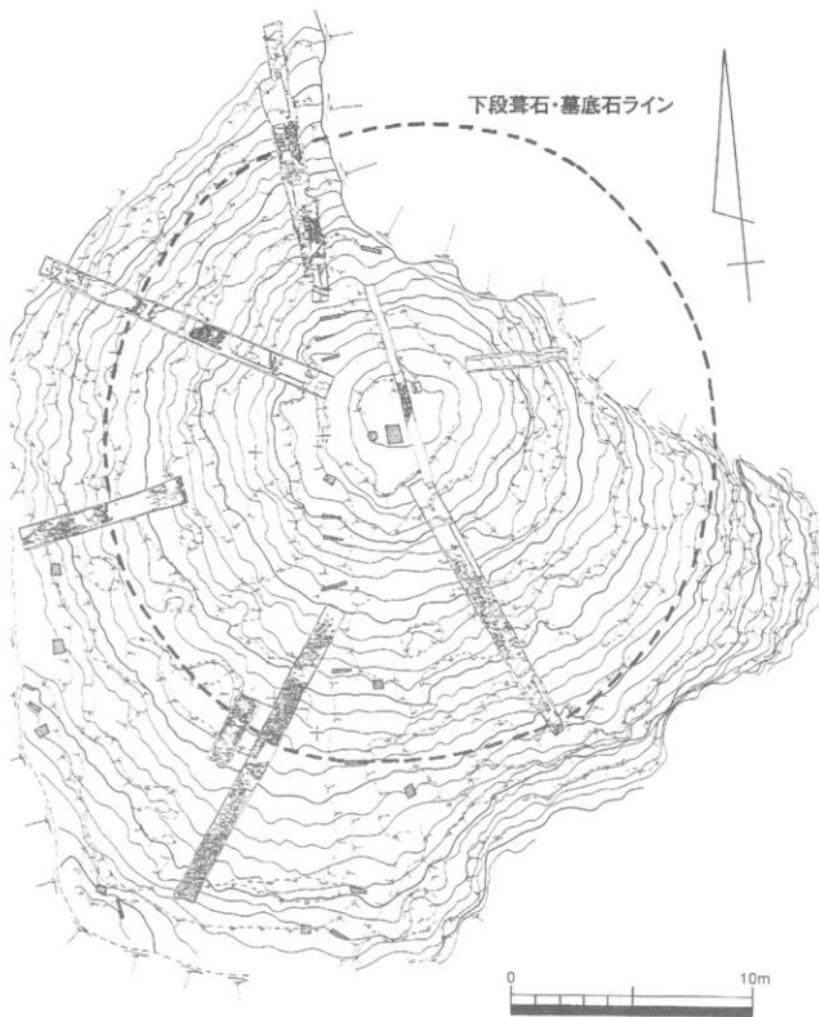
第2節 剣抜式石棺について

限られた観察からではあるが、一つ山古墳の剣抜式石棺について評価したい。まず、確認された石棺が棺蓋か棺身か断定することは困難であるが、赤山古墳の石棺を参考に棺蓋として取り扱う。また、石棺の部材は2点確認できたが、両方とも棺蓋と推察する。問題はこの2点が同一固体か別個体かであるが、判断する十分なデータがない。高さで比較すると、小口部の観察できる個体が約34cm、側面が上になっている個体が推定25cmで約9cm差がある。しかし、赤山古墳2号墳は東小口37cm、西小口30cmの8cm差あることから、同一個体としても問題はない。ただし、積極的に同一個体とする根拠は見られない。ここでは、便宜的に小口部の観察できる個体を個体A、側面が上になっている個体を個体Bとし、一つ山古墳剣抜式石棺の特徴を以下に列挙する。

- ①上端に向て斜めに傾斜する小口部(個体A)
- ②楕円形にちかい縄掛突起(個体A)
- ③側面の立ち上がりに面をもつ(個体B)
- ④側面下端部の幅が一方にむかって広くなる(個体B)
- ⑤内面に工具痕を明瞭に残す(個体B)

おおよそ上記の特徴が指摘できる。これらの特徴は②以外赤山2号石棺と共通する。ただ、細かな点においては、⑤に関して、一つ山古墳では内面傾斜面から粗い工具痕が見られるのに対して赤山2号石棺の場合天井部のみであり、かつ、一つ山古墳ほどの粗さはない。第12図は一つ山古墳石棺と赤山2号石棺の比較である。小口部や側面など共通点がある一方、縄掛突起の位置など相違点も指摘できる。これら差異にどのような意味があるのか今後の課題であるが、共通点の多さは両者の時期的な近さを表しているといえよう。時期的に赤山古墳1号石棺と岩崎山4号墳石棺の間に赤山古墳2号石棺と一つ山古墳石棺が位置するといえる。最後に①について言及したい。

①の特徴はこれまで赤山古墳石棺のみで見られた。藤田憲司氏は赤山古墳石棺と九州の阿蘇溶結凝灰岩製石棺との関連を示唆し(藤田1976)、それを受けた白石太一郎氏は九州舟形石棺の出自を



第15図 墓丘復元図(1/200)

香川県に求めている(白石1985)。また、高木恭二氏は福岡県沖出古墳の石棺が讃岐出身の石棺製作工人によって造られた可能性が高いとしている(高木1987)。一方、香川県内では火山石石棺群と鷺ノ山石棺群が指摘されており(渡部1994)、これら石棺群が異なる石工集団か同一の石工集団なのかは、近年の問題点である。類似した形態変化をする火山石石棺群と鷺ノ山石棺群において両者を分かつ特徴が①であった。しかし、火山石石棺群においても①は岩崎山4号墳には見られず赤山古墳のみであり、十分な根拠ではなかった。今回、一つ山古墳における確認は、赤山古墳に引き継ぐ3例目の発見であり、岩崎山4号墳出現以前の火山石石棺群の特徴として貴重な資料といえる。

第3節 壺形埴輪について

(1) 一つ山古墳壺形埴輪の特徴

①出土状況

壺形埴輪片はトレンチ1・4・6・7・8の各墳丘傾斜面、段築、埴丘裾で出土した。トレンチ5は埴丘傾斜面であるが、改変のため葺石、埴輪片が確認されなかった。原位置を保つ事例は確認できなかったが、壺形埴輪が埴丘を囲繞していたと考えられる。出土した埴輪片は全て壺形埴輪であり、円筒埴輪の樹立は認められない。

壺形埴輪片の多くは二重口縁形態を有する。単口縁の存在も推測されるが、確実に単口縁を示す個体は認められない。

②色調、胎土

色調は橙色、黄橙色の事例が多く、灰白や浅黄橙色は認められない。形態、法量とともにバラエティーは少ない。同様の色調は赤山古墳や岩崎山4号墳の円筒埴輪には認められない。一方、鷺の部山古墳の広口壺とも明らかに胎土、色調は異なる。胎土には石英、長石の小粒が目立つ。

③調整方法

胴部から口縁部にかけての外面調整は全体にナデが見られる。日常容器でよく確認されるハケ、タタキは認められない。粗雑な作りである。28は頸部外側に斜め方向のヘラミガキが見られる。

内面は胴部下にケズリ、上半に押さえが確認でき、弥生後期以来の伝統的な在地様式の調整が認められる。

④口縁部形態

二重口縁壺は頸部から外反して立ち上がり第一次口縁に至る。奥14号墳、快天山古墳で認められる頸部の屈曲は見られない。器厚は薄い頸胴部に対し、頸部立ち上がり部は厚い。一次口縁端部は屈曲して少し立ち上がり、二次口縁端にむかって外反する。屈曲部に突出はなく、一次口縁端部のナデも弱い。二次口縁は器壁0.4~0.6cmで薄く、長く外反する。口縁端部はナデによって面をなすが、強いナデではなく、単純な口縁部形態である。

⑤底部

底部は1点のみ小片を確認した。径約1.5cmの焼成前穿孔が見られる。

⑥赤色顔料

外面から口縁部内面にまで及ぶ。頸部内面は確認できない。胴部片は内面ケズリの外側にも確認できることから、胴部下半にまで及んでいたと推測される。

(2) 一つ山古墳壺形埴輪の位置づけ

以上で指摘した諸特徴から一つ山古墳の時期的位置づけを試みる。

まず、調整技法は弥生時代以来の伝統的手法を残しつつも、ハケ、タタキ等を認めず粗雑な作りであり、日常容器との差異が認められる。ハケ等の確認できる快天山古墳出土の壺形埴輪よりも後出する。『快天山古墳発掘調査報告書』に掲載されている図11-2の壺形埴輪は器壁の厚さ、形態とも当例に近いが、頸部の屈曲が異なり、一つ山古墳例では頸部の明瞭な屈曲はない。

外面にハケ、タタキの見られない粗雑な壺形埴輪として権八原C地区2号墳出土例がある。単口縁と二重口縁が見られる。頸部は外反して立ち上がり、そのまま一次口縁に到り、一つ山古墳に類似する。相違点は、全体的に権八原C地区2号墳の方が厚手である。また、底部は径3~4cmの粗雑な不整円形の焼成前穿孔で径1.5cmの一つ山古墳例と異なる。器壁の厚さ等から一つ山古墳例が権八原C地区2号墳に先行すると推測する。ただ、口縁単部や一次口縁部、胴部外面上半のナデは権八原C地区2号墳の方が丁寧である。

以上から快天山古墳と権八原C地区2号墳の間に時期的位置づけたい。

最後に津田湾古墳群の中での位置づけとして、円筒埴輪が認められる赤山古墳、岩崎山4号墳に対し、一つ山古墳は壺形埴輪のみである点が重要である。

時期的には石棺から赤山古墳と岩崎山4号墳の間に位置づけられ、壺形埴輪から円筒埴輪という流れは指摘できない。考えられる点は赤山古墳、岩崎山4号墳が前方後円墳であるのに対して、一つ山古墳が円墳ということである。刎抜式石棺を共有しながらも外表施設に前方後円墳と円墳の格差が表示されていたとすれば興味深い点である。なお、一つ山古墳の壺形埴輪には弥生時代以来の伝統的な調整方法が認められた。古墳の畿内化の過程を津田湾の古墳群から見ていく場合において、一つ山古墳が見せる在地的な要素は今後の検討に際して重要である。

第4節 一つ山古墳の評価

一つ山古墳はこれまで十分な資料がなく、小規模円墳として注目されることはなかった。調査により、墳頂部に津田湾では前方後円墳の盟主墳にしか認められない刎抜式石棺が確認され評価は一転した。さらに、墳丘規模・墳形は南北約27m・東西約25mの長楕円形の円墳であることが判明し、津田湾地域前方後円墳の後円部径とはほぼ同規模であることが明らかとなった。墳形こそ前方後円墳ではないが、盟主墳の一つと位置づけることが可能である。

刎抜式石棺は全体形を明らかにしていないが、視認された箇所から赤山古墳2号石棺と多くの点で共通し、岩崎山4号墳の石棺より古い形態であることが明らかになった。斜めに傾斜した棺蓋小口部の構造は、これまで県内では赤山古墳の石棺にのみ認められ、九州の刎抜式石棺と関わりをもつ要素として注目されてきた。一つ山古墳に類例が確認されたことにより、岩崎山4号墳以前の火山産刎抜式石棺の特徴がおぼろげながら見えてきたといえよう。

葺石の構造は基底石に大ぶりの石材を使用し、上位に拳大的な石をさしこんでいる。こうした構造は石垣状に組む在地の手法とは異なるもので、非在地化=畿内化の要素として指摘できる。

一方、墳丘には外表施設として壺形埴輪が围绕されていた。壺形埴輪の形態は、在地的な広口壺をもつ鶴の部山古墳とは大きく異なる。外面にハケ、タタキ等を認めず粗雑な作りで日常容器との乖離が認められる。製作技法として、内面下半にケズリ、上半に指押さえを認める点や、太い

頸部など在地的特徴を窺うことができる。墳丘に畿内化が見られつつも、壺形埴輪には在地的因素が残存していることが指摘できる。

一つ山古墳と同時期か一段階古い時期に位置づけられるのが赤山古墳である。赤山古墳は前方後円墳で外表施設に円筒埴輪をもつ。一つ山古墳では円筒埴輪は皆無であり、赤山古墳と相違する。また、墳丘構造も厚さ1~2mの盛土を認める一つ山古墳と墳頂部で地山の岩盤が露出している赤山古墳で相違が見られる。なお、外表施設に円筒埴輪をもつ岩崎山4号墳も墳頂部から40~50cmで地山が見られることが指摘されており、一つ山古墳と相違する。こうした差異が何に起因しているか、また、墳形との関わりがあるのか興味深い課題である。

最後に立地を見ると、海から視認できる小高い山上にある津田湾の古墳の中で、最も東にあるのが一つ山古墳である。東からの航海者が最初に目にする古墳であり、外部への表示機能を古墳の性格の一つとして考えた場合、一つ山古墳のもつ存在意義は重要であったと推察される。

<参考文献>

- ・青木敬〈2003〉『第2章墳丘構築法の再検討』『古墳築造の研究』
- ・藏本晋司〈2004〉『丸龜市吉岡神社古墳の再検討』『研究紀要XI』
- ・高木恭二〈1979-80〉『環状突起を有する石棺について—特にその石棺材の産地をめぐって—1・2』『熊本史学』第53-54号
- ・白石太一郎〈1985〉『古墳の知識I』『考古学シリーズ』19
- ・津田町史編纂委員会〈1986〉『再訂 津田町史』
- ・津田町教育委員会〈2002〉『岩崎山第4号古墳』
- ・藤田憲司〈1976〉『讚岐の石棺』『倉敷考古館研究集報 第12号』
- ・松本敏三〈1975〉『椎八原古墳群発掘調査概報』
- ・六車恵一〈1965〉『讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎』『文化財協会報7』
- ・渡部明夫〈1994〉『「四国の刎抜式石棺」』『古代文化46-5』

図版	番号	部位	出土トレンチ	口径	直径	断溝	器	厚	胎	土	燒成	色	調	備考
1	1	口縁部	トレンチ4	14.6	—	—	0.6~1.2	小砂	良好	10YR4/1	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	2	口縁部	トレンチ4	21.6	—	—	0.5~0.5.5	細砂	良好	10YR6/6	明黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	3	口縁部	トレンチ4	25.4	—	—	0.5~0.6	粗砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	4	口縁部	トレンチ1	—	—	—	0.5	小砂	良好	10YR7/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	24.25同一個体	赤色顔料
1.4	5	口縁部	トレンチ1	—	—	—	0.4~0.5	小砂	良好	10YR7/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	6	口縁部	トレンチ1	—	—	—	0.4~0.6	小砂~中砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	7	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.4~0.6	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	8	口縁部	トレンチ1	—	—	—	0.5	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	9	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.6~1.0	細砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	10	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.5~0.6	細砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	11	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.5	小砂~中砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	12	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.4~0.5	細砂	良好	10YR7/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	13	口縁部	トレンチ7	—	—	—	0.5~0.6	小砂~中砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	14	口縁部	トレンチ8	—	—	—	0.5~0.6	小砂~中砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	15	口縁部	積丘北側崩落土	—	—	—	0.6~0.9	小砂~中砂	良好	5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	16	口縁部付近	トレンチ6	—	—	—	0.4~0.6	小砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	17	口縁部付近	トレンチ1	—	—	—	0.5~1.0	小砂~中砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	18	口縁部付近	トレンチ4	—	—	—	0.4~0.8	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	19	口縁部付近	トレンチ1	—	—	—	0.7~0.8	小砂	良好	5YR6/8	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	20	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.4	小砂	良好	5YR6/8	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	21	口縁部	トレンチ4	—	—	—	0.4~0.9	小砂	良好	5YR6/8	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	22	口縁部付近	トレンチ7	—	—	—	0.5~0.7	小砂~中砂	良好	10YR6/6	明黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	23	口縁部付近	トレンチ1	—	—	—	0.4~0.8	小砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	24	口縁部付近	トレンチ1	—	—	—	0.4~0.9	粗砂	良好	7.5YR7/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	25	頸部	トレンチ1	—	11.8	—	0.5~1.3	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	26	頸部	トレンチ6	—	10.5	—	0.5~1.0	小砂	良好	5YR6/8	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	27	頸部	トレンチ6	—	12.1	—	0.4~1.3	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	28	頸部	トレンチ6	—	11.1	—	0.5~1.1	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	29	頸部	トレンチ4	—	—	—	0.7~1.1	小砂	良好	10YR7/3	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	30	頸部	トレンチ6	—	—	—	0.8~1.3	細砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	31	頸部	トレンチ6	—	—	—	0.6~1.1	小砂	良好	5YR6/8	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	32	頸部～胸部	トレンチ1	—	12.0	32.7	0.5	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	3と同一個体	赤色顔料
1.4	33	頸部～胸部	トレンチ1	—	—	—	0.4~0.7	小砂	良好	10YR6/4	[に]ぶい黄褐色	赤色顔料	3と同一個体	赤色顔料
1.4	34	胸部	トレンチ8	—	—	—	0.4~0.7	小砂~中砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	35	胸部	トレンチ8	—	—	—	0.5~0.7	小砂	良好	10YR6/6	明黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	36	不明	トレンチ7	—	—	—	0.7~0.9	小砂~中砂	良好	10YR7/6	明黄褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料
1.4	37	土製品	トレンチ6	—	—	—	0.4~1.1	小砂	良好	7.5YR6/6	褐色	赤色顔料	赤色顔料	赤色顔料

一つ山古墳 出土遺物 調査表

岩崎山4号墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年度から国庫補助事業として津田湾古墳群の内容確認を実施している。平成19年度は一つ山古墳に引き続いて岩崎山4号墳の確認調査が計画された。平成19・20年度の2ヵ年が岩崎山4号墳の調査予定である。平成19年10月29日に第3回津田湾古墳群調査検討委員会が実施され、調査方法が検討された。今年度(平成19年度)は後円部・前方部先端を把握し、古墳の全長を把握することが主たる目的として決定された。

(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長	六車 均
課長補佐	山津 勝美
係長	山本 一伸
主事	鶴身 昌大

大川広域行政組合理藏文化財係

主査	阿河 銳二
主任主事	松田 朝由
技術員	多田 歩
技術員	松村 春美

第3回津田湾古墳群調査検討委員会

検討委員

委員長	六車 恵一
副委員長	丹羽 佑一
委員	古瀬 清秀
委員	渡部 明夫
委員	大久保徹也
委員	内田 和伸
(指導)	森 格也

第2節 調査に至る経緯

平成19年10月30日から11月1日までの3日間草木の伐採をし、11月2日から調査を実施した。調査期間は11月2日から12月19日までの実働30日である。調査はまず後円部南西の畠地法面の精査から開始、掘切りを確認した後、トレント1から順番に調査した。11月9日にトレント1の基底石、11月21日にトレント2の基底石、12月14日にトレント4の基底石を含む葺石を検出した。また、線刻埴輪は11月30日にトレント2において確認した。

12月20日から出土遺物の洗浄、注記、接合作業を開始し、1月16日から実測作業を開始した。2月中旬から文章執筆を行なった。2月27日に岩崎山4号墳の比較資料として快天山古墳出土円筒埴輪を徳島文理大学において閲覧した。



第16図 遺跡位置図

第2章 岩崎山4号墳に関する過去の記録

岩崎山4号墳は文化6年(1853)に石棺が発見、内部から人骨、鏡、壺、勾玉が確認されている。当時の様子は文政11年(1828)の『全謹史』、嘉永6年(1853)の『讃岐国名勝図会』に記載されている。出土した遺物は村人が畏れて再び埋められたが、鏡は埋められずに壇内にあったことが記されている。

明治30年(1897)頃の『新撰讃岐國風土記』によれば、鏡は高松藩の観政典が所蔵し、明治6年(1873)から後に所在がわからなくなつたといふ。

また、同書には東京の人から何書の付属する石棺の図が送封されてきたことが記されている。何書は明治6年(1873)に久保秀景が名東県県令に提出したもので、「土人墓の物品を取出し候風説も有之」ということで、「神陵」ならば恐縮なので全体の発掘をするか否かの内容である。図面が5図掲載されており、石枕、人骨、石製品など石棺内部の様子や石棺の形、蓋石の様子、また、49個の埴輪が方形に並べられていた様子が描かれている。この明治6年の発掘に関して長町彰氏は大正5年(1916)に発掘を行った古老人に聞き取りを実施している(長町1916)。石棺の出土した場所が岩崎山の頂上よりも4・5間(7~9m)下の斜面であること、柏内には車輪石や石製品が多数見られたこと、柏外より鏡の出土したこと、49個の方形に並ぶ埴輪は底のない壺形であったこと、などが記載されている。

昭和2年(1927)、岩崎山1号墳が発見された。その時に4号墳の主体部も再び発掘される。出土した人骨、管玉22、小玉30、車輪石1、石釧2、貝釧3、埴輪片、朱は昭和5年(1930)の『史蹟名勝天然物報告 第5冊』に記載され、現在遺物の多くは東京国立博物館にある。昭和26年調査の報告書によれば、この時、他に鐵形石1、石釧3、硬玉製丁子頭勾玉1、管玉7~8があつたが、海中に捨てたといふ。続く昭和4年には墳丘南側で円筒埴輪列を確認している。

昭和26年、京都大学梅原木治氏による學術調査が実施された。墳丘規模、埋葬施設、石棺の様子が明らかとなつた。遺物は棺内に残っていなかつたが、石室上面から本来柏内のものと思われる勾玉2、管玉・小玉、石釧2が出土した。また、柏外から鏡や鐵製品が出土した。これらの出土遺物は現在さぬき市郷土館にある。

平成12年(2000)2月、後円部南西部に携帯自

動車無線基地局の建設が予定され、津田町教育委員会、大川地区広域行政振興整備事務組合によって試掘確認調査が実施されたが、古墳に伴う遺構は発見されなかつた。現在、無線基地局は古墳から離れた位置に建設されているが、試掘箇所には煙が造成されている。今回の調査で同所の検証を行つたところ、試掘時の掘削深度からさらに深い箇所で墳丘傾斜面と蓋石を確認し、墳丘の一部が煙によって破壊されていたことが明らかになつた。

平成12年(2000)6月、昭和26年調査の報告書が作成されることとなり、それに伴つて平成14年(2002)広島大学考古学研究室によって墳丘測量調査が実施された。

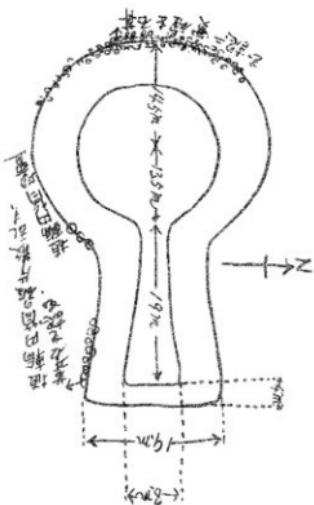
以上が岩崎山4号墳の調査経過であるが、多くは石棺を中心とした埋葬施設が対象であった。今回の調査は墳丘を対象とするものであり、以下では墳丘の調査と現状の経過について見ていくたい。

墳丘の変容に関しては明治6年の久保秀景の何書に「最初は土人も恐れ直様小社相建て今も祭は致し候得共、年月を経、自然土壤し候所より又々土人墓の物品を取出し候風説も有之」とある。この時の調査で石棺が頂上よりも4・5間(7~9m)下の斜面で確認されたと指摘されている(長町1916)、真偽は定かでない。

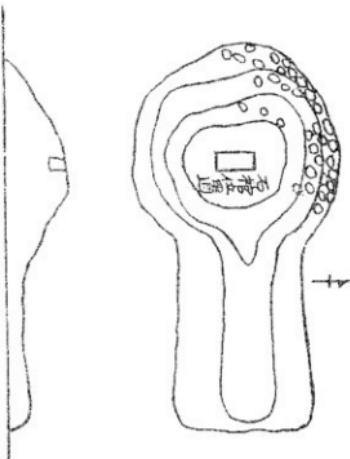
昭和5年(1930)の『史蹟名勝天然物報告 第5冊』には墳丘図が掲載されている。2段築成の前方後円墳であること、蓋石は前方部南側、後円部後方(西側)に多いことが指摘されている。特に後円部後方の半円間は「下段のみ確実に認むる」とある。円筒埴輪は前方部南側に多数の破片が散乱していたようである。その一つとして平板状のものが報告されており、家形埴輪片を想定している。

昭和2年に引き続く昭和4年(1929)の調査では南側くびれ部付近で円筒埴輪列を確認している。埴輪列は径30cm程の円筒埴輪が3つ見られ、其々12cm間隔で並んでいたといふ。その内の1個は梢円形を呈していた。現在この場所は煙による改変が著しいが、昭和26年測量図に掲載された位置から推測するに、段築のテラスであった可能性が強い。

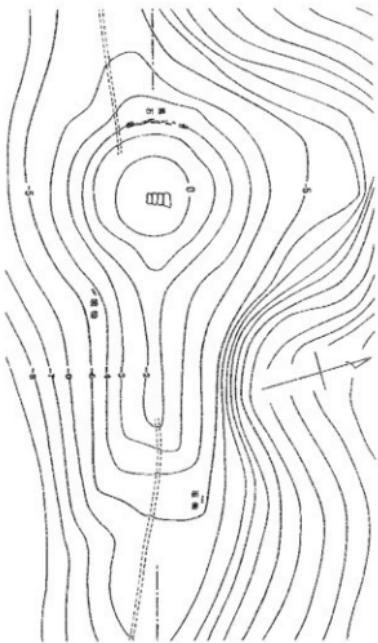
昭和26年(1951)の京都大学による調査は石棺を中心としたものだが、梅原木治氏が後円部後方の裾部や前方部の蓋石と埴輪列の有無を調査している。後円部は円筒埴輪片が散在していたが原位置は認められなかつた。前方部は北東隅に埴輪片や割石が散乱し、その中に倉庫とおぼしき形象埴輪を確認して



第17図 昭和5年 墳丘図(1/700)



第19図 昭和29年 墳丘図(1/700)



第18図 昭和26年 墳丘図(1/700)

いる。この場所は今回の調査で前方部先端の裾付近であることが明らかとなった。

また、墳丘測量を実施し以下の所見が記載されている。

- ①後円部後方は葺石がよく残り、大体の縁線をたどることができるが、他は明瞭ではない。また、後円部南側も丸い墳形が比較的よく残っている。
- ②後円部北側の張り出しが地形は自然地形である。

- ③前方部は角に丸みを帯びて低平であるが、右側くびれ部の近くに埴輪破片や葺石の一部があった。

④に関して現在は墳丘の崩落が見られ、葺石も多くの崩落した状態で散乱している。報告書には「比較的原形をとどめた部分が確認されて」おり、「盛土の基底の斜面に沿って、4、5列に割石を敷いたもので、その幅は約70~80cmあり、十数m続いている」とあり、現在とは様子が大きく異なる。後円部両側が開墾された時に多数の割石、埴輪を見出したことが伝えられている。今回の調査でも葺石の多くは崩落した状態で確認され、墳丘傾斜面は地山が露出していた。

昭和29年(1954)の『津田町史』には岩崎山4号墳の墳丘図が掲載されている。それには後円部北から西にかけて葺石が顕著に描かれており、後円部

後方の葺石は顯著でない。文中にも「後円部の北側には葺石が多く散乱し」とある。こうした状況は現在と通ずるものであり、昭和26年から29年の間に墳丘の改変があった可能性が推測される。

平成12年(2000)の後円部南西部の試掘調査では表土から円筒埴輪片6片が確認されたが遺構は確認できなかった。しかし、今回の調査で当時の判断が誤りであったことが判明し(本文中に詳説)、今回改めて墳丘の遺構を確認した。

平成14年(2002)、広島大学考古学研究室によつて墳丘調査が実施された。所見は以下の通りである。

- ①後円部西側はやせ尾根の小さな高まりと幅6m前後の溝で切り離されている。
 - ②後円部西側から北側溝は標高32.75mを基底として、高さ1mの基壇状石積が遺存している。
 - ③墳丘はほぼ平坦な基壇上に構築されている。
 - ④柄鏡形の整美な形態の前方後円墳である。
- ①～③に関しては、今回の調査で再認できた。

第3章 トレンチの設定

平成19年度は墳丘の全長の把握を主たる目的として後円部側にトレンチ1～3、前方部先端にトレンチ4・5を設定した。また、後円部南西部はかつて携帯・自動車無線基地局の建設が予定されていた場所で、現在畠が造成されている。畠の南・西壁は傾斜面をカットして法面になっており、この法面の精査から墳丘の把握を試みた。

第4章 調査の成果

第1節 各トレンチの状況

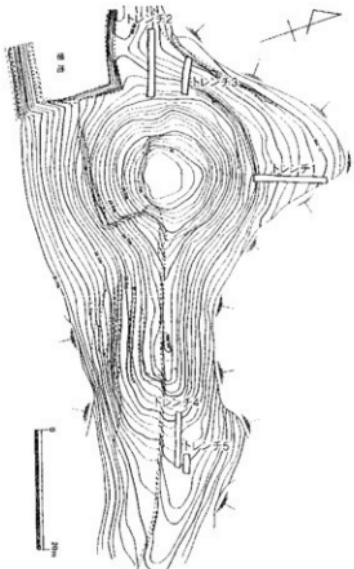
(1) トレンチ1

①目的

後円部北側は墳丘裾の想定される傾斜変換点が確認できる。傾斜変換点の北はゆるやかな傾斜のため平場のように見える。トレンチ1は後円部北側の墳丘裾と、その外側の様子を明らかにすることを目的とした。

②トレンチの場所

墳丘主軸に直交する後円部最大径地点に、長さ12m、幅1mで設定した。トレンチ南端(墳丘側の起点)は後円部中心から15.5m北で、墳丘裾の想定される傾斜変換点からは約1.5m南(墳丘側)である。この地点は葺石が後円部を取り巻き基壇状に見える。トレンチ北端は平場の端で、以北は急傾斜する。平

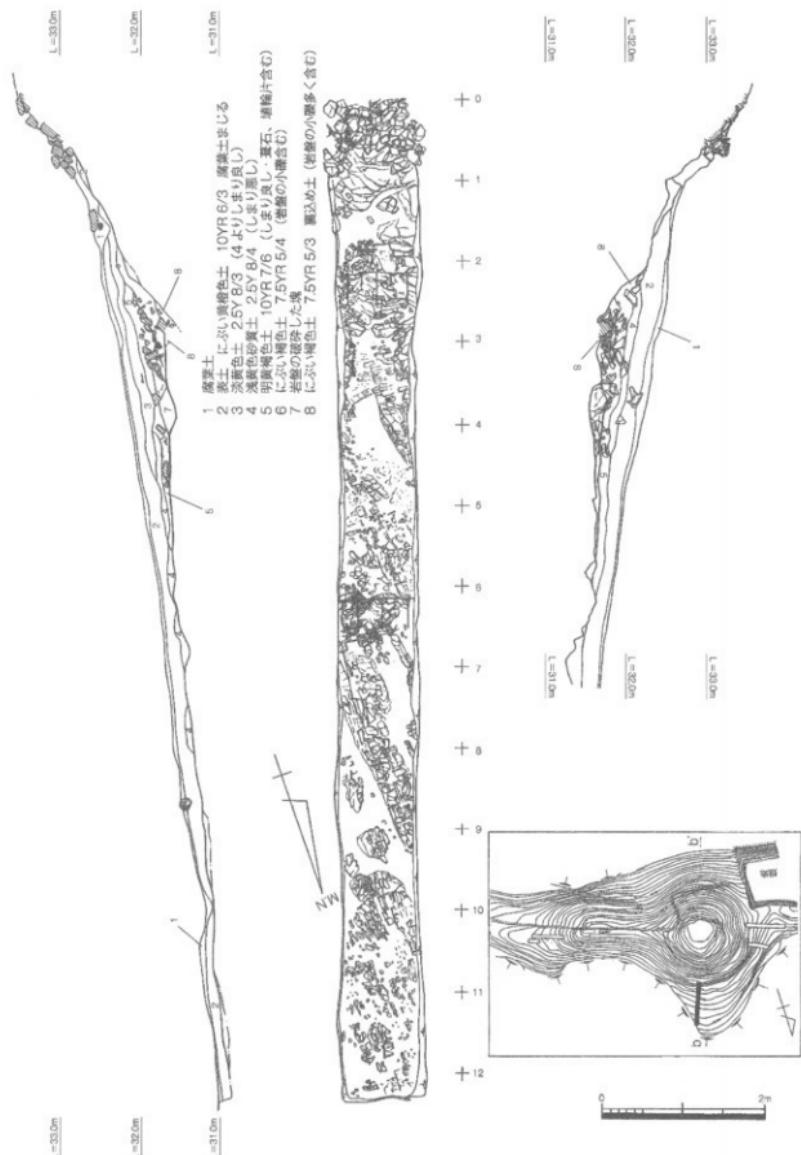


第20図 トレンチ配置図 (1/800)

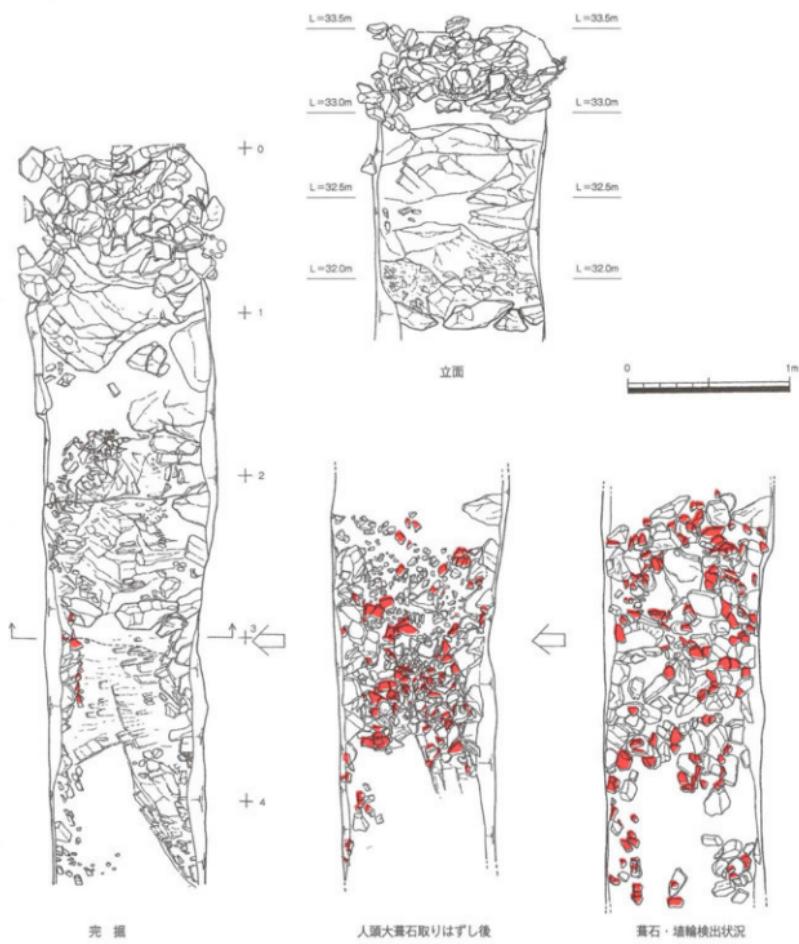
場は地表面において浅い溝状の窪みが平行して数条見られ、かつて畠であったことを窺わせる。

③堆積土

トレンチ南端から0.7m間(以下ではトレンチ南端からの水平距離を~m地点と呼ぶ。)の傾斜面は、腐葉土直下に石積が見られる。2石以上の重なりがあるが、原位置を保っているか、転落しているかの判別は困難である。円筒埴輪片1点を葺石の隙間に確認している。0.7m地点から北は石積がなくなり腐葉土直下で岩盤となるが、石積下端に基底石がないこと、石積下端の石材が流入土上にあること、明瞭な地山の傾斜変換点がないことから、石積が転落して岩盤が露出した状態と判断される。墳丘裾は地表面観察から1.3m地点と推測していたが、その地点では岩盤の地山ラインがまだ下方に傾斜している。この付近から下位にかけて(7m地点まで)、腐葉土下に流入土であるしまりの悪い浅黄色砂質土が堆積する。さらにその下には葺石や埴輪片の混ざった良くしまった明黄褐色土が2m地点から6m地点まで堆積する。土層の傾斜は1m地点付近の岩盤の傾斜



第21図 トレンチ1 平面図及び断面・立面図 (1/60)



第22図 トレンチ1 蓋石 墓輪検出状況及び蓋石平面・立面図 (1/30)

と同じ角度で、上場ラインは岩盤傾斜ラインから延びて降っている。堆積の上位は埴輪片と混ざって人頭大の葺石が、下位には小礫が目立つ。小礫と混在する埴輪片は大きく多量である。よって、明黄褐色土も流入土で、葺石は崩落したものといえる。この流入土の下は地山である岩盤が傾斜し、2.9m地点で水平になる。この地点が墳丘裾である。6m地点から北はほぼ表土直下に岩盤が見られ、地表からの深度は15~20cmを測る。

④墳丘裾

2.9m地点で岩盤の傾斜が水平となり、墳丘裾が想定される。地表面から想定していた墳丘裾からは約1.6m外側(北側)となる。墳丘裾では原位置を保った葺石が5石ある。これらは基底石であり、2石は横長の2石の隙間に充填している。基底石から上の葺石は崩落している。石材は長さ約40cmで他の転落石よりやや大型で、横口に配している。石材は全て花崗岩である。基底石の設置方法は岩盤の傾斜変換付近を15cm以上掘り込んで中に石材をはめ込んでいる。石材と掘り込みの隙間には置土(にぶい褐色土)を充填する。また、墳丘傾斜面と基底石の隙間は小礫を含むにぶい褐色土が裏込め土として見られる。基底石の上位にも小礫が散乱するが、崩落した葺石の裏込めに使用されていた可能性が推測される。墳丘裾の標高として地山変換点において約31.7mを測る。

⑤墳丘の傾斜

墳丘は墳丘裾から傾斜変換しながら立ち上がる。特に2m地点に墳端部の地山整形による明瞭な傾斜変換点がある(墳丘裾から70cm南)。墳丘裾から2m地点で40°、2m地点から上位で20°を測る。

⑥墳丘裾テラス

墳丘裾から外側(北側)は幅約3.2mのテラスがある(墳丘裾テラス)。基底石の下端付近で31.7m、テラス先端で標高31.6mを測り、比高差10°のほぼ水平をなす。テラスの地山面は岩盤であるが、テラスの北側(外側)が岩盤の節理が顕著であるのに対して、テラス地点は比較的マサ土化し節理は目立たない。墳丘裾テラスでは多量の埴輪片が出土した。特に3~4m地点に集中する。付近に埴輪列が推測されるが、トレンチ内においては掘り込みや置土は確認できなかった。

⑦墳丘裾テラスの外側

墳丘裾のテラスから外側は節理の顕著な岩盤がゆるやかに傾斜している。6m地点で標高約31.6m、トレンチ北端の12m地点で標高約30.9mを測り、6m間で70cmの比高差である。この付

近は表土直下に地山の岩盤があり、出土遺物は認められない。よって、墳丘裾テラスの外側に遺構はなく、自然地形の傾斜と判断できる。

⑧葺石・小礫

葺石は人頭大の大きさで石材は花崗岩を主体として一部、安山岩、雲母片岩が見られる。取上げた石材は約80石である。

小礫は葺石の裏込めで見られるが、多くは二次的に移動し埴輪片と混在する。墳丘裾周辺に多く、埴輪片との割合は基底石から外側で埴輪片が、内側で小礫が多い傾向にある。大きさは4~7°で多くは岩盤を破碎したものである。地山整形時の岩盤片を利用したと思われる。わずかに岩盤片以外の丸みをもった花崗岩・安山岩片もある。

⑨まとめ

トレンチ1では地表面で観察された地点よりも約1.6m外側で墳丘裾を確認した。墳丘裾の外側には幅約3.2mのテラスが見られ、標高31.6~31.7mを測る。テラスの外側は緩やかに地山が傾斜し、古墳の施設は確認できなかった。葺石の多くは崩落し、墳丘裾は基底石がからうじて残存していた。

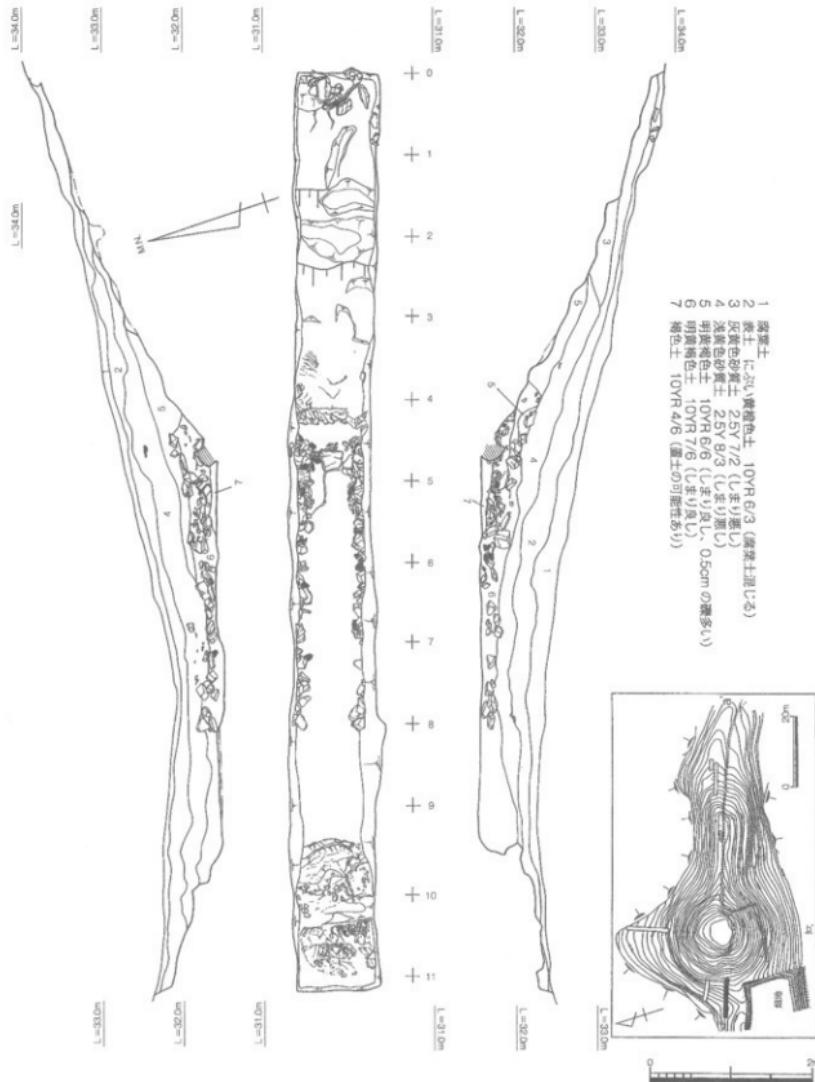
(2)トレンチ2

①目的

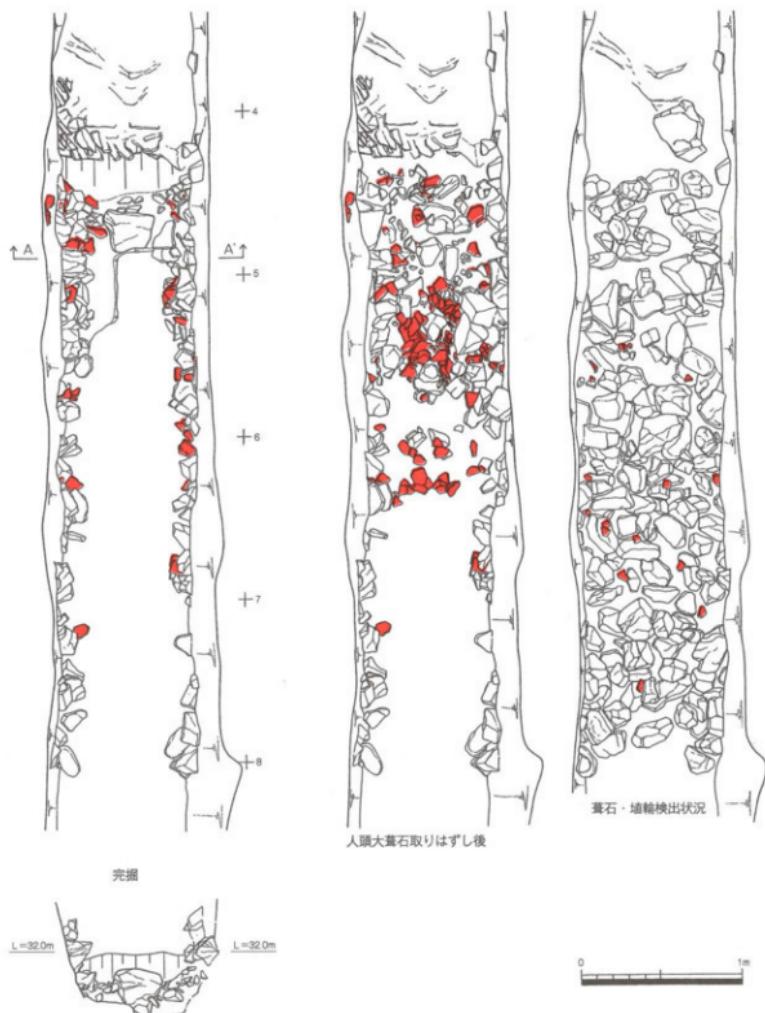
古墳は東西に延びる尾根を利用して築造されている。後円部西側は尾根に連続することから、堀切りによって墳丘を自然地形から切り離している可能性が想定された。また、地表面において後円部裾は北から西にかけて葺石が顕著で明瞭な傾斜変換が見られる。ところが、後円部西側では墳丘の崩落が進行し、不明瞭になっている。墳丘はながらに尾根につながり、広範囲に葺石が散乱している。トレンチ2は西側の墳丘裾を把握し、堀切りの有無を確認することを目的とした。

②トレンチの場所

古墳は北東に延びる尾根が東に屈曲する地点に築造されている。よって墳丘主軸と西から続く尾根の主軸にはずれが見られる。そこで、トレンチの方向は墳丘主軸に平行させ、尾根との関わりを観察するために主軸から1m南側にずらし長さ11m、幅1mで設定した。トレンチ東端(墳丘側の起点)は後円部中心から14m西で、地表から復元される墳丘裾の想定ラインからは1.5m東である。この地点は墳丘がながらに傾斜し、葺石が散乱している。トレンチ西端はトレンチ南の畑の法面を参考にして、墳丘から下った地形が再び立ち上がりはじめた地点とした。



第23図 レンチ2 平面図及び断面・立面図 (1/60)



第24図 トレンチ2 葺石・埴輪 検状況及び葺石 平面・立面図 (1/30)

③堀切り

墳丘と西側尾根の境に堀切り遺構が確認できた。堀切りの西側(尾根側)は急傾斜で尾根上に立ち上がる。東側は墳丘が傾斜変換しながら立ち上がる。堀切り底は標高31.6mの平坦地で、底場は長さ約4.6mを測る。トレチ内では底場から埋葬施設等の遺構は確認できなかった。トレチ設定箇所は尾根主軸上ではなく、北側に尾根が傾斜している地点である。よって、トレチ南壁と北壁では堀切りから尾根への傾斜角度が異なる。南側が比較的急傾斜に対して、北側はゆるやかである。南側は50cm間で急傾斜に0.65m立ち上がり、以西はゆるやかとなる。地山は岩盤で、立ち上がりは節理が顕著に認められる。尾根上も節理が顕著であり、トレチ内では埋葬施設等の遺構は確認できない。一方、堀切りの底場はマサ土化し節理は顕著でない。

④堆積土

トレチ東端から2.5m西(以下ではトレチ南端からの水平距離を~m地点と呼ぶ。)までは腐葉上直下で岩盤が見られる。トレチ東端は根に引っかかった状態で葺石が13石残存していた。原位置を保っているかどうかは不明である。1.4m地点と2.5m地点に傾斜変換を認めるが、テラスといえる明瞭な変換点ではない。この地点が地表面から想定した墳丘裾ラインであったが、墳丘裾はさらに西に伸びることが判明した。土層はこの辺りから表土下にしまりの悪い浅黄色砂質土が堆積する。この層は2.5m地点から6.4m地点にかけてはゆるやかに傾斜し、以西10.5mにかけてほぼ水平に堆積している。浅黄色砂質土の下には葺石、埴輪の混在するしまりの良い明黄褐色土が堆積する。3m地点から6.5m地点にかけて緩やかに傾斜して降り、以西はほぼ水平に堆積している。これらの堆積土は埴輪片を多量に含むことから流入土と考えられる。

⑤墳丘裾

墳丘は葺石がほとんど崩落しており、地山の立ち上がりが見られる。一部岩盤が顕著であるが、全体的にはマサ土化している。墳丘裾は4.8m地点に認められる。この地点では水平な堀切りの底場から墳丘が立ち上がる。葺石はほとんど崩落しているが、基底石と考えられる長さ約30cmの大型の花崗岩が1石、原位置を保っている。基底石の下位で標高31.7mを測る。基底石と墳丘の隙間に小さな穴が認められ、裏込めが指摘できるが、小穴に泥じり比較的大きな埴輪片も混在するため、搅乱は顕著である。基底石の前面には葺石や埴輪片を含まない

褐色土が幅約1mに堆積しており、置土の可能性がある。この堆積土によって基底石下部は埋没している。

⑥墳丘の傾斜

墳丘は地山整形によって造作されている。傾斜変換しながら立ち上がるが、墳丘裾から0.8m東の4m地点に明瞭な傾斜変換が見られる。墳丘裾から4m地点は40°、4m地点から上位は30°の傾斜である。地山は4m地点から上位に比較して、墳丘裾から4m地点で岩盤の露出が目立つ。

⑦葺石、小碟

葺石で確実に原位置を保っているのは基底石1石のみで多くは崩落した状態で検出された。トレチ東端に13石が墳丘傾斜面に認められるが、原位置を保つかどうか判然としない。石材は花崗岩を主体として若干安山岩、雲母片岩を含む。

小碟は基底石の背面や前面に散布しているが、原位置と二次的移動を区別するのは困難である。背面の小碟は若干の埴輪片が混在し、前面は多量の埴輪片と混在する。石材は岩盤の破碎した角礫が目立つが、若干安山岩片も確認できる。

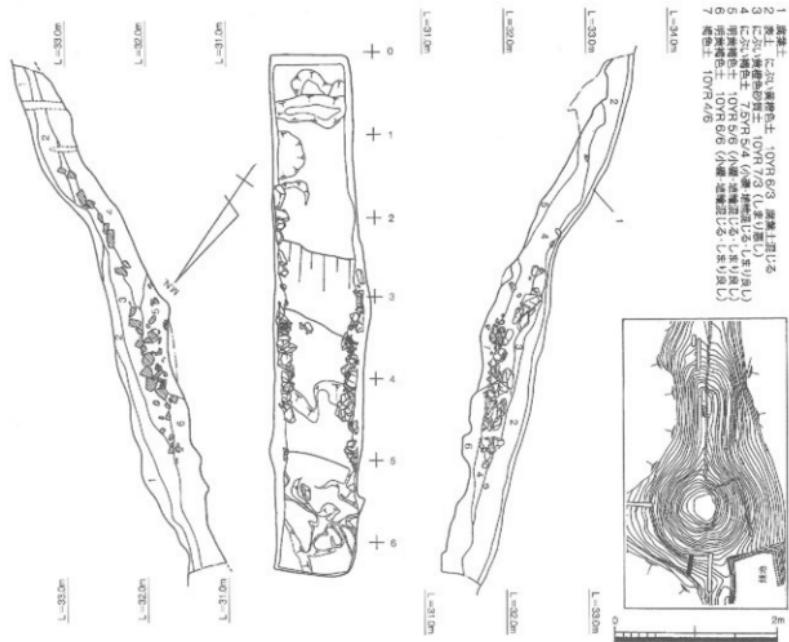
⑧まとめ

墳丘を尾根から切り離した堀切りが検出された。堀切りの底場は幅約4.6mを測り、水平である。底場の標高は31.6mでトレチ1の墳丘裾のテラスの標高と一致し、墳丘の周囲を水平に整形している。墳丘裾は水平な堀切りの底場から墳丘が立ち上がるため明瞭である。地表面から想定された墳丘裾からは約3.4m西となる。墳丘裾には基底石が1石確認できた。

(3)トレチ3

①目的

後円部西から北にかけては基壇状の石積が見られ、地表面において墳丘裾が想定できる。しかし、発掘調査の結果、トレチ1では想定地より1.6m外側、トレチ2では3.4m外側に墳丘裾が判明し、墳丘規模と、後円部の中心に修正が必要となった。一方、墳丘外の様子として、トレチ2は尾根に向かうように設定したため堀切りから西側は尾根に向って地形が立ち上がっている。トレチ1は墳丘外にゆるやかな傾斜の平場が認められたが、調査の結果、墳丘から外は幅3.2mのテラスがあり、その外側は緩やかに自然地形で傾斜していることが判明した。トレチ1とトレチ2の間は墳丘の外側に尾根の高まりや平場はなく、後世の改変と思われる段が認められ傾斜して降っている。



第25図 テレンチ3 平面図及び断面・立面図(1/60)

そこで、テレンチ3は後円部径を導くことと、墳丘外の様子を明らかにすることを目的として、テレンチ1、テレンチ2の補足として設定した。

②テレンチの場所

後円部西から北に見られる基壇状の石積はテレンチ2付近で墳丘の崩落によって不明瞭になっている。テレンチ3は基壇状の石積の明瞭な地点に長さ6m、幅1mで設定した。テレンチ東端は後円部中心から15m西で、墳丘裾の想定地点から2m東(墳丘側)である。

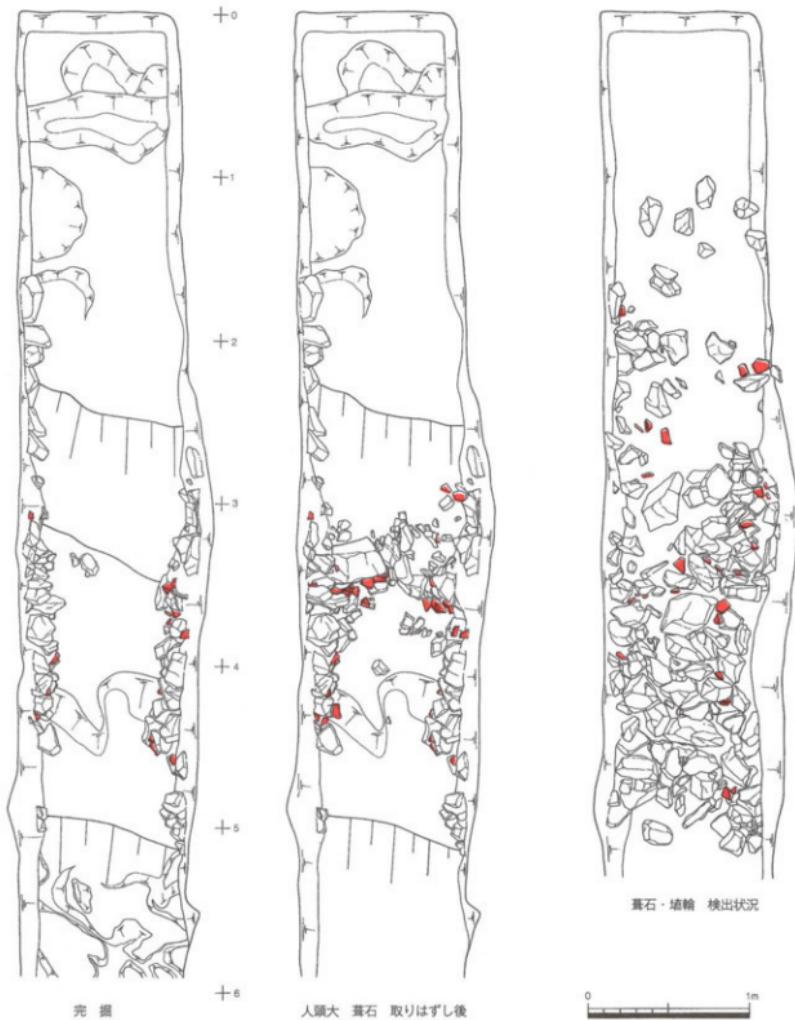
③堆積

テレンチ東半は地表が基壇状であり、葺石の検出を期待したが、葺石は崩落しており、流入土が堆積していた。テレンチ全体に腐葉土・表土の下にしまりの悪いにぶい黄橙色砂質土、その下にしまりの良いにぶい褐色土と明黄褐色土が堆積している。葺石は表土下の2層の堆積土に混在して見られ、崩落による二次的な移動が想定される。地表面で想定された墳丘裾である基壇状立ち上がりの裾部は堆

積土の下において地山の傾斜面に位置し、墳丘裾でないことが判明した。埴輪片は崩落した葺石と混在している。墳丘傾斜面からも少なからず出土していることから、墳丘裾に加えて、段築に樹立していた埴輪片が混在している可能性が強い。なお、テレンチ東端付近の腐葉土中からも埴輪片を確認している。

④墳丘裾

地山上の堆積土は葺石と埴輪片が混在するところから、全て流入土と判断される。地山のラインはしまりのよい褐色土と明黄褐色土の下で確認できる。地山ラインはテレンチ1、テレンチ2ほど明瞭ではないが、テレンチ東端から3.1~3.5m西(以下ではテレンチ東端からの水平距離を~m地点と呼ぶ。)に傾斜変換が見られ、以西は約70cmにわたって水平になっている。この地点の標高は31.7mを測り、テレンチ1、テレンチ2の墳丘裾の標高と同値である。よってこの地点が墳丘裾と考えられる。地表面から想定された墳丘裾からは約1m西となる。この傾斜変換点には原位置を保つ葺石は認められなかった。



第26図 トレンチ3 莖石・埴輪 検出状況 (1/30)

トレンチ1のような基底石をはめ込む掘り込みも地山上では確認できず、地山上に基底石を設置していたと考えられる。地山面は岩盤がマサ土化しており、岩盤の節理は顕著でない。

⑤墳丘の傾斜

墳丘裾から地山が傾斜変換しながら立ち上がる。明瞭ではないが、墳丘裾から0.8~0.9m東に傾斜変換が認められる。傾斜角度は20~30°である。

⑥墳丘裾のテラス

墳丘裾の外側は幅70cmのテラスが見られ、以西は緩やかに傾斜する。5m地点から西はやや傾斜が強くなり、地山の搅乱が顕著になる。西半がやや不明瞭ではあるが、墳丘裾から5mまでがトレンチ1に見られた墳丘裾のテラスに相当すると思われる。幅はトレンチ1よりも約1m狭いが、標高は31.5~31.7mで共通する。

⑦まとめ

トレンチ3付近の基壇状の立ち上がりは後世の堆積ということが明らかとなった。墳丘裾は地表面から想定される地点より約1m外側に見られる。原位置を保った基底石は見られなかったが、地山の傾斜変換点が明瞭に見られ、その地点の標高が31.7mでトレンチ1、トレンチ2の墳丘裾と一致することから墳丘裾と断定可能である。墳丘裾の外側はテラスが認められる。トレンチ1のテラスと比較して幅が狭い。テラスの外側は自然地形が緩やかに傾斜する。

(4)トレンチ4

①目的

前方部先端は後円部北~西部に比べて地表面で観察される墳丘裾は不明瞭である。トレンチ4は前方部先端の墳丘裾を把握することを目的とした。

②トレンチの場所

古墳は墳丘主軸から南は開墾による改変が著しく、墳丘主軸上は段差になっている。よって、トレンチは主軸上から3m北に設定した。方向は墳丘主軸に平行して、長さ9m、幅1mで設定した。トレンチ西端は前方部頂の先端(東端)から4m東の墳丘傾斜面、トレンチ東端は大木のため便宜的な設定となった。

③堆積

トレンチ西端から2.5m東(以下ではトレンチ西端からの水平距離を~m地点と呼ぶ。)までは表土下に地山が認められる(深度0.2m)。2.5m地点から東はにぶい黄褐色土や明黄褐色の流入土を認める。明黄褐色土はしまりの良い土で、堆積土中に

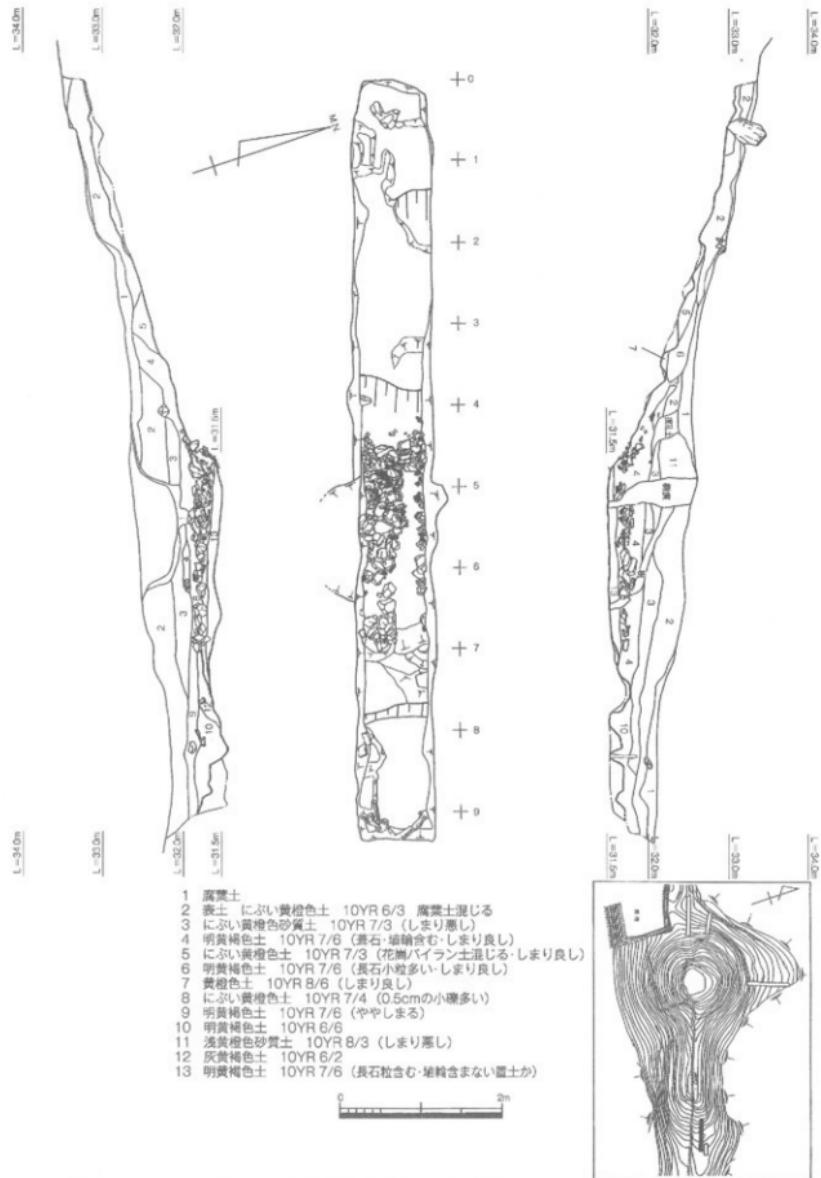
は崩落した葺石や埴輪片が多く含む。葺石、埴輪片は4.3m地点から7m地点にかけて多い。葺石は人頭大で埴輪片と混在するが、上位で葺石、下位で埴輪片の割合が高い。埴輪片は掘切りの底場に多いが、墳丘傾斜面においても比較的大型片が目立ち、上位からの二次的な転落も想定される。昭和26年(1951)の京都大学による調査において前方部の北東隅に埴輪を確認しており、報告書には墳丘測量図の前方部北東部に埴輪の表現があるが、この位置はトレンチ4に近く、堀切りの底場で確認した埴輪と一連である可能性が強い。なお、埴輪片は表土中から家形埴輪らしき破片を確認している。

④堀切り

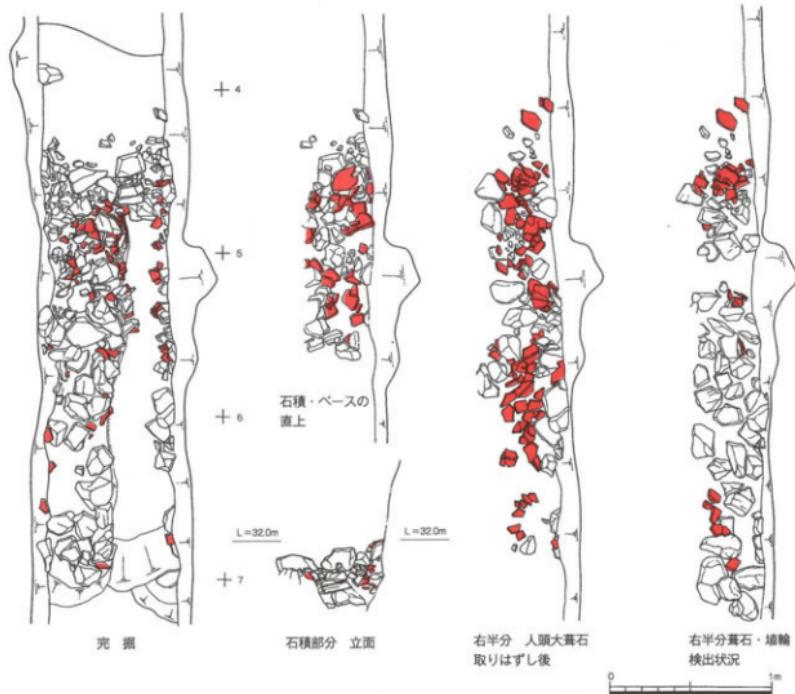
地山は岩盤がマサ土化しており、節理は顕著でない。墳丘は地山整形による立ち上がりが見られる。4.8m地点が墳丘裾で、以東は平坦地が続き、トレンチ東端で若干の立ち上がりが認められる。よって、前方部先端も後円部先端と同様に自然地形から墳丘を切り離すための掘切りの存在が明らかとなった。堀切りの底場は墳丘裾から東に2m(約7m地点)間はほぼ水平で、そこからトレンチ東端にかけてゆるやかに立ち上がる。トレンチに隣接して大木があることから、搅乱が顕著である。このトレンチからは堀切りの立ち上がりの様子は十分に把握できなかった。底場の標高は31.5~31.6mを測る。この高さはトレンチ2の堀切りの底場、トレンチ1、トレンチ3の墳丘裾のテラスと同値であり、水平に整形された基盤が指摘できる。堀切りの底場に埋葬施設等の遺構は確認していない。

⑤墳丘裾

4.8m地点に掘切りの底場と墳丘の傾斜変換点が認められる。また、墳丘裾には原位置を保つ葺石が3~4段確認できる。最下段の方形の花崗岩が基底石である。縦長約20cm、横長はトレンチ外に延びるために明瞭でないが20cm以上はある。トレンチ1、トレンチ2と同様に基底石は大型石材の選択が指摘できる。2段目、3段目は小口積が見られる。4段目は原位置を保つか判然としないが、3段目との間には小蝶が顕著に認められる。2段目以上の葺石は石材を斜めに差し込むように石積している。基底石の下方1/3は明黄褐色土によって埋没していた。この上は墳丘裾から7m地点まで堀切り底場の水平面に約10cm堆積している。土層中からは埴輪、葺石等が認められず、置土の可能性が指摘できる。



第27図 トレンチ4 平面図及び断面・立面図 (1/60)



第28図 トレンチ4 葦石・埴輪 検出状況及び葺石 平面・立面図 (1/30)

⑥墳丘の傾斜

墳丘は傾斜変換しながら立ち上がる。特に墳丘裾から約1m西の3.6~3.8m地点に明瞭に認められる。墳丘裾から3.6~3.8m地点が約35°、3.6~3.8m地点から以西が20°の傾斜である。1.4m地点にも若干傾斜変換が見られ、以西ではテラス状に近い傾斜であるが、テラスと断定はできない。傾斜面は地山整形されており、マサ土化が進むが、部分的に岩盤部分がある。節理は顕著には認められない。

⑦葺石・小礫

多くは崩落しているが、今回の調査では最も良好に残存していた。崩落した葺石は4.3m地点から7m地点に集中し、4.3mから西では確認できない。石材は花崗岩を主体として一部雲母片岩を含む。

小礫は墳丘傾斜面と葺石の隙間に充填している。葺石の残存状態が良好なためか、他のトレンチに較べて崩落した小礫は少ない。小礫は他のトレンチと同様、多くは破碎した岩盤片で、一部、安山岩片を含む。

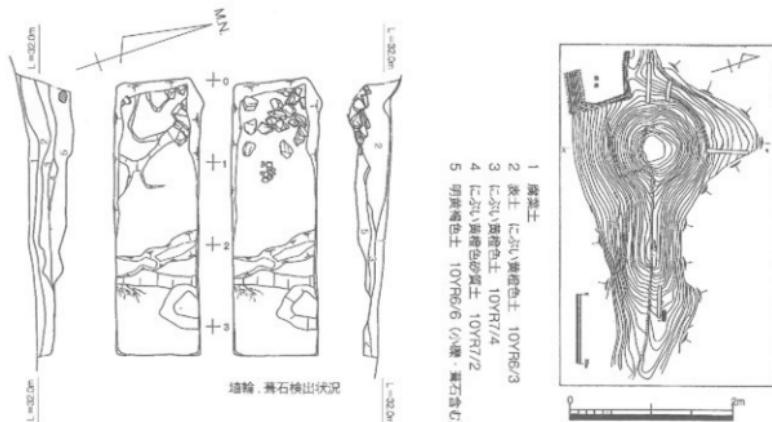
⑧まとめ

前方部先端も後円部先端と同様に堀切りを確認した。ただし後円部のような深度ではなく、墳丘裾の地山を整形した程度のものである。堀切りの底場は標高31.5~31.6mを測り、後円部先端の堀切りの底場や後円部墳丘裾のテラスの標高と一致する。従って、墳丘周囲に水平な基盤が取巻いている状況が指摘できる。墳丘裾は葺石が4段残存していた。基底石は大型の石材を用い、上段は小口積しているため、表面に見られる石材は小さい。1ヶ所のみではあるが葺石の構造が明らかになった。

(5)トレンチ5

①目的

トレンチ4では前方部先端で堀切りを確認した。堀切りの東側はトレンチ東端付近で地山の立ち上がりが確認できたが、東に大木があり、立ち上がりの様子は判然としなかった。また、樹根の搅乱により、



第29図 トレンチ5 平面図及び断面・立面図 (1/60)

トレンチ内においても立ち上がりの様子は不明瞭であった。そこで、トレンチ4に隣接してトレンチ5を設定し、堀切りの立ち上がりの様子を明らかにすることを目的とした。

②トレンチの場所

トレンチ4では墳丘裾から東に2m(約7m地点)間がほぼ水平で、そこからトレンチ東端にかけてはゆるやかに立ち上がる様子が窺えた。そこで、トレンチ4に隣接して、堀切りの水平な底場を一部含む形でトレンチ西端を決定した。トレンチ東端は堀切りの立ち上がりの距離が想定できず、とりあえず長さ3m、幅1mで設定した。

③堆積

腐葉土、表土の下にしまりの悪いにぶい黄橙色土、さらにその下にしまりの良い明黄橙色土が見られる。明黄橙色土の下に地山が確認できる。深度は最も深い箇所で約0.6mを測る。

④堀切り

地山のラインはトレンチ西端から1m東(以下ではトレンチ西端からの水平距離を~m地点と呼ぶ。)の間は標高31.6mで水平である。1m地点から東にかけてはゆるやかに立ち上がる。傾斜面には凹凸が目立つ。2.5m地点で立ち上がり以東はほぼ水平になっているが、地山の凹凸は目立つ。2.5m地点で標高31.8mm、堀切りの深度は20cmを測る。地山はマサ土化しているが、部分的に岩盤が見受けられる。

⑤葺石

葺石はトレンチ西端から1m地点までに18石認められたが、明黄褐色土上にあり、全て崩落石と考えられる。埴輪片は表土から集中して出土した。一部形象埴輪片を含む。墳丘からの流れ込みか。

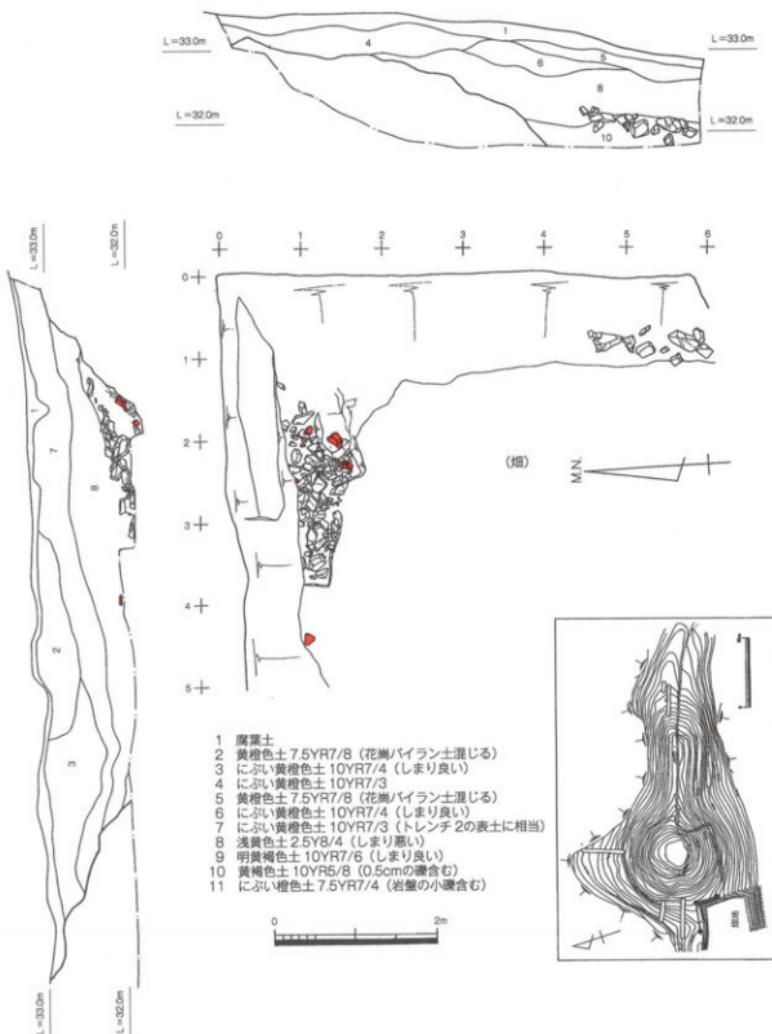
⑥まとめ

トレンチ4で掘めなかった、堀切りの東側立ち上がりの様子が明らかとなった。標高31.6mの底場から緩やかに立ち上がる。地山面は凹凸が顕著に見られる。堀切りの深度は20cmで浅く、墳丘を自然地形から切り離す意図よりは、墳丘の水平基盤を造作するため、結果的に堀切り状になったものと推測する。

(6) 後円部南西部の畑地

①目的

後円部南西部には墳丘に隣接する形で畑地がある。この場所は平成12年2月に携帯・自動車電話無線基地局の新設工事によって埋蔵文化財の試掘調査が行なわれた場所である。試掘調査の結果、古墳に関わる遺構は確認できなかつたが、古墳の隣接地という考慮があつてか、現在無線基地は古墳から南東の地に設置されている。しかし、当地にはその後畑地が開墾された。調査以前からこの畑地内では埴輪片がしばしば採集された。そこで、トレンチによる確認調査を実施する前にこの畑地の法面を精査し、土層の再確認を行つた。



第30図 煙地北東隅平面図及び断面・立面図 (1/60)

②南壁

南壁は埴丘西側の尾根に平行している。法面の高さは約1mである。

法面東端から3m(以下では法面東端からの水平距離を～m地点と呼ぶ。)と5.5m地点は腐葉土下に花崗バイラン土の混ざった比較的新しい時期に堆積した上層が認められる。この上層の下(7層)がトレンチ2における表土に相当する。7層上端は3m地点からゆるやかに傾斜してくだりおり、トレンチ2と共通する。2・3層は比較的新しい時期に開墾等から尾根と埴丘の境の窪みを埋めたものと判断できる。7層の下はしまりの悪い浅黄褐色土が堆積し、その下位に葺石と埴輪片の混ざるしまりの良いにぶい褐色土が見られる。

南壁東端の標高33m地点に岩盤が確認でき、西に向って急傾斜して降っている。2m地点まで法面で確認できるが、さらに傾斜して土中に入りこんでいる。法面を利用した確認であるため、土中の掘削は行わず、標高31.8mまで確認した。トレンチ2の調査成果からは、この岩盤の傾斜が埴丘である。また、埴丘裾は標高31.7mであることから、10cm掘り下げると埴丘裾に到達することになる。確かに2m地点で岩盤の傾斜は緩くなり、平坦気味になってしまい、埴丘裾は2m地点を少し越えた地点に想定できる。埴丘の傾斜は約50°と急傾斜を呈する。

岩盤は6m地点より再び確認できる。6.4m地点の底面に見られる岩盤は西に傾斜変換しながら立ち上がる。傾斜角度は30~50°である。この岩盤の立ち上がりが堀切りの西側といえる。法面では6.4m地点で標高32.0mを測り、東は土中であるが、堀切りの底面を標高31.6mとして復元すると、6m地点が堀切りの底場の西端となる。こうして導き出された復元から堀切りの底場を導き出すと、長さ約4.1mとなり、トレンチ2の堀切りの底場とはほぼ一致する。南壁の法面は尾根に平行しており、堀切り西側の立ち上がりの様子を断面で窺うことができる。堀切りの立ち上がりは7.9m地点で、標高約32.8mである。底場から立ち上がり部までの水平距離約1.8m、深度約1.2mを測る。立ち上がり部から西はゆるやかに傾斜する自然地形である。

葺石には埴輪片が混在しており、すべて崩落したものである。大型の埴輪片が1~2m地点において岩盤の傾斜面直上で確認できる。

③東壁

この地点は畠地となる前から開墾されており、標高32mから上位では花崗岩バイラン土混じりの土

層が確認できる。東壁も北端から標高33m付近において岩盤が確認でき、南に向けてゆるやかに傾斜している。岩盤の傾斜は北端から4m南(以下では法面北端からの水平距離を～m地点と呼ぶ。)において土中に入り込む。この地点における標高は31.8mを測り、トレンチ調査成果からは後10cm下で埴丘裾に至る。東壁は後円部に対して直交していないため、岩盤の傾斜は緩やかである。2.9m地点から急傾斜となり、土中に入るまでの角度は40°~50°である。

4.5m地点から南にかけて標高32m付近に葺石が確認できる。葺石の下には黄褐色土が堆積するが、遺物が認められないため、原位置の判断はできない。これら葺石はほぼ水平に堆積しており、黄褐色土の堆積やその下の岩盤のラインがほぼ水平である可能性を示している。

④まとめ

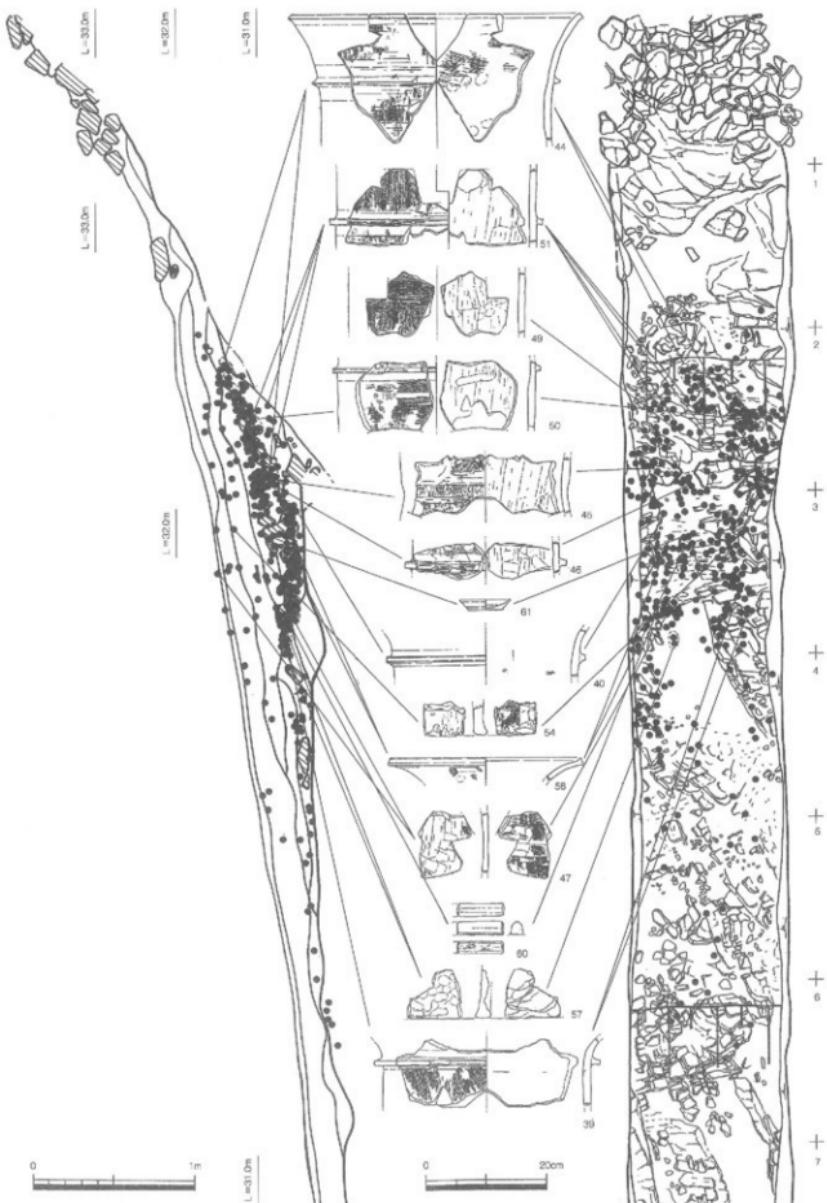
平成12年2月のトレンチ調査では掘削深度が20~40cmであったため、遺構の確認ができなかつた。結果、当地には畠が造作され、埴丘をはじめ葺石、埴輪片が破壊されることとなった。しかし、一部はかろうじて土中に保存されていることも明らかとなった。今後は畠地も含めた保護措置が必要である。畠地法面の再調査ではまた、堀切りの様子などトレンチ2の補足データを収集することができ、堀切り西側の立ち上がりの様子が判明し、尾根主軸上からの深度が約1.2mと判明した。

第2節 出土遺物

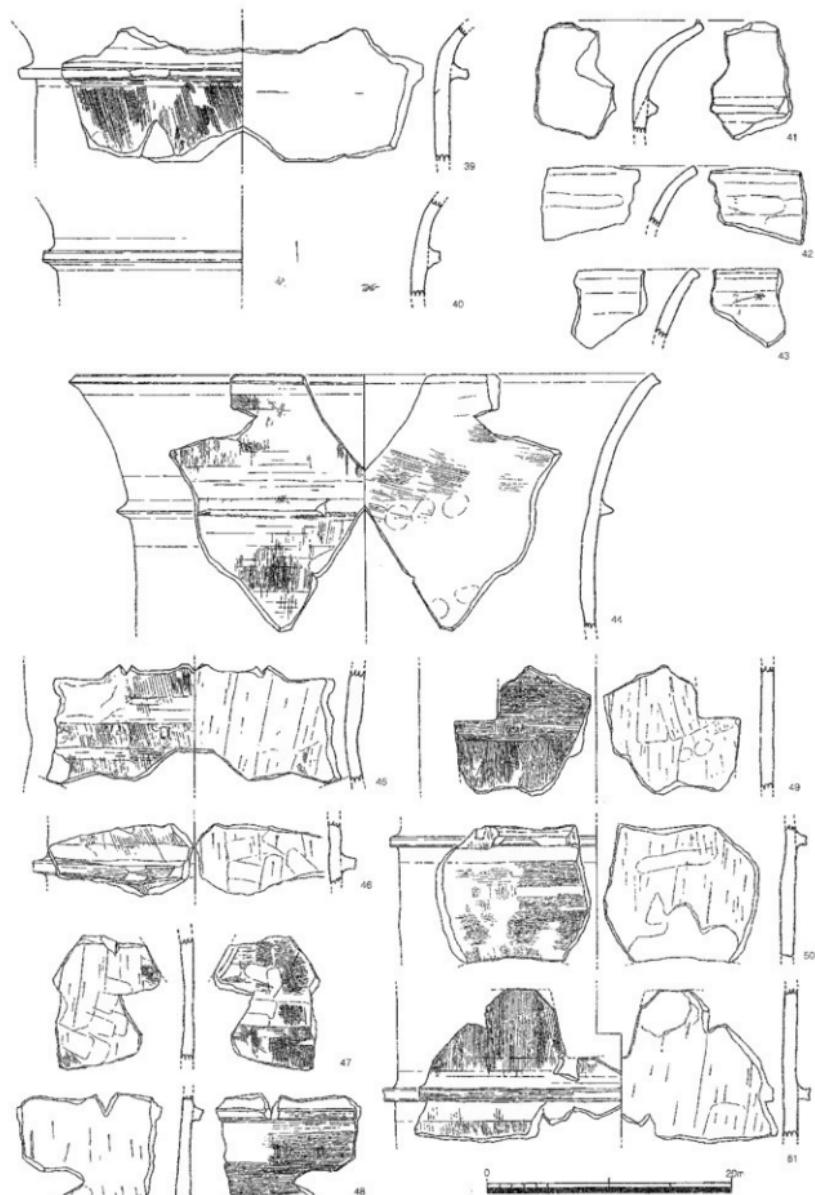
(1)トレンチ1

①出土状況

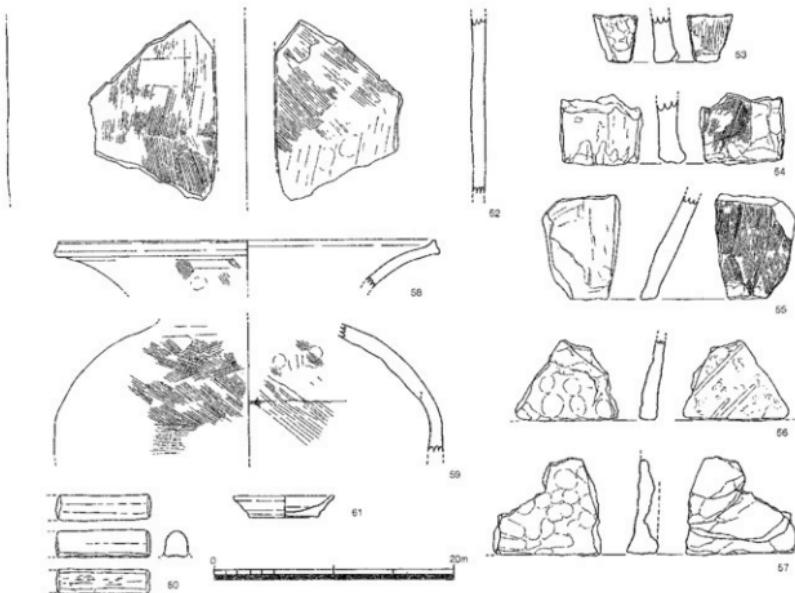
1.8m地点から6m地点にかけて埴輪片が認められた。中でも2~4m地点で多い。レベル的には人頭大の葺石の散乱するにぶい褐色土中の葺石の隙間や下部からまとめて確認している。最も集中する箇所は埴丘裾のテラスで、裾部に埴輪列が巡らされていた可能性が推測される。また、埴丘裾より上位からも多量の出土があり、段築や埴丘頂から転落してきた埴輪片も多いと思われる。底部片は9点出土したが、その全てが葺石よりも上位で、多くが表土からの出土である。葺石の下や埴丘裾のテラスからの出土は皆無であることから、これら底部は段築や埴丘頂からの転落と考えられ、埴丘裾には埴輪列が原位置を保っている可能性もある。葺石に混ざって古代末期の土師器皿が1点出土しており、後世の改変を示す資料も確認できる。



第31図 トレンチ1 遺物出土状況図 (1/30) (1/8)



第32図 トレンチ1 出土遺物(1) (1/4)



第33図 レンチ1 出土遺物(2)(1/4)

②遺物について

レンチ1から出土した遺物は多くが円筒埴輪片である。一部、壺形埴輪か朝顔形埴輪と形象埴輪の可能性のある埴輪片、古代の土師器皿片がある。

円筒埴輪の法量は胴部径30cm前後が多く、40cm前後は少數である。器壁の厚さは0.7~1.2cmで、内面に接合痕を認める資料は少ない。

39~41は胴部から口縁部にかけてである。全て、最上の突帯から曲線をもって外反する。最上の突帯から口縁部までの口縁部高は41で6.5cm、44で10cmを測る。レンチ1で口縁部高の判明するのはこの2点であるが、他のレンチの事例を参考にすると、多くが6~6.5cmであり、44の10cmは唯一である。口縁部端部は上端をややつまみ上げる例(41)、下端部を肥厚させる例(43~44)、あまり肥厚させない例(42)などがある。端部は強弱があるが、どの事例もナデによって面をなしている。口縁部外面はハケ調整の後にナデ仕上げしている。43~44のようにハケ目を消しきっていない例が多い。突帯は端部に強く凹むナデを施す例(40、46、48、50、51)、尖り気味に丸くおさめる例(

39、44)などがある。突帯高は約1cmが多い。突帯の剥離した例も多く、突帯片も多く確認した。突帯の剥離面を観察すると、一次調整の左斜め方向のハケが見られる。45は剥離面に1cm角の方形刺突痕とつい指揮さえが確認できる。外面調整は一次調整として継ハケが施され、そのまま一次調整を残す例(51)、ナデによって一部消えている例(44)がある。また、47~50は継ハケの後横ハケが施されている。47はストロークの短い横ハケ、48~50はストロークの長い直線的な横ハケである。透孔は全体を把握できる資料はないが、三角形(47)と凸形(49,51)があり、52は縱位の直線で方形が推察される。他、50はやや曲線を呈するが形は不明である。透孔に直行して短くハケを施している。

内面調整はケズリが多い。多くは下から上に施しているが、51のように上から下に施されている例もある。また、ケズリが不十分な事例もあり、ケズリとケズリの間にハケやナデが残されている(47)。

底部は自重のため、内側や外側に粘土がはみ出している例が多い。端部は平坦に仕上げられているが調整は粗い。54は外面に剥離痕がある。内面は下端までケズリが見られる例と、指揮さえ・

ナデの顕著な例がある。

58~59は朝顔形か壺形の埴輪片である。58は口径31cmを測る。口縁端部は凹線状の強いナデを施し、上端につまみ上げている。外面は斜めのハケの後に横ナデを施している。外面から口縁端部にかけて赤色顔料を認めるが、内面までは及んでいない。59は胴~頸部である。頸部付近は横ナデによってハケが消されている。ナデの下は斜め方向のハケが見られ、その下には直線的な横ハケが施されている。横ハケ部分は残存状態が悪くストロークの長さは不明である。なお、同一個体の可能性がある突帯部分の小片がある。接合できなかったが、同一個体とすれば朝顔形埴輪となる可能性が強い。

円筒埴輪は底部、41を除き全て外面に赤色顔料が見られた。顔料は透孔や口縁端部まで見られる。51は突帯から上で赤色顔料が顕著であるが突帯下では全く見られない。当初から塗布していなかった可能性がある。また、底部は顔料の付着の認められない例が多い。しかし、皆無ではなく、当初から彩色していなかったかどうか判断としない。57は内面に一部顔料の付着が見られる。

色調は多くが浅黄褐色、ぶい黄褐色を呈する。橙色もあるが事例は少ない。胎土は0.2~0.3cmの長石、石英を含み、雲母、角閃石は希少である。

47は線刻のある円筒埴輪胴部。胴部外面に三角形と思われる透孔があり、その一辺に平行するように2本の細線が見られる。また、この細線から5cm右に平行して1本の細線が見られる。

60は形象埴輪か。断面橢形を呈し、一面が剥離している。両端は一方が破損している。現状での長さ7.6cm、高さ2.2cm、剥離面の幅2cmを測る。人頭大の葺石の上から出土している。

61は古代後半の土師器皿である。口径8.2cm、底径5.2cm、器高1.8cmを測る。底部は突出気味で、同軸ヘラ切り痕が見られる。人頭大の葺石の上から出土している。

(2)トレンチ2

①出土状況

4m地点から8m地点にかけて分布している。特に5~6m地点の墳丘裾で顕著である。墳丘裾から上の4m地点付近では表土など上層からの出土が見られ、段築など墳丘上からの転落が推察されるが、多くは葺石の混在する明黄褐色土で確認できる。

墳丘裾のテラスには大型の埴輪片が目立つ。特に線刻のある66は今回の調査では唯一突帯間の距離の判明した例で、テラス部に多くの埴輪片が見られ、比較的近い場所に底部の存在が推測される。ただし、後世の改変による二次的な移動も顕著で、テラス上には確実に個体の異なる埴輪片が数点確認できる。

底部は3点出土した。トレンチ1と同様に少数で、出土位置も表土など上層にある。段築など墳丘上からの転落が推測され、テラスに近い場所では皆無であることから、墳丘裾のテラスには原位置を保った埴輪が存在する可能性が高い。

②遺物について

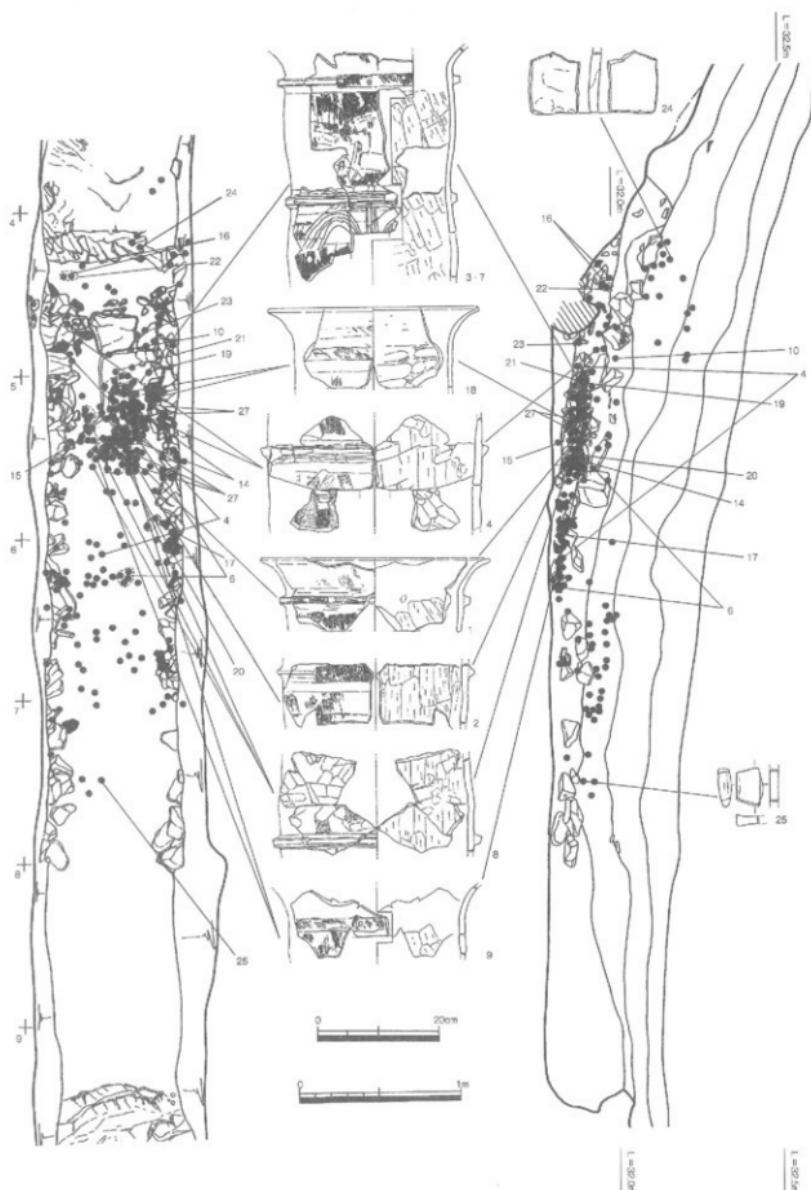
トレンチ2から出土した埴輪は1点の古代後半の土師器皿を除いて全て円筒埴輪片である。

法量は胴部径30cm前後が多く、40cm前後は少数である。器壁の厚さは0.7~1.2cmで、内面に接合痕を認める資料は少ない。

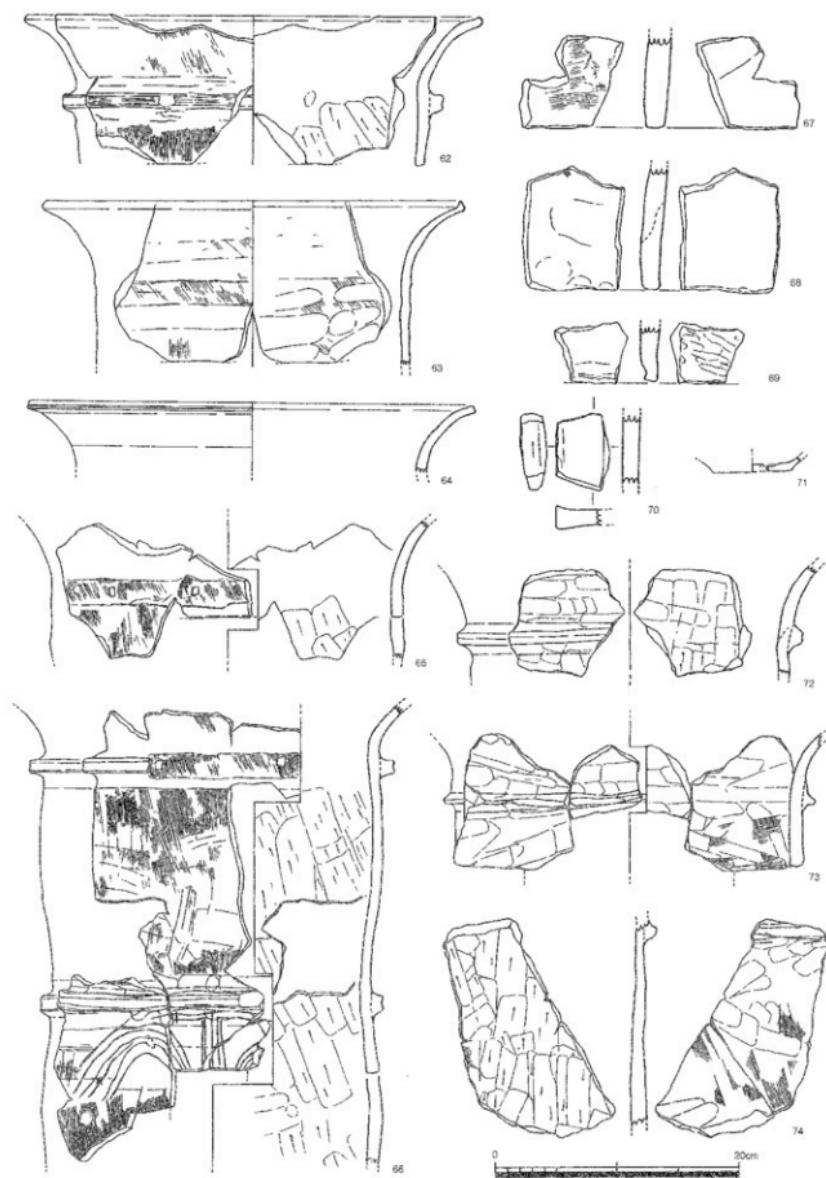
62~65は胴部から口縁部にかけてある。全て最上の突帯から曲線をもって外反する。最上の突帯から口縁部までの口縁部高は62で5.5cm、63で6.5cmを測る。口縁端部は62が上端を若干つまみ上げ、端部のナデは不十分で丸みをもつ。63は薄手の器壁から上端に高くつまみ上げている。64はほとんど肥厚せず、端部を軽くなでて面をなす。口縁部外面はナデが見られるが、斜めのハケが残っている(62、63)。内面は丁寧なナデが見られる。ハケ、ケズリは最上の突帯から下で見られる。突帯は端部を強くなる例(62、66、78、83、84)、弱くなる例(72、75)、尖り気味に丸くおさめる例(73、77、81)などがある。突帯高はおよそ1cmである。突帯の剥離した胴部や突帯片も多い。65、66、76、77では剥離面に一次調整の斜めハケと、方形刺突が見られる。方形刺突間は66で10cm、65で9cm、77で10.5cmを測る。

外面調整は一次調整の縱ハケをナデで消していく例が多い。多くは縱ハケが消し切れていない。特に80、81は縱ハケが目立つ。縱ハケの後、横ハケを施す例は、トレンチ2では少なく、75が唯一である。75は外面にストロークの長い横ハケ、内面にナデとハケを認める。腐葉土からの出土である。胴部内部調整はケズリが多い。ハケ、ナデ調整は63、73、75と少数である。ケズリは一般的に下から上に施すが、74は突帯間で上位から下から上、下位が上から下に施している。一方、67~69の底部はハケ・ナデで、ケズリは認められない。

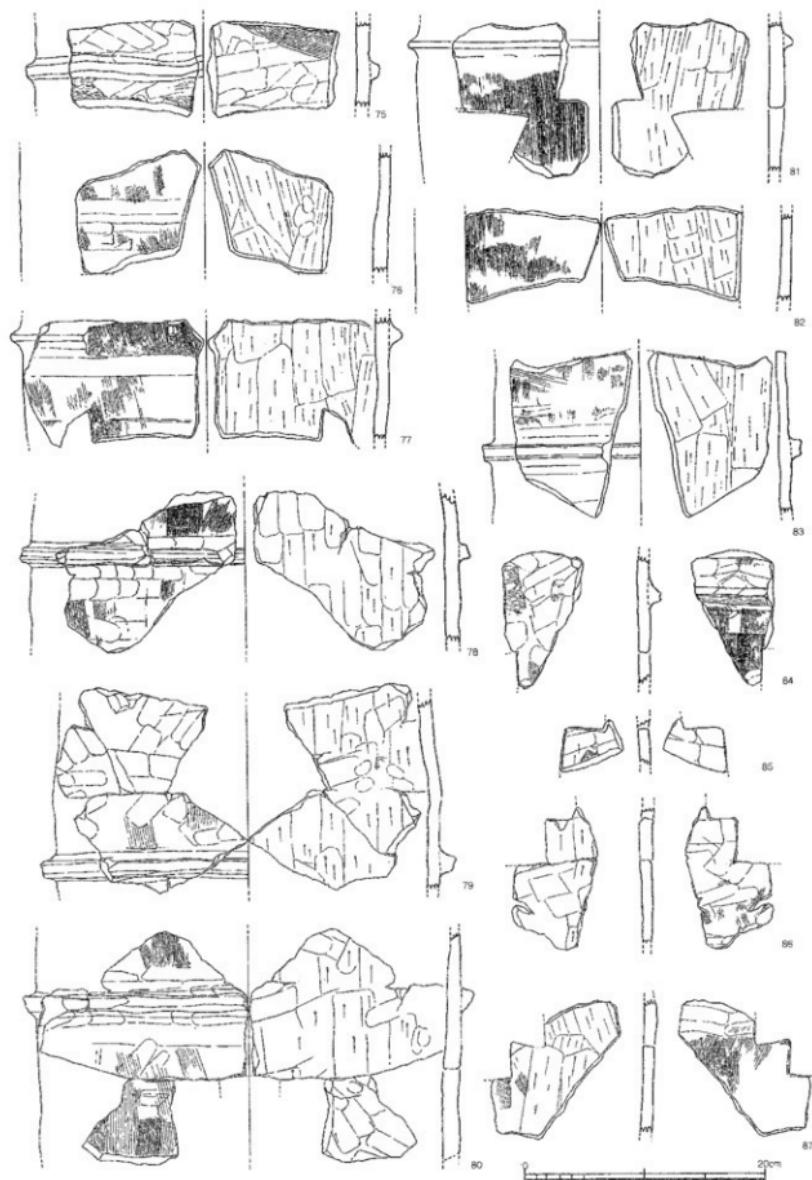
透孔は全体形を認めるものはない。一部から判断するに方形(66、82)、三角形(4)、凸形(85、86、87)が



第34図 トレンチ2 遺物出土状況図 (1/30) (1/8)



第35図 トレンチ2 出土遺物(1) (1/4)



第36図 トレンチ2 出土遺物(2)(1/4)

ある。1個体に2ヶ所以上の透孔は確認しておらず、配置関係は不明である。

赤色顔料はほとんどの埴輪片で外面に確認できる。一方、底部では67にからうじて痕跡が確認できる他は認められない。形象埴輪、もしくは円筒埴輪の鱗の可能性がある70も同様に確認できない。

色調は多くが浅黄橙色、にぶい黄橙色を呈する。胎土は0.2~0.3cmの長石、石英を含み、雲母、角閃石は希少である。

66は線刻のある円筒埴輪。口縁部を欠損するが、62と同一個体である可能性が強い。線刻は上から2段目の胴部にある。突帯から5cm下に横7cm以上、縦4cm以上の方形の透孔があり、透孔の上端に線刻が見られる。透孔の中軸線付近にT字を描き、これを中心として左右に波状ラインを左側に6条、右側に4条以上刻している。左右対称に向か合引彎弧を線の束によって表現するのは、人面絵画によく見られる。愛知県龜塚遺跡、岐阜県今宿遺跡、岐阜県荒尾南遺跡、静岡県栗原遺跡の人面絵画では口の部分が丁字に表現されている。当例のT字の表現は口の部分ではなく、人面であれば額に相当する高い部分に表現されているが、要素的には人面線刻絵画と類似点が多い。線刻は突帯から7cm下までの間に認められるが、この間では一次調整の縦ハケが丁寧に横ナデによって消されている。右側は欠損しており、全体像は把握できない。66は今回の調査で唯一突帯間の確認できる固体である。突帯間は約18cmを測る。2段目透孔の上の1段目胴部には透孔はなく、縦列に連続した透孔は見られない。

70は形象埴輪片か、鱗付埴輪の鱗片である。1面が肥厚し、剥離痕がある。他面は3方とも破損している。赤色顔料は認められない。

71は古代後半の土師器皿である。底部から胴部の小片である。

(3)トレンチ3

①出土状況

2~5m地点に分布する。また、数点トレンチ東端の腐葉土上で出土した。トレンチ1・トレンチ2と同様に墳丘裾のテラスである3~4m地点に多い傾向はあるが、絶対数は少ない。多くは葺石の混在する明黄褐色土から出土している。底部片と形象?埴輪片がそれぞれ1点出土しているが、これらは腐葉土からの出土である。

②遺物について

トレンチ3から出土した遺物は多くが円筒埴輪

片である。一点形象埴輪の可能性のある破片が認められる。

法量は胴部径30cm前後が多く、40cm前後は少数である。

88は胴部から口縁部にかけてである。最上の突帯から曲線をもって外反する。口縁部高は5.5cmを測る。

87~91は突帯の見られる胴部片である。端部に強いナデを施す例(89、90)と丸くおさめる例(88)がある。

外面調整は一次調整の縦ハケを施した後にナデ調整されている。89は左斜めのハケが明瞭に残る。93は縦ハケの後にストロークの長い横ハケが施されている。内面調整はケズりが多いが、一部ハケ・ナデが認められる。95は内面にハケとナデ、接合痕が見られる。接合痕は内面を削る資料ではまず認められない。

器壁の厚さは0.7~1.2cmであるが、92は著しく厚く2.4cmを測る。外面は突帯が剥離しており、方形刺突が見られる。

透孔は全体形の判明する例がないが、部分から判断するに、三角形(94)、凸形(95)などがある。

多くの埴輪片は赤色顔料が付着しているが、91、97、98では認められない。91は器面の剥離が著しく顔料も剥れたものと推察される。97・98は腐葉土からの出土であり、同様に剥れたものと理解したい。

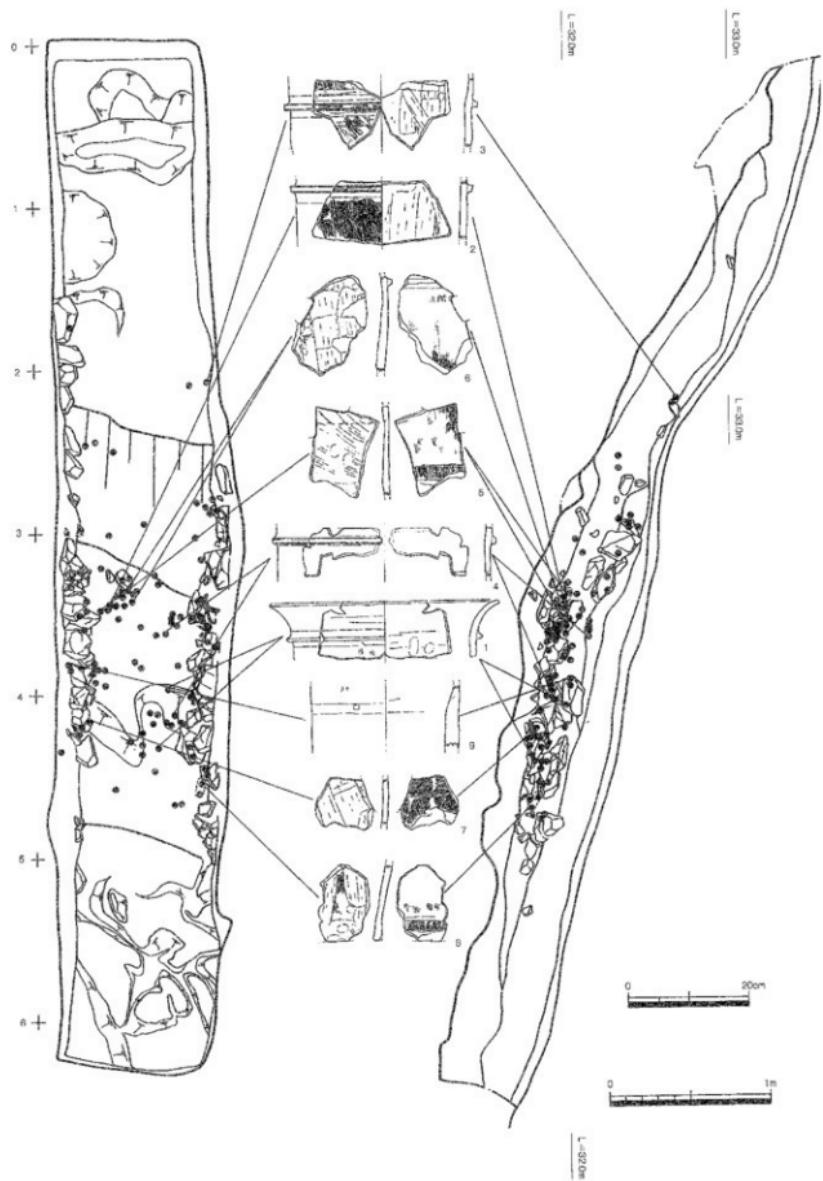
底部片は97の1点出土している。腐葉土からの出土のため、上方からの転落と推察する。98の埴輪片も同様である。98は小片のため形が推察できないが、円筒埴輪ではない。形象埴輪片の可能性が強い。内外面ともにナデ調整し、部分的に端部が残存している。内面は還元によって灰褐色を呈する。

(4)トレンチ4

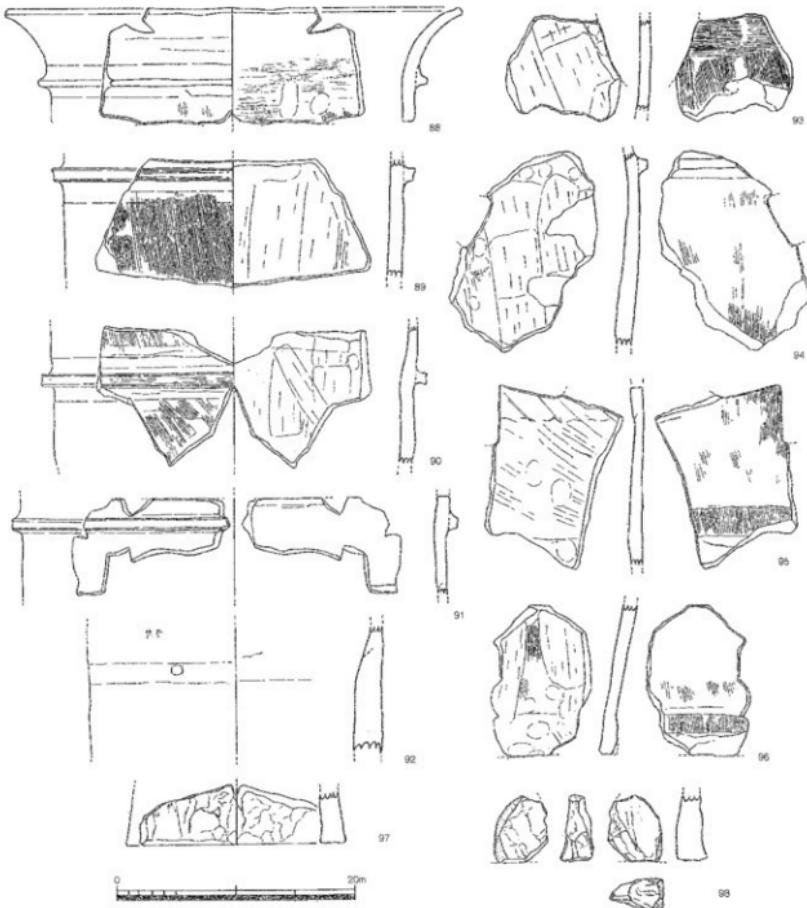
①出土状況

トレンチ4の掘下げは北半分に留めたため、掘削面積は他のトレンチより少ないが、出土遺物の量は今回のトレンチで最も多い。多量の埴輪片が出土している。遺物の分布は4m地点から7m地点にかけて認められる。特に集中するのは墳丘裾部のテラスであるが、墳丘傾斜面にも多くの埴輪片が見られた。大型の埴輪片によって葺石がパックされている状態である。家形埴輪の可能性のある破片が表土で出土した以外は多くが散乱する葺石に混在或はその下部から出土している。

底部片は3点と総数からは少ない。他のトレンチではしばしば表土など上層からの出土が日立つが、ここでは葺石に混在する。



第37図 トレンチ3 遺物出土状況図 (1/30) (1/8)



第38図 トレンチ3 出土遺物 (1/4)

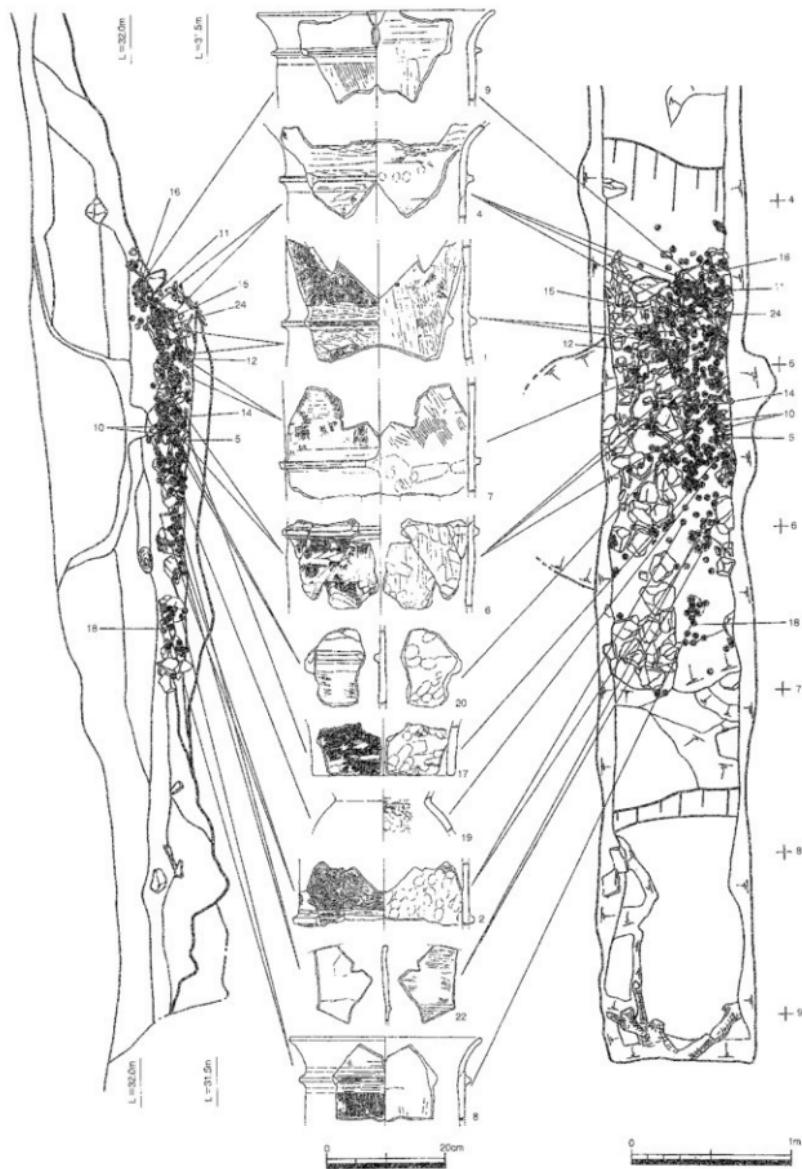
②遺物について

トレンチ4から出土した遺物は多くが円筒埴輪片である。一部壺形埴輪や家形埴輪の可能性のある埴輪片が出土している。

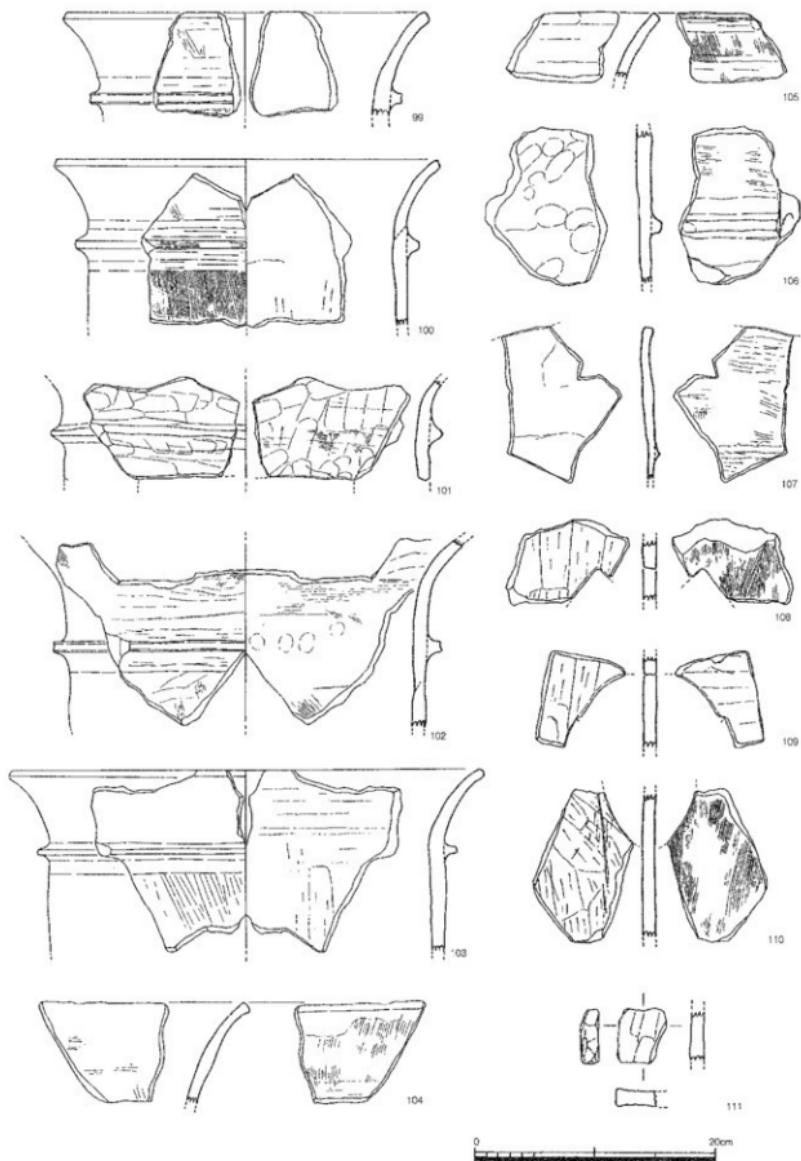
円筒埴輪片は胴部径が30cm前後を測る。胎土、調整において他のトレンチよりバリエイションが目立つ。

99～105は口縁部である。最上の突帯から曲線をもって外反する。最上の突帯から口縁部までの

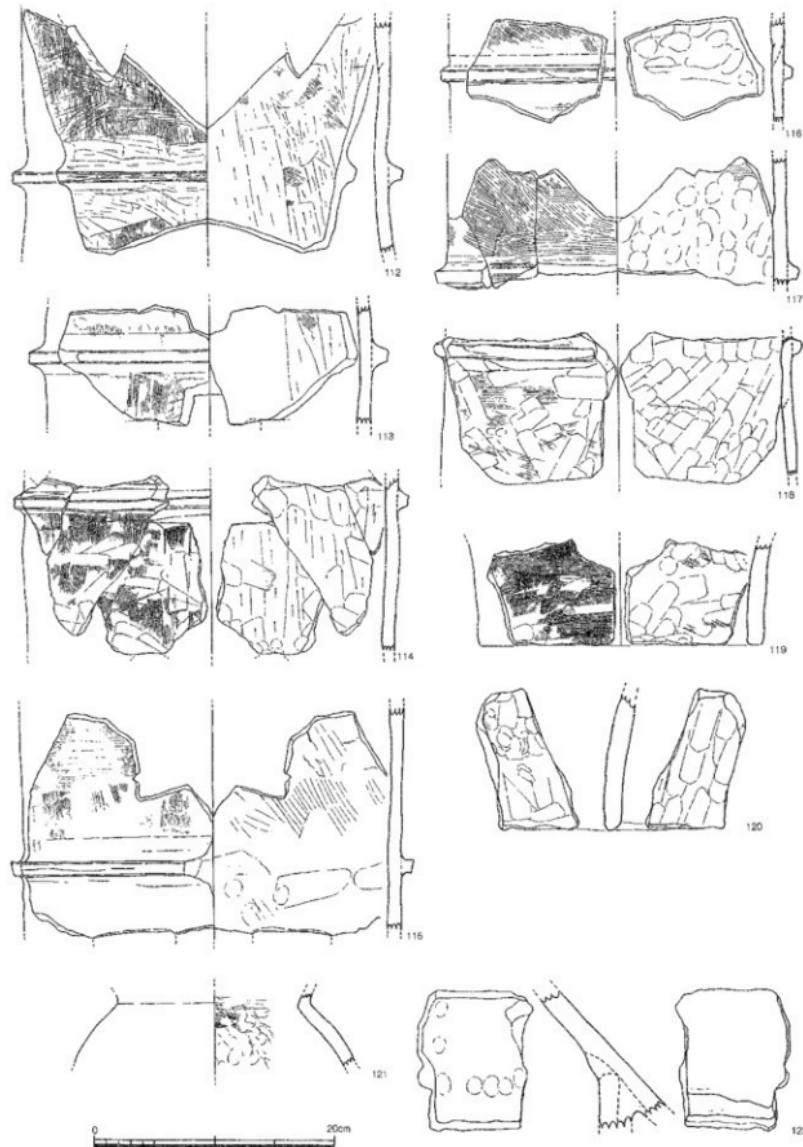
口縁部高は99、100が6cm、103が5.8cmで当古墳の標準的な数値である。一方、104は最上の突帯を欠くが、8cm以上を測る。口縁部形態や胎土の色調からはトレンチ1の44と類似しており、少数派の形態といえる。口縁部は104で口縁部下端を肥厚させるが、他はあまり肥厚せず、端部のナデも強くはない。口縁部外面は斜めハケをナデ消している。全てハケの消えた例もあるが、消しきれずハケをわずかに認める例が多い(99、100、102、104、105)。



第39図 トレンチ4 遺物出土状況図 (1/30) (1/8)



第40図 トレンチ4 出土遺物(1) (1/4)



第41図 トレンチ4 出土遺物(2) (1/4)

口縁部内面は全て丁寧なナデが見られる。

突帯は端部を強くなる例(99、112、113)や尖り気味に丸くおさめる例(100、103、106)がある。また、台形をなす例(116~118)や突出の短い例は少数派で橙色の埴輪に多い傾向がある。106は突帯を縱位にきり、他の粘土を貼り付けていたようである。刺突痕が見られる。鋸が付いていたのであろうか。

外面調整は一次調整の縱ハケが明晰に残る例(100)、縱ハケをナデで一部消している例(112、114)がある。一方、縱ハケの後横ハケを施す例として115、117がある。115は残存状態がよくないが、縱ハケの上からストロークの長い回転の横ハケが見られる。117はストロークの短い横ハケを施し、その後に左斜め方向のハケを施す。

一部突帯が剥離しているが、剥離面には横方向の沈線が見られ、方形刺突と異なる。

内面調整はケズリが多いが、ハケ・ナデの例も多い。ケズリは全て下から上に施しているが、ケズリとケズリの間にハケ・ナデ痕の残る例も多い。内面をハケ・ナデ調整する事例(116~118)は比較的橙色の埴輪片に多い傾向がある。

透孔は全形の判明するものはないが、部分から三角形(108、112)や曲線(109、110)がある。114は突帯直上と突帯下11.6cmの2ヶ所確認できる。古い透孔は段を逆えて直交する関係ではなく、近い位置にあり、かつ、突帯に近い場所に穿孔している。1段に複数の透孔が施されていた可能性がある。なお、1個体で2ヶ所以上の透孔は114と121の2例で確認できる。

底部は3点中2点を図化した。自重による粘土のはみ出しはあまり見られない。119は外面下端部まで丁寧な横ハケを施し、内面も丁寧なナデが見られる。下端部は平坦に仕上げている。120は軟質な胎土のため判然とはしないが、比較的丁寧な調整が指摘できる。

赤色顔料は多くで外面に確認できる。101、103、106、107には見られないが、剥落したものと考えられる。102は保存状態が良好で、口縁部内面にまで顔料が確認できる。

114は胴部に線刻が見られる。線刻は長さ7cm、幅1.5cmの長方形を呈する。一部不明瞭であるが、上端に向ってやや外反して広がっている。上端は突帯下端で、線刻の有無は欠損のため不明で

ある。

121は壺形埴輪の可能性が強い。頸部が薄い。内面は指押さえ、ナデが見られるが、クラック状のひび割れが見られる。

122は家形埴輪片か?壁と屋根の接合部として図化した。内外面にナデ調整が見られ、内面には指押さえが顕著である。

(5)トレンド5

①出土状況

すべて表土からの出土である。2.3m地点の中央付近は15個体がまとまっていた。異なる複数の個体が見られ、接合関係はわずかであった。これらの中で2点を図化した。

②遺物について

123は底部であるが種類は不明である。外面から見て左側は縦位の破面があるが、内部まで黄橙色を呈しており、透孔になる可能性がある。また、右面は同じく破面で器殻が極めて薄い箇所がある。円筒埴輪のような筒型の形態ではない可能性がある。底部下端は平坦ではあるが、段が見られ丁寧な調整とはいえない。124は1辺以外破面である。残存する1辺の表裏面は一方がナデによって辺に沿って凹み、一方が凸って縁を形成している。その内側は表裏面ともハケが見られる。種類は特定できないが、形象埴輪片であろう。

(6)畠地

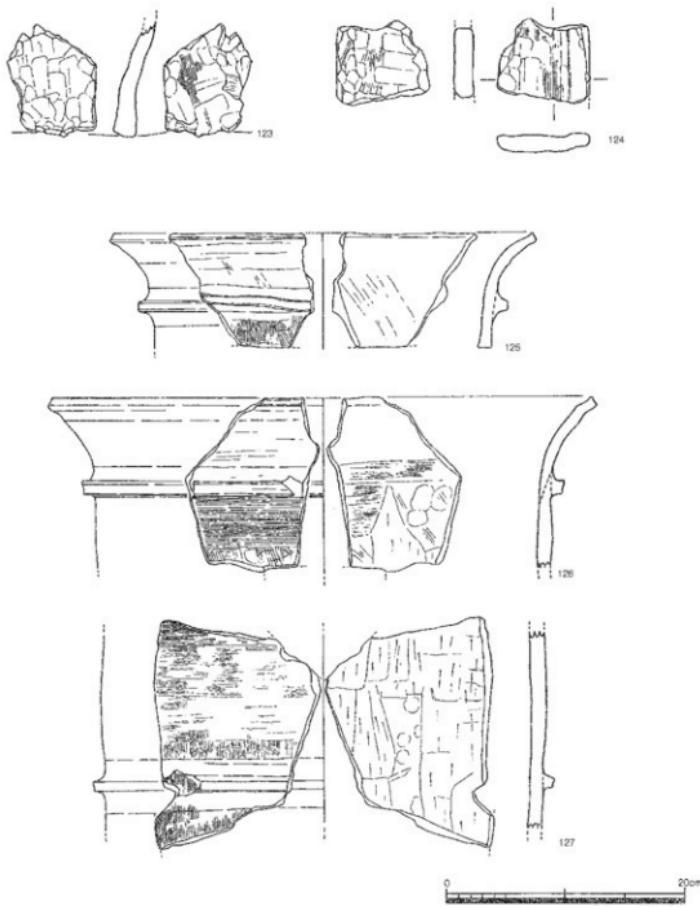
①出土状況

畠地の南壁は古墳に続く尾根の主軸にあたる。壁面精査によって葺石が確認されたが、遺物は葺石と混在するか、その下部で出土した。特に墳丘傾斜面に散乱する葺石の下部には保存状態のよい円筒埴輪片が見られた(125~127)。

②遺物について

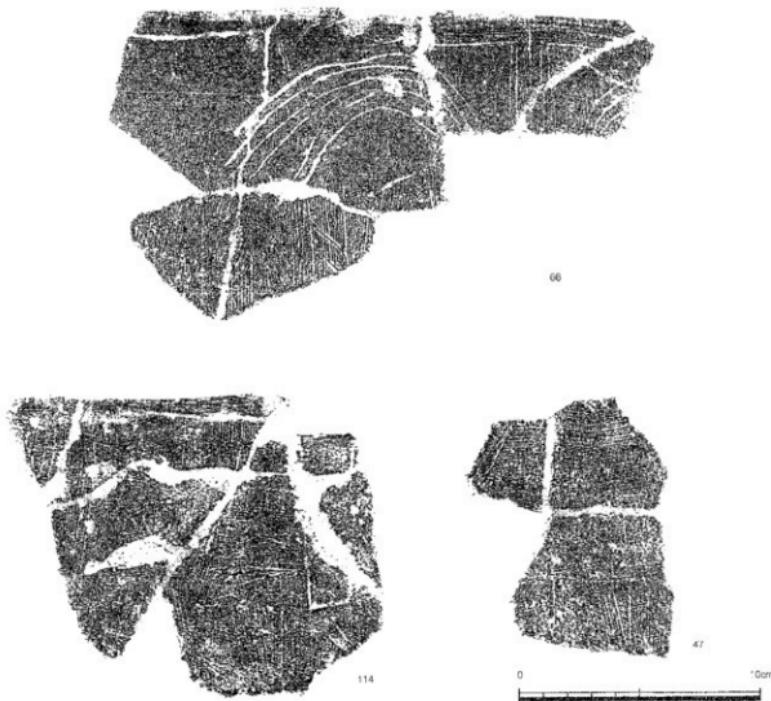
全て円筒埴輪である。125は口縁部高約5.5cmを測る。口縁部の内外面はナデによってハケがほぼ消されている。突帯下3cmに横に直線の透孔が見られる。内面は斜めハケがかろうじて確認できる。

126は口縁部高約7cmを測る。内外面は横ナデ仕上げであるが、一部消されずに残った回転横ハケが見られる。突帯からその下4.5cmまではストロークの長い横ハケが見られ、その下位には一次



第42図 トレンチ5 烟地出土遺物 (1/4)

調整の縦ハケが見られる。透孔は突帯から6cm下に確認できる。127は円筒埴輪輪脚部である。突帯から上で回転の横ハケが見られる。また、突帯上9cmと、突帯下1cm付近の2ヶ所に透孔が見られる。上方は三角形である。114と同様に互いの透孔は段を逆えて直交する関係ではなく、近い位置にあり、かつ、突帯に近い場所に穿孔している。1段に複数の透孔が施されていた可能性がある。



第43図 線刻埴輪拓影図 (1/2)

色調	Tr 1	Tr 2	Tr 3	Tr 4	計
浅黄橙	465	325	148	309	938
橙	68	60	39	95	167

表2 色調のカウント
(全破片をカウント)

外面調整	Tr 1	Tr 2	Tr 3	Tr 4	計
浅黄橙(縦ハケ)	11	19	6	22	58
浅黄橙(横ハケ)	0	2	3	3	8
浅黄橙(ナデ・不明)	7	19	6	11	43
橙(縦ハケ)	4	1	2	3	10
橙(横ハケ)	0	0	1	11	12
橙(ナデ・不明)	5	12	7	6	30

表3 色調ごとの外面調整
(突帯の破片をカウント)

内面調整	Tr 1	Tr 2	Tr 3	Tr 4	計
浅黄橙(ケズリ)	28	30	11	22	91
浅黄橙(ハケ・ナデ)	20	8	5	15	48
橙(ケズリ)	0	0	0	0	0
橙(ハケ・ナデ)	12	13	10	16	51

表4 色調ごとの内面調整
(突帯の破片をカウント)

第5章まとめ

第1節 墳丘の特徴について

(1) 堀切りについて

平成14年(2002)の広島大学考古学研究室による測量調査において古瀬清秀氏は「後円部西側の裾は、やせ尾根の小さな高まりと幅6m前後の溝で切り離されている」と指摘している。今回の調査のトレンチ2ではこうした掘切を検証すること目的の一つとした。結果、墳丘裾から外側に標高31.6mの平坦地が約4.6m続き、西側は尾根に向って地山の立ち上がりが確認できた。尾根は強い傾斜で立ち上がった後、緩やかに上方に延びていており、約6mの掘切りを確認できた。一方、前方部も裾から外側で長さ2mの平坦地が見られ、そこから東にはゆるやかに立ち上がっていた。トレンチ5において立ち上がりの上場を確認したが、深度約20cmと浅い。堀切りというよりは墳丘を区画するための整形といった方がいいかもしれないが、墳丘を自然地形と区画するような意図が後円部、前方部の両端で確認できたことは重要である。そして、それぞれ底場の標高は約31.6mで同値である。

(2) 墳丘裾の基盤について

同じく平成14年の測量調査において古瀬清秀氏は墳丘がほぼ水平な基盤上に構築されていると指摘している。上記したように後円部後方と前方部先端の裾は標高31.6mで一致する。そして、さらに後円部北のトレンチ1、後円部北西のトレンチ3も同様に標高31.6m付近が墳丘裾となった。それぞれ墳丘裾の外側はテラスを認め、地山が水平に整形されている。よって、墳丘は水平な基盤上に構築されていることが明らかとなった。テラス幅は各トレンチで異なっている。トレンチ1、トレンチ3ではテラスの外側はゆるやかに自然地形が傾斜している。

(3) 外表施設について

外表施設として葺石は各トレンチで確認できた。ただし、多くは崩落した状態で検出され、ほとんどが下位に埴輪片が確認できた。昭和26年の調査時には後円部が開発された時に多数の割石や埴輪を見出したことが聞き取りされており、事実、トレンチ1では墳丘傾斜面の下半の葺石が崩され、上半がかろうじて残存している状態で検出されている。原位置を保つ葺石はトレンチ1、トレンチ2では基底石数石であったが、トレンチ4では比較的良好で、4段の葺石が確認された。最下段に大型の石材を設置し、上段は墳丘に対して斜めに

差し込むように人頭大の石材が小口積されており、一つ山古墳の葺石構造と類似することが判明した。トレンチ1では墳丘裾の岩盤を掘り込み、その中に基底石を設置する特異な構造が認められた。

埴輪も葺石とともに崩落した状態で見られ、原位置を保つ事例は確認できなかった。多くは墳丘裾に集中するが、墳丘傾斜面からも確認できることから、上位の段築からの転落も想定される。なお、昭和4年(1929)に確認された南側くびれ部付近の円筒埴輪列は、墳丘復元によると、段築のテラスに位置する可能性がある。底部片の多くは表土からの出土であり、埴輪列が残存している可能性は強い。形象埴輪片は前方部先端、後円部北側で確認しているが、底部と同様に表土からの出土である。前方部先端は家形埴輪の可能性があるが、出土地点の西側では昭和26年調査時において形象埴輪片が確認されている。

第2節 墳丘規模について

トレンチ1・2・3では墳丘裾の基底石或は傾斜変換点が確認され、3ヶ所において墳丘裾が確認できた。これら3ヶ所から墳丘の中心を導き出すと、現在の祠のやや南側に位置する。この地点は現状の地形からは墳丘頂部の中心にはならないが、昭和26年測量図と重ね合わせると4枚の天井石のはば中に位置する。測量図の精度等考慮すべき点はあるが、埋葬施設は墳丘の中心に位置するといえる。

墳丘の中心から後円部径を導き出すと、径約38mとなり、これまで想定されていた31mからは約7m大きくなつた。墳丘裾は水平で標高約31.6mで、墳丘頂部は37.6mである。よって後円部高約6mである。

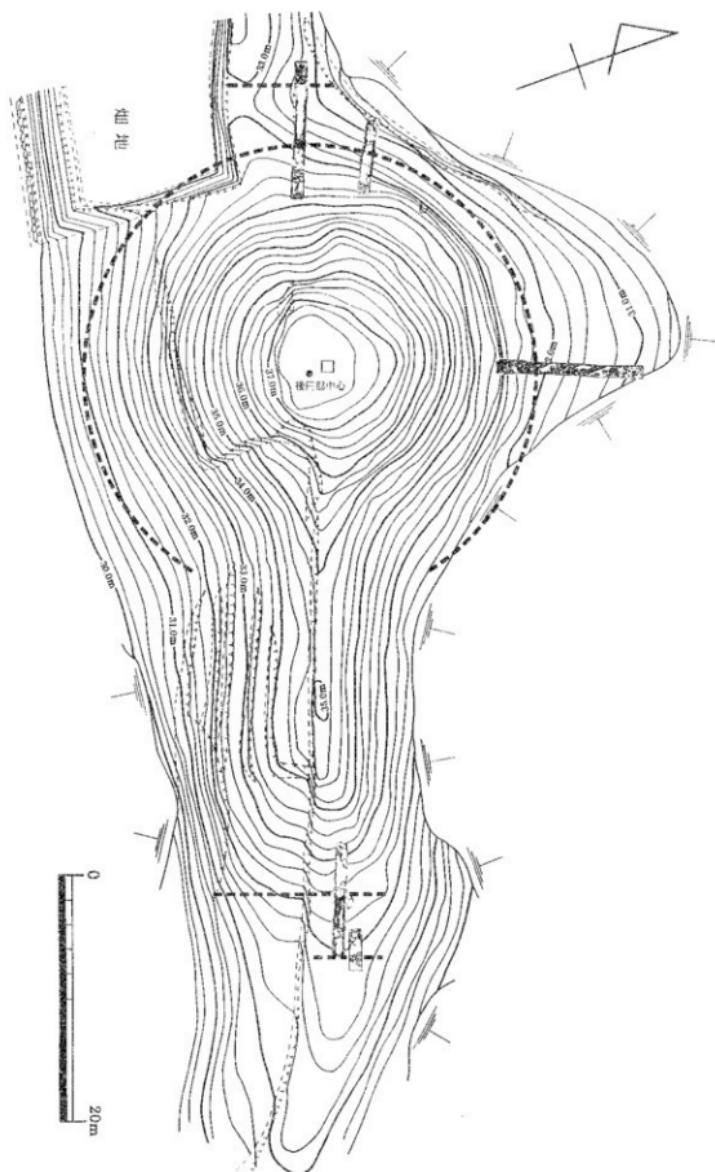
前方部は前方部先端の裾で標高31.6mを測る。前方部頂の最高所で標高約35mを測ることから、前方部高は約3.4mである。

全長は61.8mを測る。

第3節 円筒埴輪について

各トレンチから多量の埴輪片が出土した。円筒埴輪以外は後円部北側のトレンチ1、後円部西側のトレンチ3、前方部先端のトレンチ4・5から各1点形象埴輪片が、トレンチ1・4で壺形か朝顔形埴輪片が数点出土している。また、鱗の可能性のある例がトレンチ2・4で3点出土している。その他の今回確認した多くは円筒埴輪片である。以下に岩崎山4号墳円筒埴輪の特徴と意義付けを行いたい。

まず各部ごとに特徴を以下にまとめた。



第44図 墓丘復元図(1/400)

(1) 岩崎山4号墳円筒埴輪の特徴

①口縁部

最上の突帯から外反する。口縁部高は5.5~6cmが多い。若干10cmの事例がある。口縁端部はナデによって面をなすが、強いナデではない。上端部はナデにより上方につまみ出している例もあるが、顕著ではない。口縁部高10cmの44、104は下端部を引きのばし端部は明瞭な面をなす。

外面は丁寧な横ナデが見られる。外面は一部ハケを残すが、内面のナデは丁寧である。

②胴部外面調整

胴部外面は一次調整の継ハケ或は斜めハケを明瞭に残す例とその後に横ナデを施す例が主体である。一方、一定量であるが二次調整の横ハケが見られる。横ハケはストロークの長いものが多く、幅も4~7cmと広く、10cmの例もある(127)。117はストロークの短い横ハケであるが、横ハケの後に斜めハケを施している(117)。ハケ原体は1cm幅で7~8条が多い。

③胴部内部

内面は継ケズリが多い。全面に密にケズリが見られる例と、ケズリ間に隙間があり、一部ハケ、ナデが残っている例もある。一方、ナデ、ハケも一定量確認できる。44は内面にハケが顕著に見られる。内面調整は埴輪の色調と密接な関わりがあり、これについては後述する。

④突帯

幅2cm、高さ1cmの例が多い。端部に強いナデを施す例と、丸くおさめて先端の尖る例がある。後者は最上の突帯に多いが、それ以外にも確認できる。下端は接合ラインの見られる例が多く、剥離した例も多い。剥離面には方形刺突がしばしば見られるが、2点、横方向の沈線が見られた(117)。

⑤透孔

透孔は全形が残る事例ではなく、破片から判断するに、方形、三角形、凸形、曲線(半円?)形が確認でき、種類が多い。破片のカウントでは斜位の透孔の事例が多く、三角形の透孔が一番多いと推測する。1埴輪片で2ヶ所の透孔が見られる例として114と127がある。114は突帯直上に127は突帯直下に各段やや配置をずらして穿孔されている。透孔の位置は突帯から5~6cm離れている例と、1~3cmの近接する例が多いが、数値は一定していない。突帯間は66からは約18cmが指摘できるため、前者は突帯間の中位に位置する可能性がある。

	Tr 1	Tr 2	Tr 3	Tr 4	計
横位(突帯)	10	9	3	8	30
横位	3	1	1	3	8
継位	4	4	0	3	11
曲線	0	4	0	3	7
斜位(三角)	10	3	6	11	30
凸位	3	3	1	0	7
不明	4	2	0	8	14

表5 透孔の分類(横位(突帯)は突帯を含む破片の透孔)

	cm	Tr 1	Tr 2	Tr 3	Tr 4	計
突帯下	1~2	2	4	0	2	8
突帯下	2~3	0	1	2	1	4
突帯下	3~4	1	1	0	1	3
突帯下	4~5	2	2	0	2	6
突帯下	5~6	1	4	0	0	5
突帯下	6~7	1	0	0	0	1
突帯下	7以上	1	0	0	1	2
突帯上	7以上	0	1	0	2	3
突帯上	6~7	0	0	0	0	0
突帯上	5~6	0	0	0	0	0
突帯上	4~5	0	0	0	0	0
突帯上	3~4	1	0	0	0	1
突帯上	2~3	0	0	0	0	0
突帯上	1~2	0	0	1	1	2

表6 透孔の位置

⑥線刻

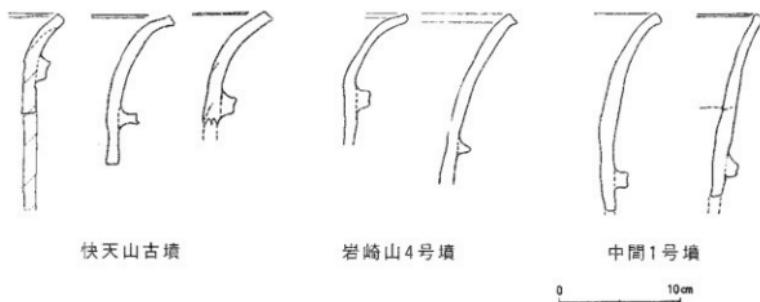
胴部外面に線刻の見られる例が3点ある。47(トレチ1)と66(トレチ2)は透孔の周囲に線刻されている。47は三角形の一辺に平行して直線が線刻され、66は、方形或は凸形の透孔の上片にT字形や波状の線刻が見られる。114(トレチ4)は突帯下に継位の長方形を線刻している。上方がやや広がっている。

⑦赤色顔料

大多数の外面に赤色顔料が確認できる。よって確認できない例も剥落した可能性が強く、本来は全ての円筒埴輪に塗布されていたと想定できる。口縁部内面は基本的に認められないが、確認できる例もある(102)。

⑧色調

色調は浅黄橙色と橙色に判別できる。浅黄橙色が多く、浅黄橙色938点に対して橙色167点である。また、色調と胴部内面の調整方法が密接に関わる。つまり、橙色は全て内面がナデ・ハケで、ケズリが確認できない。一方、浅黄橙色はケズリが主体であるが、ナデも比較的確認できる。よって、製作手法の異なる集団の存在が推測される。なお、國木健司氏は岩崎山4号墳円筒埴輪について「2者以上の製作集団が存在した可能性」を指摘している。



第45図 円筒埴輪 口縁部高と突帯の比較 (1/4)

(2) 時期的な位置づけ

以上でまとめた諸特徴から時期を考察する上での口縁部、胴部調整、突帯形を俎上にのせる。

口縁部は最上の突帯から外反して5.5~6cm立ち上がる。類似例が多いのは快天山古墳出土円筒埴輪(以下では快天山例と記述)である。一方、少数派として口縁部高10cmの事例があり、同例として中間西井坪遺跡例がある(以下では中間例)。

胴部調整は外面縦・斜めハケ、内面ケズリが多く、これも快天山例と共通する。ただし、相違点としてストロークの長い横ハケがしばしば見られること、縦・斜めハケの後にナデ調整が見られることが挙げられる。横ハケは時期差を示す要素であり、岩崎山4号例が快天山例に後出する重要な要素である。中間例との関係で見るならば、口縁部形態や内面調整は岩崎山4号例と快天山例の方が近く、快天山例→岩崎山4号例→中間例の変遷を想定したい。快天山例との時期差を示す要素として他に突帯があり、端部のナデの強さ、突帯高は岩崎山例の方に退化現象が認められる。

(3) 意義づけと今後の課題

上記以外で快天山例との比較を行うと法景、色調、器壁の厚さ、透孔に相違点がある。岩崎山例は多くが胴径30cm前後で40cm例は少ない。色調は浅黄褐色、橙色の2種類である。絶じて快天山例のようなバリエイションは認められないといえる。出土部位や法量と関わるが、器壁は岩崎山例に対して快天山例は厚い傾向にある。

透孔は快天山例、中間例等と比較して種類の多さが目立つ。方形、三角形、凸形、曲線(半円?)形が確認できたが、種類の多さに加えて突帯間の透孔の位置にも多用さが認められる。こうした特徴は時期差を

示す要素でもあるが、快天山例や中間例との比較の上でもしろ地域差、埴輪集団の差、またはその背景にある支配者の性格の差として着目するのも興味深い。

これまで鶴の部山古墳、一つ山古墳、赤山古墳と調査を行なってきた。一つ山古墳、赤山古墳の埴輪片の多くには外側に赤色顔料が認められた。岩崎山4号墳からは多量の円筒埴輪片が出土し、赤色顔料はほぼ全てに塗布されていたと推測することが可能である。赤色顔料の塗布が津田溝の他の古墳で同様に認められるか課題である。

今後、津田溝の古墳の調査を継続する中で当地域の埴輪についてさらなる特徴や変遷が見えてくるものと思われる。

(参考文献)

- ・阿河銳二〈2001〉「岩崎山古墳群」
- 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成11年度』
- ・大久保徹也〈1996〉
- 『中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他
- ・大久保徹也〈2004〉『快天山古墳発掘調査報告書』
- ・(1853)『讃岐国名勝図会』
- ・香川県史蹟名勝天然記念物会〈1930〉
- 『岩崎山古墳』『史蹟名勝天然記念物調査報告 第5回』
- ・國木健司〈1990〉『富田茶臼山古墳発掘調査報告書』
- ・津田町教育委員会〈1959〉『津田町史』
- ・中山城山〈1828〉『全譜史』
- ・樋口隆康〈2002〉『岩崎山4号古墳』津田町教育委員会
- ・長町彰〈1916〉『讃岐四大山古墳岩崎山古墳』『考古学雑誌7-3』
- ・古瀬清秀〈2002〉『岩崎山古墳群の地形測量』
- 『岩崎山4号古墳』津田町教育委員会
- ・松岡謙〈明治中期〉『新撰讃岐国風土記』

図版番号	種類	口径	溝	溝径	器厚	ダガホ高	調査(外側)		調査(内側)		
							横	土	横	土	
32	19	円筒	34	0.8~1.3	1.5	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	40	円筒	30	1~1.1	1	浅縁(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	41	円筒	0.7~1.1	0.8	1.5	浅縁(10YR7/3)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	42	円筒	0.7~0.9	1.2	1.5	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	43	円筒	0.7~1.1	0.9	1.5	浅縁(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	44	円筒	0.9~1.2	1.1	1.5	切口(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	45	円筒	28	0.9~1.25	1.3	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	46	円筒	24.3	0.8~1.1	1.3	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	47	円筒	29	0.9~1.3	0.9	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	48	円筒	32.4	1~1.3	0.9	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	49	円筒	33	1~1.3	1.1	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
32	50	円筒	33	1~1.3	1.1	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	52	円筒	39.8	1.5~1.9	1.1	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	53	底部	1.5~1.7	1.1	1.5	浅縁(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	54	底板	1.5~1.7	1.1	1.5	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	55	底盤	1.5~1.7	1.1	1.5	浅縁(10YR7/3)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	56	底盤	0.8~1.4	1.2	1.5	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	57	底盤	0.8~1.4	1.2	1.5	浅縁(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	58	底盤	0.8~0.9	1.0	1.5	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	59	底盤	32	1~1.4	1.5	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	60	底盤	8.2	0.8~1.8	1.5	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
33	61	上部	37.2	29	0.7~1.0	1.1	浅縊(10YR7/3)	1.5	石、赤	1.5	石、赤
35	62	円筒	35.4	0.5~0.9	1.1	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	63	円筒	36.6	0.7~0.9	1.1	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	64	円筒	29	0.7~1.2	1.2	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	65	円筒	1~1.1	1.2	1.2	浅縊(10YR7/3)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	66	底盤	28.4	1.6~2.2	1.6	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	67	底盤	30.6	1.2~1.6	1.6	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	68	底盤	30.6	1~1.5	1.5	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	69	底盤	30.6	1~1.4	1.5	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	70	底盤	32	0.4~0.6	1.2	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	71	円筒	26.5	0.8~1.1	1.1	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	72	円筒	28.5	0.8~1.2	1.1	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	73	円筒	0.8~1.2	1.1	1.5	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
35	74	円筒	0.8~1.2	1	1.5	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	75	円筒	27.7	1~1.2	0.8	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	76	円筒	30.6	0.9~1.2	1.2	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	77	円筒	32	1.0~1.1	1.2	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	78	円筒	35.9	1~1.2	0.9	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	79	円筒	32.2	1~1.2	1.3	浅縊(10YR7/6)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	80	円筒	35	0.8~1.5	1	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	81	円筒	30.6	1~1.3	0.8	浅縊(10YR7/3)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	82	円筒	31.2	0.9~1.1	1	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	83	円筒	25	0.9	1	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	
36	84	円筒	—	0.9~1.1	1	浅縊(10YR7/4)	1.5	石、赤	1.5	石、赤	

法単位はcm、胎土=長石・石・石英、赤=赤色鉄

表7 岩崎山4号墳出土遺物観察表1

図版番号	種類	地質	断面	器厚	タガ高	外	内	胎土	調査(外面)	調査(里面)	ハケテナメ	備考
36	85	円筒	0.9~1	浅煎(2.5YR7/4)
36	86	円筒	0.8~1	浅煎(2.5YR7/3)
36	87	円筒	0.9~1.1	1:6.5, 扇形(10YR7/4)
38	88	円筒	37.4	0.7~1.2	1
38	89	円筒	28	1.1~1.2	1.1
38	90	円筒	30.4	0.8~1.2	0.9
38	91	円筒	35	0.9~1.2	0.7	1:5.5, 扇形(10YR7/4)
38	92	円筒	1.1~2.4
38	93	円筒	0.8~1.0
38	94	円筒	1~1.5	0.8	浅煎(10YR8/4)
38	95	円筒	0.8~1.2
38	96	円筒	0.9~1.3
38	97	彎曲部	1.6~2.1
38	98	彎曲部	1.5~2.5
40	99	円筒	30.0	24	0.9~1.4	0.9	浅煎(10YR7/3)
40	100	円筒	31.8	26.6	0.7~1.2	1.1	浅煎(2.5YR7/3)
40	101	円筒	30.6	0.7~1.2	1.2
40	102	円筒	30	0.9~1.1	1.2
40	103	円筒	39.8	33	0.8~1.4	1.1
40	104	円筒	0.7~1.1
40	105	円筒	0.8~1.2
40	106	円筒	0.5~0.9	0.4
40	107	円筒	1.1	1:5.5, 扇形(10YR7/3)
40	108	円筒	1.1
40	109	円筒	1.1
40	110	円筒	1~1.1
41	111	円筒	1.1
41	112	円筒	30.6	1~1.3	1.2
41	113	円筒	27	0.9~1.1	1.4
41	114	円筒	31.2	1~1.1	1
41	115	円筒	32	0.9~1.1	1.1
41	116	円筒	28	0.9~1.2	0.7
41	117	円筒	28	0.9~1.2	1
41	118	円筒	29.3	0.8~1	0.9
41	119	底部	底4	1.4
41	120	底部	1.5~1.7
41	121	底部	底16	0.8~1.1
41	122	底部	1.7~2.7
42	123	底部	1.2~2
42	124	底部	底8	1.6
42	125	底部	底4.8	0.7~1.1	1.1
42	126	底部	44.5	0.9~1.2	1.1
42	127	底部	37	1~1.4	1

法量単位はcm、胎土[長×高×厚]cm³

岩崎山4号墳出土遺物観察表1



1 調査前状況①(南西側)



2 調査前状況②(南西側)



3 調査前状況③(南西側)



4 調査前状況④(南東側)



5 調査前状況⑤(南東側)



6 トレンチ7下段眞石検出状況①



1 トレンチ7下段葺石検出状況②



2 トレンチ7下段葺石平坦面検出状況



3 トレンチ7下段葺石基底石検出状況



4 トレンチ7上段葺石検出状況①



5 トレンチ7上段葺石検出状況②



6 トレンチ7・8 調査状況①



1 トレンチ8 莢石検出状況①



2 トレンチ8 莢石検出状況②



3 トレンチ7・8 調査状況②



4 トレンチ8 莢石基底石検出状況①



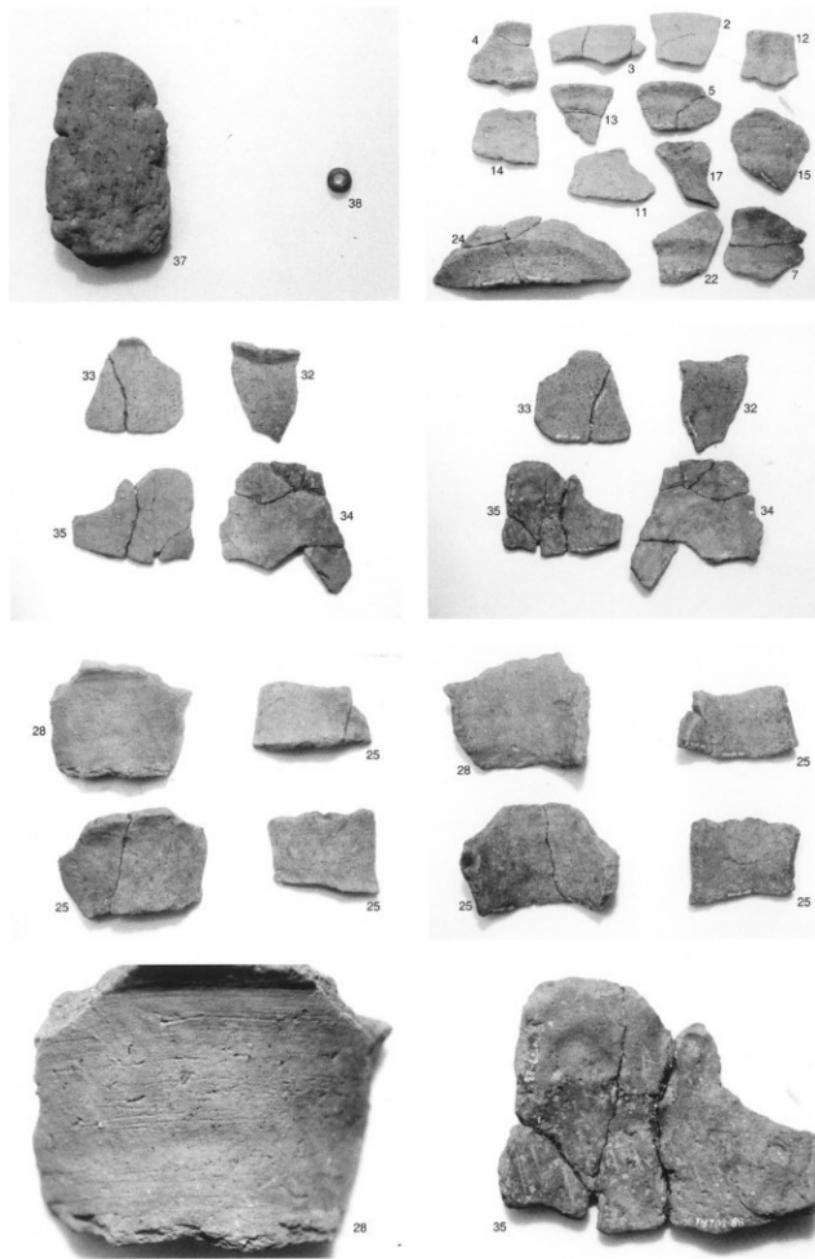
5 トレンチ8 莢石基底石検出状況②



6 トレンチ7・8 調査状況③



剝 拔 式 石 棺



出 土 遺 物



1 調査区周辺航空写真（昭和22年）



1 遠景（南から）



2 墳丘（前方部 東から）



1 後円部北側



2 後円部（北から 手前はトレンチ1）



1 トレンチ1(北から)



2 トレンチ1基底石



1 トレンチ2(西から)



2 トレンチ2(東から)



3 トレンチ2 基底石



1 トレンチ4（東から）



2 トレンチ4 基底石